

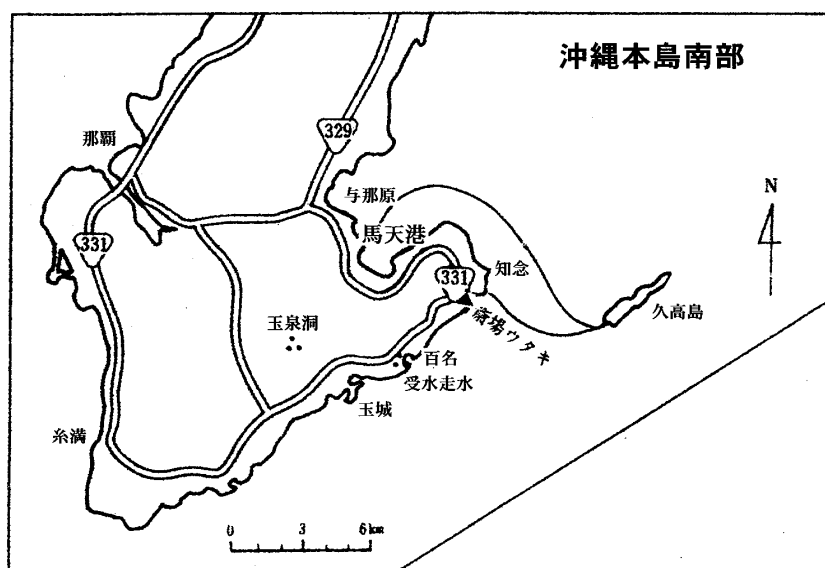
## 久高島の民俗語彙

福 治 友 邦  
加 治 工 真 市

### はじめに

平成5年4月より、毎週土曜日に沖縄県立芸術大学の加治工研究室において収録してきた久高島方言資料の中から、本稿では久高島方言の民俗語彙の部分を文字化して発表することにする。話者は福治友邦氏（大正14年9月30日生まれ）である。福治氏は久高島の民俗行事についても造詣が深く、消滅の危機に瀕した久高島の言語・民俗文化の記録保存に最大の関心と努力を払っている。今回の文字化作業を通じての語彙研究も氏の献身的な協力が無ければ不可能であった。特に未公開資料の『スォールイガナシ日誌』については、精確な久高島の言語・民俗文化研究のために、福治氏が敢えて貴重な資料の提供を決定されたのであった。言語の研究が民俗文化研究の基礎をなすと考えられたからである。我々は、今後とも可能な限り久高島方言の悉皆調査を実施し、近い将来において『久高島方言辞典』を刊行したいと願っている。

今回の研究発表に当たって、次の通り作業を分担することにした。質問表に対する情報提供者は福治友邦氏が担当し、録音と文字化の作業は加治工が担当した。文字化した一次原稿を福治氏に校閲して頂き、録音テープの聞き誤り等を指摘して頂いた。誤脱を修正、補筆して本原稿を作成し、さらに福治氏に確認していただいて完成原稿にまとめたが、今後指摘されるであろう、誤植等の文責は加治工が負う。読者諸賢のご批正を切に乞う。



## 久高島方言の音節表

イ	エ	ア	オ	ウ	ヤ	ヨ	ユ	ワ	ヲエ
[i]	[e]	[a]	[o]	[u]	[ja]	[jo]	[ju]	[wa]	[we]
ヒ	ヘ	ハ	ホ	フ	ファ	—	フユ	ファ	フェ
[çi]	[he]	[ha]	[ho]	[Φu]	[Φja]	—	[Φju]	[Φa]	[Φe]
キ	ケ	カ	コ	ク	キャ	—	キュ	クワ	—
[ki]	[ke]	[ka]	[ko]	[ku]	[kja]	—	[kju]	[kwa]	—
ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ	ギャ	—	—	グワ	—
[gi]	[ge]	[ga]	[go]	[gu]	[gja]	—	—	[gwa]	—
シ	シェ	サ	ソ	ス	シャ	—	シュ	—	—
[ʃi]	[ʃe]	[sa]	[so]	[su]	[ʃa]	—	[ʃu]	—	—
スイ	スエ	スア	スオ	スウ	—	—	—	—	—
[θi]	[θe]	[ra]	[θo]	[θu]	—	—	—	—	—
ジイ	—	ジャ	ジョ	ジュ	—	—	—	—	—
[çi]	—	[ça]	[ço]	[çu]	—	—	—	—	—
チ	—	チャ	チョ	チュ	—	—	—	—	—
[tçi]	—	[tça]	[tço]	[tçu]	—	—	—	—	—
[tçi']	—	[tça']	—	—	—	—	—	—	—
テイ	テ	タ	ト	トゥ	—	—	—	—	—
[ti]	[te]	[ta]	[to]	[tu]	—	—	—	—	—
ディ	デ	ダ	ド	ドウ	—	—	—	—	—
[di]	[de]	[da]	[do]	[du]	—	—	—	—	—
ピ <sup>°</sup> ヒ	ハ <sup>°</sup> ヘ	ハ <sup>°</sup> ハ	ホ <sup>°</sup> ホ	フ <sup>°</sup> フ	ピ <sup>°</sup> ヒヤ	—	—	—	—
[ <sup>p</sup> Φi]	[ <sup>p</sup> Φe]	[ <sup>p</sup> Φa]	[ <sup>p</sup> Φo]	[ <sup>p</sup> Φu]	[ <sup>p</sup> Φja]	—	—	—	—
ピ	—	—	—	プ	—	—	—	—	—
[p'i]	—	—	—	[p'u]	—	—	—	—	—
ビ	ベ	バ	ボ	ブ	ビヤ	—	—	—	—
[bi]	[be]	[ba]	[bo]	[bu]	[bja]	—	—	—	—
ニ	ネ	ナ	ノ	ヌ	ニヤ	—	—	—	—
[ni]	[ne]	[na]	[no]	[nu]	[nja]	—	—	—	—
ミ	メ	マ	モ	ム	ミヤ	—	—	—	—
[mi]	[me]	[ma]	[mo]	[mu]	[mja]	—	—	—	—

「 (上昇アクセント)    〴 (降下アクセント)    ッ (促音), シ (撥音), む[m]

## 民俗関係語彙

「アーミシー」[ʔa:miʃi:] (名)

女兒<小学生>のブランコ遊び。6月24日のハシャ「キー」[haʃaʔki:] (健康、家内安全の祈願)の時、「ウドゥンミャー」[ʔudummja:]の森でアンチャカー「ギー」[ʔanʃaka:ʔgi:] (ハマイヌビワ)の木の枝にブランコを吊るし、ブランコを漕いで遊んだ。ブランコは学校を卒業したメーラビ達を作った。

「アカトゥキンバイ」[ʔakatukiʔmbai] (名)

「アミル」シ「[ʔamiruʔʃi] (十月十三日に徳仁港で七つのヤルイに分宿してする豊漁祈願祭)の早朝、各家で作られる「おにぎり」。男子一人につき一個ずつ作られる。女性はそれを鹽に入れて七宿りへ持参した。「アカトゥキンバイ」の期間中、女性は七つの「ヤル」イ「[ʔjaruʔi] (宿り。仮屋)に入ることは出来ない。女性達は徳仁港の入り口で各ヤルイ担当の男性に「ンバ」イ「[ʔmbaʔi] (お握り)を手渡した。男達は漁獲した魚の味噌和えの刺身や焼き魚と一緒にンバイを食した。

「アカララ」キ「[ʔakararaʔki] (名)

御嶽名。「ユナンマ」[ʔjunamma] (ユナン浜)の浜の上にあるアカラ御嶽。

「アグルラキ」[ʔagururaki] (名)

聖域(御嶽)の名。久高島の島建ての人々が生活した所と伝えられている聖域。

「アサマティー」[ʔasamati:] (名)

外間殿と久高殿で執り行われる祭祀で、麦の穂祭り、粟の穂祭りに「アサマティー」[ʔasamati:] (朝祭り)と「ユーマティー」[ʔju:mati:] (夕祭り)が執り行われた。翌日の「ユーマティー」は失対事業があったため、「アサマティー」に変更された。祈願が終わって後、「シマジ」ク「[ʃimaʃiʔku] (地名)において、新しくスアムトゥになった人と前年にスアムトゥになった者7名がハブイを被って東方に向かい、7回廻る。廻り終わったら合掌する。

「アシクム」[ʔaʃikumu] (名)

ノロ、ニーガンに捧げる神酒を入れる酒器。朱塗りで格式の高い酒器。

「アスイビ」[ʔa ʔi bi] (名)

神前でノロや巫女(神女)たちが「スイル」ル「[ʔi ruʔru] (ティルル。神歌)を歌って踊りをする事。

ア「スイビルクマ」[ʔa ʔi birukuma] (名)

遊び場所。「遊び所」の義。ワラビン「シャーガ」 バンドウクマ「カイ」 トーカイ「エーツチ アスイビタン」[warabiʃʔa:gaʔ bandukumaʔkaiʔ to:kaiʔje:tʃi ʔa ʔi bitaŋ] (子供達が番所で隠れん坊をして遊んだ)。ワラビン「シャーガ アスイビン トウクマー」ミカ「シャー」 ナーン「タン」[warabiʃʔa:ga ʔa ʔi bin tukuma:ʔ mikaʔʃa:ʔ na:nʔtaŋ] (子供達の遊び場所は昔はなかった)。

遊ぶ。「アスイバン」[ʔa θi baŋ] (遊ばない)。「アスイビブشان」[ʔa θi bibuʃaŋ] (遊びたい)。「アスイリ」շշւոն [ʔa θi ri ʃu:ŋ] (遊んでくる)。「ワニン」アスイビン「wanig ʔa θi biŋ] (私も遊ぶ)。「アスイビスアー」ワツ「スァン」フトウ「ヤル」[ʔa θi biɾa: ʔa θi ʃaŋ ʔa θi ʃaŋ] (遊ぶことは悪いことだ)。「アスイビンチュヌ」man「ドゥーン」[ʔa θi binʃunu ʔa θi du:ŋ] (遊ぶ人が多い)。「ア「スィル」ー」ン「[ʔa θi ru: ʃu:ŋ] (遊んでいる)。「ドゥー」ヤ「アスィル」ーティ「ウヤ」ネー「ゴー」グチャー (クチ「ゲー」スァンキ[du: ʃa ʔa θi ru:ti ʔa θi ʃaŋ] go: ʃu:ʃa: (kuʃi ʃaŋ] (自分は遊んでいて、親に文句をいうなく口答えするな)。「アスィ」ラー「グ」ラン[ʔa θi ʃa: ʃaŋ] (遊んではいけない)。「アスィル」ータン「[ʔa θi ru:taŋ] (遊んでいた)。「アスィル」ーン「チュ」[ʔa θi ru:n ʃu:ŋ] (遊んでいる人)。「アスィ」ラー「ナラン」[ʔa θi ʃa: ʃaŋ] (遊んではいけない)。「ヤーガ」アスィ「ビン」シャコー「(アスィ「ビー」ヤ) ワニン アスィ「ピース」アー「[ja:ga ʔa θi ʃaŋ] (ʔa θi ʃa: ʃaŋ] (君が遊んだら私も遊ぶよ)。

父。「按司」の義か。久高島で「父」を「アチー」[ʔaʈi:]と呼ぶ家が一軒だけあった。

ああ!。「アッキヨー」 フガナー マーッ「チナー」[ʔakkijo: ɸugana: ma:tʃina:]  
(ああ!!。黄金のような可愛い子が亡くなってしまったのか!!)。

父。お父さん。「アッティミーグワー」[ʔattimi:gwa:] (次男叔父)。「グンチュグワー」[gunʈʌgwa:] (三男以下の叔父)。

父。「アチー」[ʔatʃi:] (父) ともいう。「チャーチャー」[tʃa:tʃa:] (父) という人もいる。「ウプフチャーチャー」[ʔupʔutʃa:tʃa:] (最年長の伯父。長男伯父)。

十干の壬、癸の日和。その月の中で後に回ってくる壬、癸の日和。

「アミウルシ<網下ろし>」の義。玉城間切百名から渡来して久高島の島建をしたというシラタル夫婦が「スックリン」[*ʃu kurin*]（徳仁港）で七箇所住まいを替えたという故事に基いて、旧暦11月13日から15日までの3日間に執り行われた豊漁祈願の祭祀である。近年は13日の1日だけで祭祀をすませている。住まいだった箇所は「ヤル」イ[*ʃaruʔi*]（ヤドゥイ<宿り>）と称されている。ヤルイには名称がある。祭りは徳仁港に「ナナヤルイ」[*nanajarui*]（七宿り）を作り、ノロや神職者にワーン「ネー」[*wa:nʔne:*]（御案内）をして竜宮の神に豊漁祈願をした。昔は二晩籠り、二泊三日かけて祈願したが現在は当日だけで終了する。「ヤル」イ[*ʃaruʔi*]（七宿り）は、徳仁港に向かって左から「チバイ」[*ʧibai*]、

「プフカマ」[pʰɸukama] (外間)、右側には、「ナントゥ」[nantu]、「メーマ」[me:ma]、「イキン」[ʔikig]が並ぶ。その下に、「スウヌチ」[θu nuʃi]、「ンギヤナ」[ŋgjana]が分かれて並ぶ。プフカマ、スウヌチ、ンギヤナの宿りは人数が多い。それぞれのヤルイの構成は従来の血縁関係と移住者の子孫によって組み分けられているが、血縁関係以外は明確な基準は見当たらない。13日の当日、各家では当家の主婦らが家族の男子の人数分の「ンバイ」[ʔmbai] (お結びく握り飯) を早暁に作る。それに添えて数個の「子ンバイく小さなお結び」を造り、スウクリン (徳仁港) に持参して、入り口で各ヤルイの担当者に手渡す。女子はこの祭りの間、中に入るのは禁じられている。このンバイは早暁に作るので、「アカトゥキンバ」イ[ʔakatukiʔmbaʔi] (暁ンバイく暁のお握り) という。男子は各ヤルイ毎に島の周辺で追い込み漁をして帰港する。漁獲した魚の中から「スォー」ルイ[ʔθo: ʔrui] (神職者く竿取り) が外間殿と外間ノロ家、久高ノロ家の「ミー」アムトゥ[mi: ʔamutu]に献上する魚を選ぶ。これを「ウタカムン」[ʔutakamuŋ] (献上物) という。ウタカムンをスォールイ竿のもとに置き、残りを七宿りに配分 (「スアマシワキ」[ʔamaʃiwa ki]く受け取り分を配分すること) する。その後各ヤルイ (七宿り) で魚を捌いて調理する。刺身にしたり、「ヤキイユ」[jakiʔiju] (焼き魚) に調理したりする。焼き魚は骨を取り去って味噌和えにすると美味である。「ヤル」イ[jaruʔi]の当番制で神酒を作り、七宿りの数の神酒が徳仁港の浜に並べられる。そこへ女の神職者、ノロ、根神以下の神職者、男性神職者、「スォー」ルイガナシ (二人) とハニマンガナシ、アカッチュミーが到着し、七尾の魚を並べて竜宮の神への祈願が執り行われる。祈願が済んだ後、各ヤルイではなおらい (直会) が行われる。男児が生まれた人や五、六歳の男児のいる人は、小船を作り、それにンバイを載せて家に持ち帰った。直会の後、「スォー」ルイが「ミー」アムトゥへ、ウタカムンを届けに行く。当番制で神酒を作る事を、「ミキアタ」イ[mikiʔataʔi] (神酒当番) という。「アミル」シの起源については、「最初に久高島に来た人を偲び、祀る祭祀である」という説もある。島建ての祖であるシラタル夫婦が玉城村百名から久高島へ渡って来て、スウ「クリン」[θuʔkurig] (徳仁港) の浜でナナヤルイ[nanajarui] (七宿り) をした故事に因んだ祭祀だというのである。

#### 「アむ」[ʔam] (名)

母 (名称)。お母さん。「アンマー」[ʔamma:] (お母さんく呼称) ともいう。ハミー「アむ」[hami:ʔam] (カメお母さん)。「ウトゥーアむ」[ʔutu:ʔam] (オトお母さん)。「ウンチョー」ワッ「ター アンマー ヤイビール」[ʔunʃo:ʔ watʔta: ʔamma: jaibi:ru] (この人は私の (母です)。アン「マー」マー「チガ」[ʔamʔma:ʔ ma:ʔʃiga] (お母さん、何処へですか)。「マー」チ「イメーガ」[ma:ʔʃi ʔime:ga] (何処へいらっしゃいますか)。

#### 「アムトゥジン」[ʔamutuʃin] (名)

「ミー」アムトゥ[mi: ʔamutu] (三箇所のアムトゥ。「フカマく外間殿の通称」。外間ノロ家。「クダカヌンドゥ」チく久高ノロ家)。

#### 「アムトゥハ」リ[ʔamutuhaʔri] (名)

「ミー」アムトゥ[<sup>ʔ</sup>mi:<sup>ʔ</sup>amutu] (外間殿、久高殿、外間根人家。「アムトゥ数」の義。アムトゥ毎に、の意)。

「アリン」[<sup>ʔ</sup>arig] (名)

きね (杵)。米や麦を臼に入れて搗くのに用いる木製の道具。アリン「シャーマ」ムジ  
ティチ「カラ」フー「ナシュタン」[<sup>ʔ</sup>arig<sup>ʔ</sup>ja:ma<sup>ʔ</sup> muʃi tiʃi<sup>ʔ</sup>kara<sup>ʔ</sup> Φu: <sup>ʔ</sup>naʃutaŋ]  
(杵で麦を搗いて粉にした)。

「アリンダチ」[<sup>ʔ</sup>arindaʃi] (名)

地名。1月下旬から2月上旬に行われる「ピースァチ」[<sup>ʔ</sup>pi:ʃaʃi] (大漁祈願祭)のとき、「  
ハビヤーン」[<sup>ʔ</sup>habja:ŋ] (カベール)の岬で「スイル」ル[<sup>ʔ</sup>θi ru<sup>ʔ</sup>ru] (ティルル。神歌)を  
謡った三箇所(三箇所)の聖域の一つ。

アン「サビーシェー」[<sup>ʔ</sup>an <sup>ʔ</sup>sabi:ʃe:] (句)

そうしましょう。

アンチャカー「ギー」[<sup>ʔ</sup>anʃaka:<sup>ʔ</sup>gi:] (名)

(植)和名、ハマイヌビワ。大木に成長する。「ハシャキー」[<sup>ʔ</sup>haʃaki:] (6月24日の健康  
祈願、家内安全祈願の祭祀)の時、女の子たちがブランコ遊びをするため、アンチャカ「  
ギー」の枝にブランコを吊るして遊んだ。

「アンマー」[<sup>ʔ</sup>amma:] (名)

姉。姉さん。「お母さん」にもいう。「姉」を「アンマグワー」[<sup>ʔ</sup>ammagwa:]ともいう。  
「アむ」[<sup>ʔ</sup>am]とは言わない。ハミン「マー」[hamim<sup>ʔ</sup>ma:] (カメ姉さん)。ウトウン「マー」  
[<sup>ʔ</sup>utum<sup>ʔ</sup>ma:] (オト姉さん)。「ハマンマー」[<sup>ʔ</sup>hamamma:] (カマ姉さん)。「スウルンマー」  
[<sup>ʔ</sup>θu rumma:] (ツル姉さん)。「ナビン」マー[nabim<sup>ʔ</sup>ma:] (ナベ姉さん)のように言う。

「イザイバナ」[<sup>ʔ</sup>iʒaibana] (名)

イザイホーの時に神女が頭にハチマキをして挿す紅、白、黄の花。

「イシンミー」[<sup>ʔ</sup>iʃimmi:] (名)

地名。

「イチャリグワー」[<sup>ʔ</sup>iʃarigwa:] (名)

拝所の名。外間殿の前にある拝所の名。「伊茶利小」と表記されている。アマ「ミヤー」ハ  
ンジャンナシー[<sup>ʔ</sup>ama<sup>ʔ</sup>mja:<sup>ʔ</sup>hanʃanaʃi:] (国建ての棒を持って回る神事)の時に外間殿で  
久高ノ口の指図により赤い棒を上下させ、国づくりの仕草をして回る拝所。

イ「フェー」[<sup>ʔ</sup>i<sup>ʔ</sup>Φe:] (名)

位牌。普通は「トートーメー」[<sup>ʔ</sup>to:to:me:] (位牌)という。「ウチャトー」[<sup>ʔ</sup>uʃato:] (お茶  
湯)を「ティーサ」チ「ジュウグニチ」[<sup>ʔ</sup>ti:sa<sup>ʔ</sup>ʃi<sup>ʔ</sup> ʃu:guniʃi] (朔日、十五日)に仏前に  
茶湯を供えた。昔は「ウブ」ク[<sup>ʔ</sup>ubu<sup>ʔ</sup>ku] (茶碗に飯を盛ったもの)も供えた。久高島で  
は位牌を島外に持ち出すことは禁止されている。次男三男でも位牌を持つことになってい  
る人は、島外で成功しても帰島して位牌を継いだ。昭和18年に西銘順碩氏が那覇市に住宅  
を構えたので位牌を那覇に移した。戦後はそれに倣って位牌を島外に移す人が多くなった

「イ<sup>゚</sup>ビ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔi<sup>゚</sup>bi〕 (名)

えび (海老)。伊勢海老。

「イライ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔirai〕 (名)

いざり (漁り)。夜火を焚いて魚を獲ること。「海人をとめ伊射里多久火能『万葉集 3899』」の義。<sup>゚</sup>ユビヤー 「イライ<sup>゚</sup>チ<sup>゚</sup> 「イキヤーマ マギ<sup>゚</sup>スアク ミーティ<sup>゚</sup> スウタ<sup>゚</sup> スアー<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔjubja: <sup>゚</sup>ʔirai<sup>゚</sup>ʔʃi <sup>゚</sup>ʔikja:ma magi<sup>゚</sup>ʔaku mi:ti<sup>゚</sup> θu ta<sup>゚</sup>ʔa:] (昨夜は漁りに行って大きな蛸を三匹獲ったよ)。「ミーティシャー<sup>゚</sup>マ ジュー<sup>゚</sup>ゴキン<sup>゚</sup> アタ<sup>゚</sup>スアー<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>mi:tiʃa:ma ju:ʔgokij<sup>゚</sup> ʔata<sup>゚</sup>ʔa:] (三匹で十五斤あったよ)。

イラキ<sup>゚</sup>ニンジャラ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔiraki<sup>゚</sup>ninʒara〕 (名)

麦を煮て捏ねたもの。

「イル<sup>゚</sup>ミ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔiru<sup>゚</sup>mi〕 (名)

費用。経費。「要る目」の義か。スイティ<sup>゚</sup>グワティ<sup>゚</sup> イルミ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>θi ti<sup>゚</sup>ʔgwati ʔirumi〕 (七月<お盆>の経費。七月分の費用)。スイティ<sup>゚</sup>グワティ<sup>゚</sup> イルミヤー ナマ<sup>゚</sup> シャー<sup>゚</sup>ピラネー<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>θi ti<sup>゚</sup>ʔgwati ʔirumja: nama<sup>゚</sup> ʃa:ʔbirane:] (七月<お盆>の経費はまだ来ていないですか)。鯉節製造業の船主は七月<お盆>の経費として船員の家に金を支給した。これを、ナカ<sup>゚</sup>ワタイ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>naka<sup>゚</sup>watai〕 (中渡し。中間支払い) という。

「インヌハナ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔinnuhana〕 (名)

聖域の地名。「ピースァチ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>pi:ʃaʃi〕 (1月下旬から2月上旬に行われる大漁祈願祭)のとき、「ハビヤーン<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>habja:ŋ〕 (カベール)の岬で「スイル<sup>゚</sup>ル<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>θi ru<sup>゚</sup>ru〕 (ティルル。神歌)を謡った三箇所の聖域の一つ。現在はここだけで祈願は行われるが、ノロが老齢でウツチュ神が代行しているため、ティルルは省略されている。

インヌ<sup>゚</sup>ヤー<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔinnu<sup>゚</sup>ʃa:] (名)

ニラーウ<sup>゚</sup>フヌシの神を司っていた神職者がいたが、この神は先代の外間ノロが「ウク<sup>゚</sup>イサギ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔuku<sup>゚</sup>ʔisagi〕 (祈願をして神職を廃止すること) したという。ウ<sup>゚</sup>フヌシガナシーの「ウグワンダティ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔugwandati:] (お願立て)に拝んで回る聖地。戦前は空き屋敷であったが現在はお宮を建てて拝んでいる。戦後になって拝むようになったもの。「ウ<sup>゚</sup>フヌシガナシー<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔu<sup>゚</sup>ʔunufiganafi:]の「ウグワンダティ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔugwandati:] (お願立て)は二月中旬の「ミンニ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>minni:] (干支のみ<壬、癸>の日)に行われ、ウ<sup>゚</sup>ブクイ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔubukui〕 (願解きの祈願)は12月に行われる。

「ウイレ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔuire:] (名)

復誦。「追い歌い」の義か。「ウイレ<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔuire:]とは、神歌を歌う際に、ノロ (音取り)が先に歌うと、それに続いて神女たちが復誦すること。正月のヘーナガーキーなどを、ノロが歌った後に神女達が復唱することをいう。

ウイ<sup>゚</sup>バー<sup>゚</sup>ウイバー<sup>゚</sup> ワカ<sup>゚</sup>バー<sup>゚</sup>ワカバー<sup>゚</sup>〔<sup>゚</sup>ʔui<sup>゚</sup>ba:ʔuiba: waka<sup>゚</sup>ba:ʔwakaba:] (句)

「古い葉は古い葉、若葉は若葉」の義。「譲り葉」のように親から子へと順序よく世を去りたいの意。親が子の供養をするような逆縁にならぬようにとの願望を述べたもの。

「ウインダカリ」[ʔuindakari] (固有)

地名。部落の境界を基に上の村。「シャン」ダカリ[ʃanˈdakari] (地名。部落の境界を基に下の村)。

ウガ「ミ」[ʔugaˈmi] (名)

フボー御嶽のこと。「拝み」の義か。

ウガ「ミン」[ʔugaˈmin] (動)

拝む。神仏を拝む。ウガ「ラン」[ʔugaˈran] (拝んだ)。「ナマ」 ウガ「ラー」 ナーン[ˈnamaˈ ʔugaˈraːˈ naːŋ] (まだ拝んでない)。「ワナー」 「キヤーチン」 ウガ「マン」[ˈwanaː ˈkjaːʃiŋˈ ʔugaˈman] (私は決して<どうしても>拝まない)。ウガ「ミバ」[ʔugaˈmiba] (拝みなさい)。ウガミ「ブシャン」[ʔugamiˈbuʃan] (拝みたい)。「ヤーヤ」 ウガ「マン」キ「バ」[ˈjaːjaˈ ʔugaˈmanˈkiˈba] (君は拝むな)。ウガ「ミバ」 スイミン「ムンヌ」[ʔugaˈmibaˈ θi mimˈmunnu] (拝めばよいのに)。「ヤーン」 ハー ウガ「ミバ」[ˈjaːŋˈ haː ʔugaˈmiba] (君も早く拝めよ)。

ウカ「ライ」[ʔukaˈrai] (名)

祈願の際に供える「お飾りの供物」のこと。盛り御飯など、三十五品の供物。

ウクク「バラ」[ʔukukuˈbara] (名)

女性。日常生活ではいわない。古謡に用いられている歌謡語。ウプフ「グロー」[ʔuːpʰuˈgu roː] (男性。成人男性。「大五郎」の義か) の対義語。

ウグワン「ダティ」[ʔugwanˈdati] (名)

「お願立て」の義。「ピー」マティ[ˈpiːˈmatiː] (火祭り) は旧暦1月吉日に「御願立て」、12月に「シリガプフー」[ˈʃirigapʰuː] (感謝祭。「ウブ」クイ[ˈʔubuˈkui] <感謝祭。願解き>ともいう)、「ウプフヌシガナシー」[ˈʔuːpʰunuʃiganaʃiː] (島民の健康祈願の祭り) は旧暦2月中旬の「ミンニー」[ˈminniː] (壬) に「御願立て」、12月にシリガプフー[ˈʃirigapʰuː] (感謝祭。「ウブ」クイ[ˈʔubuˈkui] <感謝祭。願解き>) が執り行われる。13年毎に執り行われたイザイホー祭りにもウグワンダティとウブクイが執り行われた。ウグワン「ダティ」[ʔugwanˈdati]の祭祀は、「ハハナ」[ˈpʰana] (花米。「クンゴーバナ」[ˈkundoːbana] <九合花米>) と「カンビン」[ˈkambin] (爛瓶。瓶子) 2本を供えて祈願し、「ウブ」クイ[ˈʔubuˈkui] (感謝祭) では「ウブ」ン[ˈʔubuˈŋ] (盛り御飯) や魚を供えて願解きをする。15歳から70歳までの男子の家族の婦女はイシキ浜で、各家族の男子一人につき三個ずつの石を拾い、それを持ち帰って床の間に飾っておき、十二月にはそれをイシキ浜に返す。ウプヌシガナシーの祈願は次の順序で執り行われる。①まず最初に外間ノロ家、久高ノロ家、外間殿の火の神に祈願する。その後外間殿の「ウプフグイ」[ˈʔuːpʰugui]の香炉に祈願する。②外間殿の次に「イチャリグワー」[ˈiʃarigwaː] (島造りの神、「アマミヤーハンジャナシー」[ˈʔamamjaːhandʒanaʃiː] <アマミコ神>を祀ってある所) を回り祈願する。イチャリグワーでは祈願が終わるとアマミヤーハンジャナシー神を司っている神女から神酒をノロに注いでもらう。③「ウプフンシミ」[ˈʔupʰuŋʃimi]で、係りの神女が祈願をする。④大里家で五



穀の神を祀ってある所で祈願をする。⑤シラタルンミヤーでの祈願。その後インヌヤーとアカララキ、ヤグルガーとハタスの二手に分かれ、後にイシキで合流する。⑥インヌヤーでの祈願。⑦ヤグルガーでの祈願。⑧ハタス（五穀の壺を埋めたところ）での祈願。⑨イシキ（五穀の壺を開けたところ）での祈願。⑩イシキ浜での祈願。クンゴバナ（九合花米）を供えてニライカナイに祈願する。その後に家族の当該男子一人につき三個ずつ小石を拾い、神人に祈願してもらって家に持参する。家の床に保管し、12月の「シリガプフー」[ʃiriga<sup>p</sup>Φu:]の「ウブ」クイ[ʔubu<sup>h</sup>kui]（大感謝祭）にイシキ浜に返す。⑪スォールイガナシーは外間殿と外間ノロ家、久高ノロ家のミーアムトゥとイチャリグワーに祭祀が終了したことを報告する。

「ウタティグワーン」[ʔutatigwa:n]（名）

イザイホーの「御願立て」の義。イザイホーの一ヶ月前に、三アムトゥといわれる外間ノロ家、久高ノロ家と外間殿、それにシラタル殿、ウプラトゥ家、ウブンシミ家の順にイザイホー祭りの御願立てが行われるが、それは午前中で終わる。御願立ては、花米だけで祈願される。ノロ根神、掟神の外、神職にある巫女、男性の根人と神職者が参加するが、午後のスァキマーイには、ノロ以下の神女だけ参加する。スァキマーイの順序は①ウガミグワー、②ウプフウガミ（フボーウタキと同じウタキにある）、③ワカリカサ、④ティリリカサ、⑤アンプシヤマ、⑥アグルラキ、⑦ミリリイツ、⑧フサティムイ、⑨ハンザナヤマ、⑩アララキ、⑪スベーラキを回る。この祈願の翌日から壬、ミズノト、戊、己の日を選び、七回スァキマーイを行う。最後となった1978（昭和53）年の戊午年のイザイホーでは⑤のアンプシヤマ以下はウトゥーシ（いわゆる遥拝）で祈願した。「ミーアムトゥヌ」ウグワン「ダティ ッチカラ」スァキ「ラキン」ウガリ「ナーチャラー」ミンニ「ビョーイ」ティティ「ニービョーイ ピースウティ」ナナ「ケーン」ウタキ「マーイ シュン ッチカラ」イザイ「ホーヌ マティーヤ スァリール」[mi:ʔamutunu<sup>h</sup> ʔugwan<sup>h</sup>dati tʃikara<sup>h</sup> ʔaki<sup>h</sup>rakiŋ<sup>h</sup> ʔugari<sup>h</sup> na:tʃara:ʔ<sup>h</sup> minni<sup>h</sup>bjo:i<sup>h</sup> titi<sup>h</sup>ni:bjo:i<sup>h</sup> pi:θu ti<sup>h</sup> nana<sup>h</sup>ke:n<sup>h</sup> ʔutaki<sup>h</sup>ma:i<sup>h</sup> ʃuŋ tʃikararu<sup>h</sup> ʔiðai<sup>h</sup>ho:nu<sup>h</sup> mati:ja<sup>h</sup> ʔa<sup>h</sup>ri:ru]（ミーアムトゥ＜外間殿、外間ノロ家、久高ノロ家＞への御願立てをしてから嶽々を拝んで、翌日からミズノエ＜壬＞の日、ツチノエ＜戊＞の日和を取って七回御嶽回りをする。それをしてからイザイホー祭りは執り行われる）。イザイ「ホーヌ マティーヌ」パハジ「マイヌ」チュティキ「メーヌ」ジュー「グワチ スウカ アトゥヌ」ウマヌ「ピーラ」ウグワン「ダター」シュン[ʔiðai<sup>h</sup>ho:nu<sup>h</sup> mati:nu<sup>h</sup> pΦaɕi<sup>h</sup>mainu<sup>h</sup> tʃutiki<sup>h</sup>me:nu<sup>h</sup> ɕu:<sup>h</sup>gwaɕi<sup>h</sup> θu ka<sup>h</sup> ʔatunu<sup>h</sup> ʔumanu<sup>h</sup>pi:ra<sup>h</sup> ʔugwan<sup>h</sup>data:ʔ<sup>h</sup> ʃuŋ]（イザイホー祭りの始まる一ヶ月前の十月十日以後のウマ＜午＞の日から御願立ては行う＜する＞）。

「ウコー」[ʔuko:]（名）

線香。「お香」の義。沖縄線香（幅約1、2センチ。厚さ約1.5ミリ。長さ約15センチの板状の線香）黒色で一枚の線香は6本の線香と数えられ、普通は二枚ずつ焚く。「ウコー」スァティーン[ʔuko: ʔati:n]（線香を立てる）。

「ウスアンデー」[ʔuʔande:] (名)

祈願の後のなおらい(直会)で「ウブンガナシー」[ʔubunganaʃi:](お供え物)を下げていただくこと。

ウシャギ「ムン」[ʔuʃagiʔmun] (名)

供え物。供物。

ウシャ「ギーン」[ʔuʃaʔgi:n] (動)

お供えする。ウカマガナ「シーネー ミキ ウシャギティ」ウグワン「シュン」[ʔukamaganaʔʃi:ne: miki ʔuʃagitiʔ ʔugwan ʔʃun] (竈神様に神酒を供えて祈願する)。

「ウスィ」[ʔuθi] (名)

うす(臼)。麦や大豆を挽いて豆腐を造るのに用いる石臼。ウスィ「カイ」ムジ「ピキン」[ʔuθiʔkaiʔ muʃi ʔpʲikiŋ] (臼で麦を挽く)。「ムジャー イラチ「カラ」ウスィ「カイ」ピチ」フー「ナチ ウリル」ユニ「クチ イータル」[muʃa: ʔiraʃiʔkaraʔ ʔuʃiʔkai ʔpʲiʃiʔ ʔu: ʔnaʃi ʔuriruʔ juniʔkuʃi ʔi:taru] (麦は炒ってから臼で挽いて粉にし、それをユニク<麦焦がし>といった)。

「ウスウリヌ」ウグワン[ʔuθu rinu ʔugwan] (連)

神に対するお詫びの祈願。「畏れ多いことの祈願」の義。

「ウタ」[ʔuta] (名)

歌。「ウタスアンシン」[ʔutaragʃiŋ] (歌三線)。「アラー ウター」ジョー「リ ヤスアー」[ʔara: ʔuta:ʔ ʃo:ʔrija:ʔ] (あの人は歌が上手だよ)。

「ウタイン」[ʔutaŋ] (動)

歌う。「ウタ」ウタイン[ʔuta ʔutaŋ] (歌を歌う)。「ウタラン」[ʔutaran] (歌わない)。「ウタ スィーラキナー」アスィ「ビン」[ʔuta θi:rakinaʔ ʔa θiʔbiŋ] (歌を歌いながら遊ぶ)。「ウタ チューティ」アスィ「ビン」[ʔuta ʃu:tiʔ ʔa θiʔbiŋ] (歌を歌って<して>遊ぶ)。「ヤーガ」ウタ「インシャコー」ワニン「ウタイスアー」[ja:ga ʔutaʔiŋ ʃako:ʔ wanŋ ʔutaira:] (君が歌うなら私も歌うよ)。「ウタ」ウタイスアー「ギーフ「トゥ」ヤル」[ʔuta ʔutaira:ʔ gi:ʔuʔtuʔ jaru] (歌を歌うことはよいことである)。「ハー」ウターバ[ha: ʔute:ba] (早く歌いなさいよ)。「ウタ」トゥーティ アスィビン[ʔutaʔtu:ti ʔa θiʔbiŋ] (歌いながら遊ぶ)。

「ウタカ「ムン」」[ʔutakaʔmun] (名)

献上する漁獲物。神前にお供えする魚。三月三日に、十三歳、十五歳の若者が始めて大人と一緒に出漁して漁獲した魚。それをスォールイガナシー[θo:ruiganafʃi:](竿取り神)が外間殿と外間ノロ家、久高ノロ家に献上するもの。

ウチギ「ビ「チャーシ」」[ʔuʃigiʔpʲʃa:ʃi] (名)

お注ぎ換え。

「ウツチュガミ」[ʔutʃugami] (名)

掟神。ノロ、ニーガンの補佐役の神職。

ウティ「キン」[ʔutiˈkiŋ] (名)

地名。「グショー」[ˈguʃo:] (後生。あの世。来世。墓所) に隣接する風葬地の跡をいう。

ウチャ「トー」[ʔuʃaˈto:] (名)

仏前に供える茶湯。

ウチャトー「ジャワン」[ʔuʃatoːˈɕawan] (名)

仏壇に備え付けの茶碗。「茶湯茶碗」の義。

「ウビ」[ˈʔubi] (名)

おび (帯)。着物の帯。「ツツビ」[ˈtsutsubi] (帯) ともいう。負おい紐。子供を負おう際にも帯を使用した。

ウヒ「ケー」[ʔuʃiˈke:] (名)

祈願終了の報告。外間殿では「ウプフグイ」[ˈʔuʔʰʌʒui] (大庫裡) に向かって祈願終了の報告をすること。

「ウプフウガ」ミ [ʔuʔʰʌʒuʒaˈmi] (名)

フボー御嶽。

「ウプフグイ」[ˈʔuʔʰʌʒui] (名)

ミーアムトゥの「トゥハハシラ」[ˈtuʔʰʌʃira] のこと。「大庫裡」の義。

「ウブク」[ˈʔubuku] (名)

茶碗にご飯を盛ったもの一対 (2 椀) を仏壇や床の間に供えるもの。毎月の朔日、十五日の朝に供える。

「ウプフマーミキ」[ˈʔuʔʰʌmaːmiki] (名)

大漁祈願祭。「ニーンスウキヌ ウグワン」[ˈniːn θu kinu ʔugwan] の翌日、旧暦七月のミンニー<壬、癸、甲、乙>に行われる大漁祈願の祭祀。この祈願の経費はスォールイが「ショー」ニン [ˈʃoːˈniŋ] (男性十五歳から七十歳) から一定額を「スォー」ルイサカティ [ˈθoːˈruisakati] (スォールイ酒代。一人百円也。戦前は五銭か十銭) として徴収する。その金で米を購入して祭祀に使用する。購入した米俵を開けることを、「スァー」ラヌ 「クチアキ」[ˈraːranu ˈkuʃiʔaki] (俵の口開け) という。その米から両ノロ家へ九合ずつ配分され、「クンゴー」バナ [ˈkungoːbana] (九合花米) としてスォールイガナシーの妻が届ける。クンゴーバナは、ニーンスウキヌウグワンの「ウユー」[ˈʔuju:] (お粥) に用いられる。残りの米は両スォールイの「ウブン」[ˈʔubun] (スォールイ棚に供える供物のお握り) と手伝い人の食事に充当される。「ウプフマーミキ」の祈願は次のように進行する。まず、ウヤウンシャクがノロへ神酒を捧げる。それが済むとウヤウンシャクがスォールイに神酒を捧げる。祈願が済んだら、その日に次期スォールイ予定者を決める。これを「サ」ス [ˈsaˈsu] (指名する。指す) という。本来は外間根人<ニーツチュ>が「サ」シ [ˈsaˈʃi] (指し)、外間根人不在の時は外間ノロが代行した。外間根人が予定者の家に行き、「トゥパシラ」[ˈtupaʃira] と「スウク」[ˈθu ku] (床) の神に祈願する。サシに来たら、これを断ることは出来ない。この席には、予定者の家族とユ「ナイガミ」[juˈnaigami] (をなり神。姉妹神)

が同席してサシを受ける。外間根人がスォールイをサシて後、神女達はフボー御嶽へ参り、大漁祈願をする。円陣を組んで座り、「イビ」[ʔibi] (威部。神の在す最も聖なる所) の前で、①「ウプフウガミ」[ʔupʔuʔugami]、②「ワカリカスア」[wakarikara] (南山へのお通しく遥拝>のイビ)、③「ティリリカスア」[tiririkara] (首里へのお通しく遥拝>のイビ)、④「ウガミグワー」[ʔugamigwa:] の順で祈願される。「スァーラヌ クチアキ」[ʔa:ranu kuʔiʔaki] (俵の口開け) について、『スォールイガナシ日誌』には次のように記されている。「午前6時15分、前任スォールイの妻、米10キロ持参。後任スォールイの妻、米10キロ持参。両者米を出し合い、九合花米を両アムトゥへ奉納。三合、スォールイ二人分のウブンを炊いて二つお椀に盛る。マーミキ へ8升5合、おたきへ3合、ウチギ「ピヒャーシ」[ʔuʔigiʔʔja:ʃi] (お注ぎ換え) 1合位。ウコー (香) 両スォールイより6束。昼飯用米5合を取り、残りは両家で分けた (両スォールイ) 」。

「ウプフヌシガナシー」[ʔuʔʔunuʔiganafi:] (名)

ニライカナイの大神。「大主加那志」の義か。「ウプフヌシガナシーヌ ウグワンダティ」[ʔuʔʔunuʔiganafi:nu ʔugwandati] (健康祈願と豊漁祈願) の祭祀には、イシキ浜で健康祈願をし、参加した巫女が家族の正人 (15歳から70歳まで男子) 一人につき三個ずつの小石を拾って各家の床に安置し、12月のシリガプファー[jirigaʔʔu:] (感謝祭) の日にイシキ浜へ返す。祈願の順序は2月のウグワン「ダティ」[ʔugwanʔdati] (お願立て) の項参照。両ノロ家、外間殿、ウドウンミャー、イチャリグワー、ウブンシミ、シラタルー、ウプフラトゥ (大里。五穀の壺を埋めたハタスを管理していた家) の祈願が済むと①インニャー、アカララキ、②ヤグルガー、ハタス、の二手に分かれてイシキ浜で合流し、健康祈願をして小石を拾った。カツオ漁船を経営している人は、イシキの「ウシュ」[ʔuʃu] (海水、潮) で漁船のお祓いをした。「ウシュ」[ʔuʃu] (海水、潮) を船霊の側に安置しておき、不漁が続く時にこれでお祓いをした。ウプフラトゥヌル[ʔuʔʔuratunuru] (大里ノロ) で、尚徳王の寵愛を受けたのは「クンチャスァンヌル」[kunʃarannuʔru] (国笠ノロ) といわれた。

「ウプフヌシガナシー」ヌ 「ウブクイ」[ʔuʔʔunuʔiganafi:nu ʔubukui] (連)

ニライカナイの大神 (大主加那志) への願解きの祈願。「ウブクイ」[ʔubuʔkui] は「大ほこり」 (大感謝。慶び) の義と解釈される。ニライカナイの大神に祈願した健康祈願と大漁祈願に対する感謝の願解きをする祭祀。

ウプフワタ「ムン」[ʔuʔʔuwataʔmug] (名)

妊婦。「大腹者」の義。「ハハラムムン」[ʔʔaramimug] (孕み者。妊婦) ともいう。ハハラ「ルースィヌ」チャン[ʔʔaraʔru:θi nuʔ ʃaŋ] (妊娠した人が来た) <上品な表現>ともいう。

「ウブクイ」[ʔubukui] (名)

がんほどき (願解き)。「ウグワンダ」ティ[ʔugwandaʔti] (御願立て) の対義語。祭祀行事における神願いに対する感謝の祈願のこと。「大ほこり」 (大感謝。大慶び)。「謝恩

蜜温普姑立『琉球館訳語』」の義。ウプヌシガナシーの祭りでは、二月に「ウグワンダ<sup>ㇿ</sup>ティ<sup>ㇿ</sup>」[ʔugwanda<sup>ㇿ</sup>ti]（御願立て）の祈願を執り行い、12月に「ウブクイ<sup>ㇿ</sup>」[ʔubukui]（願解き）の祈願を執り行う。

「ウブン<sup>ㇿ</sup>」[ʔubun]（名）

供物の名。ムム<sup>ㇿ</sup>「ハメー<sup>ㇿ</sup>」[mumu<sup>ㇿ</sup>hame:]（九月に行われるンナ<sup>ㇿ</sup>「ギー<sup>ㇿ</sup>」[ʔnna<sup>ㇿ</sup>gi:]＜イラブー漁＞）で神職者を接待する時の料理のこと。ノロ、ニーツチュ、ニーガミに対するウブンにはンナギーをフクン<sup>ㇿ</sup>「キリ<sup>ㇿ</sup>」[ʔukun<sup>ㇿ</sup>kiri]（九切れ）立て、ンバイ<sup>ㇿ</sup>「[ʔmbai]（米飯）は「スアンニンガースアー<sup>ㇿ</sup>」[ʔanninga:ʔa:]（月桃の葉）で囲む。ンバイは餅のように作っている。それ以外の神職者にはンバイの周りを月桃の葉で囲まない。ノロ、ニーツチュ、ニーガンのンナギの上には皿で蓋をするが、その他の神職者のものには蓋をしない。「ウブン<sup>ㇿ</sup>」[ʔubun]は「ハッシャ<sup>ㇿ</sup>」[haffa]（頭。村頭）の妻と久高ノロ家の人達を作った。ノロ、ニーツチュ、ニーガン以外の神職者のウブンに立てるンナギは、ナナン<sup>ㇿ</sup>「キリ<sup>ㇿ</sup>」[nanan<sup>ㇿ</sup>kiri]（七切れ）である。

「ウブンガナシー<sup>ㇿ</sup>」[ʔubunganaʃi:]（名）

煮魚と「スネー<sup>ㇿ</sup>」[sune:]（刺身の和え物）を米飯とともに盆に入れたもの。両ヌンドウンチで大漁祈願をする際に供えたもの。両スォールイ家に贈られてスォールイ棚に供えられ、大漁祈願の供物となる。

ウブン<sup>ㇿ</sup>「マティー<sup>ㇿ</sup>」[ʔubum<sup>ㇿ</sup>mati:]（名）

穀物＜麦、粟＞の収穫感謝祭。サン<sup>ㇿ</sup>「グワティマティー<sup>ㇿ</sup>」[san<sup>ㇿ</sup>gwatimati:]（三月祭り。麦の収穫感謝祭）。ルク<sup>ㇿ</sup>「グワティマティー<sup>ㇿ</sup>」[ruku<sup>ㇿ</sup>gwatimati:]（粟の収穫感謝祭）。

「ウメーギ<sup>ㇿ</sup>」[ʔume:gi]（名）

外間ノロ、久高ノロ、根神などの補佐役の神職者。「御前祇」の義か。

「ウヤウンシャク<sup>ㇿ</sup>」[ʔujaʔunʃaku]（名）

外間ノロ、久高ノロ、ニーガン（根神）に神酒を捧げる役職の神女（三名）。外間ノロと久高ノロには、アシ<sup>ㇿ</sup>「クム<sup>ㇿ</sup>」[aʃi<sup>ㇿ</sup>kumu]（神酒を入れる容器。椀に柄のついたもの）に神酒を入れて捧げ、その他は普通の椀に神酒を入れて捧げる。ウヤウンシャクに神酒を注ぐ役はニブ<sup>ㇿ</sup>「スウイ<sup>ㇿ</sup>」[nibu<sup>ㇿ</sup>θu i]（神女）である。ウヤウンシャクは六十歳になる5月の粟の祈願祭の前日まで務め、それ以後は「スアムトゥジャー<sup>ㇿ</sup>」[ʔamutuʃa:]に座って祭祀の進行を見守る。外間ノロ、久高ノロ、ニーガン（根神）以外の神職者に神酒を捧げる役職の神女（四名）を、「トーウンシャク<sup>ㇿ</sup>」[to:ʔunʃaku]という。

ウヤ<sup>ㇿ</sup>「フファーウプジ<sup>ㇿ</sup>」[ʔuja<sup>ㇿ</sup>ʔfa:ʔupuʃi]（名）

先祖。ウヤ<sup>ㇿ</sup>「フファーウプジ<sup>ㇿ</sup>」 アガ<sup>ㇿ</sup>「ミーン<sup>ㇿ</sup>」[ʔuja<sup>ㇿ</sup>ʔfa:ʔupuʃi ʔaga<sup>ㇿ</sup>mi:n]（先祖を崇める。先祖を尊敬する）。

ウヤン<sup>ㇿ</sup>「ヤー<sup>ㇿ</sup>」[ʔujan<sup>ㇿ</sup>ja:]（名）

実家。里。娘の実家。「親の家」の義。ウヤン<sup>ㇿ</sup>「ヤー<sup>ㇿ</sup>」チヘー<sup>ㇿ</sup>「イン<sup>ㇿ</sup>」[ʔujan<sup>ㇿ</sup>ja: ʃi he: ʔin]（実家に帰る）。養子や分家の場合も、実家に対していう。

「ウメーギ」[ʔume:gi] (名)

外間ノロ、久高ノロ、ニーガン（根神）の補佐役の神職者。

ウ「ユー」[ʔuʔju:] (名)

お粥。「ミー」アムトゥ[ʔmi:ʔamutu]（外間殿、外間ノロ家、久高ノロ家）とムム「ハメー」[mumuʔhame:]（九月に久高殿で行われる、ンナ「ギー」[nnaʔgi:]＜イラブー＞漁の感謝祭）に接待者を案内するするときに、お供え用のウユーが出される。

「ウワイジョーコー」[ʔuwaiʔo:ko:] (名)

三十三年忌の法事。「終わり焼香」の義。「ニンキジョーコー」[niŋkiʔo:ko:]（年忌焼香）ともいう。その後は特別な法事はなく、お盆と正月に供え物を供えるだけとなる。

「ウンシャク」[ʔuŋʃaku] (名)

イザイホーに参加して巫女になる洗礼儀式を受けた50歳代後半（54歳から60歳まで）の年齢階梯に属する巫女。祭りの時に神酒を捧げる役の巫女。スアムトゥに就任する前の神職階梯で、定員は7名。ウンシャクの中で、両ノロ、ニーガンにお神酒を捧げる役の巫女を「ウヤウンシャク」[ʔujaʔuŋʃaku]（親ウンシャク）といい、定員は3名。その他は「トーウンシャク」[to:ʔuŋʃaku]といい（定員4名）、スアムトゥに神酒を注いで捧げる役の神職である。

「ウンチ」[ʔunʃi] (名)

運。運氣。運氣の弱い人は、ついたち（朔日）、十五日にウカマガナシー（火の神様）やスウ「パ」シラの神前で、「スィーン」ユタ[ʔθi:jʔjuta]（一族の家庭の神事を執り行う巫女）に入念に健康祈願をしてもらった。「ウンチ ヨースァン」[ʔunʃi jo:raŋ]（運氣が弱い。運が悪い）。「ウンチ ジュースァンドゥ」ハカ「タン」[ʔunʃi ʔu:randuʔ hakaʔtaŋ]（運が強くて合格した）。「ウンチ ヨースァヌ」ハカ「ラン」タン[ʔunʃi jo:ranuʔ hakaʔranʔtaŋ]（運が悪くて合格しなかった）。

「ウンチニゲー」[ʔunʃinige:] (名)

旧正月のスウ「ビー」[θuθuʔbi:]（生年祝い）の時には、お祝いをして健康祈願をする。旧正月の後、各自の生まれ年に当たる（干支）の最初の日、十三歳、四十九歳、六十一歳、七十三歳の祝いをした。それ以外の、生まれ年に当たらない人も各自の家で健康祈願をした。49歳までは、「ヤーウイエー」[ja:ʔuije:]（家庭内の祝い）、61歳、73歳は、「シマウイエー」[ʃimaʔuije:]（島祝い。島民全員で祝う祝儀）と称している。現在は土曜日、日曜日を利用して61歳、73歳の祝いをしている。

ウンネー「ジュー」[ʔunne:ʔu:] (連)

こんなこと。ウンネー「ジュー シーヤー」バチ「クワースァリンローヤー」[ʔunne:ʔu:ʃi:ja:ʔ baʃiʔ ʔkwa:raŋinro:ja:]（こんなことをすると罰をくわされるぞ）。

エー「ミシヤン」[ʔe:ʔmiʃaŋ] (形)

畏れ多い。プフカ「マヌ ウプフグヤー」エー「ミシヤン トウクマ ヤクトウ スァーガン」スァーガン「フマ「チャー イララン」[ʔpʰuʔkaʔmanu ʔuʔpʰuʔguja:ʔ ʔe:ʔmi

ʃantukuma jakutu ɾa:gan ɾa:gagʷ Φumaʃa: ʔiraraŋ] (外間殿の大庫裡は  
畏れ多い聖なる間であるから、誰でも彼でも入れるところではない)。

オーハハ「シュン」[ʔo:ʔΦaʃuŋ] (動)

おぶる。負んぶする。背負う。負い紐で子供をおぶる。オーハハ「スアン」[ʔo:ʔΦaʃaŋ]  
(背負わない。負んぶしない)。オーハハ「チャン」[ʔo:ʔΦaʃaŋ] (背負った。負んぶした)。  
オーハハ「シーブシャン」[ʔo:ʔΦaʃi:buʃaŋ] (背負いたい。負んぶしたい)。オーハハ「シー  
ヤ」ナ「カン」[ʔo:ʔΦaʃi:jaʷ naʃkaŋ] (背負ったら泣かない)。オーハハ「スィーバ」[ʔo:ʔ  
Φaʃθi:ba] (背負いなさい。負んぶしなさい)。

「ガーエー」[ʃa:je:] (名)

呪具や呪符を持ち、掛け声をかけながら景気付けをすること。お祓いのために呪具をもつ  
て掛け声を掛け、威勢をはること。

「ガン」[ʃaŋ] (名)

がん (龕)。棺を納めて墓所へ運ぶ葬具。昔の霊柩車。二、三年前までは担いでいたが、  
現在は手押し車になっている。「赤馬」ともいう。「ガン」ハ「ターミン」[ʃaŋʷ haʃ  
ta:miŋ] (がんを担ぐ)。

「ガンハタミヤー」[ʃaŋhatamija:] (名)

(がん担ぎ手<人>) は四名で、前方二人、後方二人で担ぐ。昔は、八歳以上の人が死ぬとが  
んで柩を運んだが、七歳以下の子供の場合は親が抱いて葬送したのである。

「ギーフトゥ」[ʃi:Φutu] (名)

良い事。「ウタ」「ウタイスァー」ギー「フトゥ」ヤル[ʔuta ʔutaira:ʷ ʃi:ʃΦutuʷ  
jaru] (歌を歌うことは良い事である)。

「キーン」[ki:ŋ] (動)

切る。「キヤン」[kijaŋ] (切らない)。キヤン「キバ」[kijaŋʃkiba] (切るな)。キ「チャン」[kiʃ  
ʃaŋ] (切った)。キ「チ」ミーン[kiʃʃi mi:ŋ] (切ってみる)。「キーブシャン」[ki:buʃaŋ]  
(切りたい)。キチャ「クトゥ」[kiʃʃaʃkutu] (切ったので)。キ「チャ」ー「ナラン」[kiʃʃaʃ:  
ʃnaraŋ] (切ってはならない)。ホー「チャーシャーマ」ヤシェー「キーン」[ʔΦo:ʃa:  
ʃa:maʷ jaʃe: ʃki:ŋ] (包丁で野菜を切る)。

「キシクマー」イ[kiʃʃi kuma:ʷi] (名)

旧暦6月1日と15日、7月1日、15日に行われる神事。「キシク」[kiʃʃiku] (スク、小魚)  
が寄って来ると、6月1日の早朝スォールイガナシーの妻がミームトゥに米九合を届け  
る。ミームトゥでは「クンゴバナ」[kungo:bana] (九合花米) を供えてキシク漁の大  
漁祈願を行う。スォールイは村の7箇所のだで、「ユイムン スイリンショーリー」[ʃ  
juimun θi riŋʃo:ri:] (寄りもの<キシク>を大漁<孵化>させてください) の儀式をお  
こなう。スォールイは皆が出漁する前に、浜からカベールを回ってイシキ浜まで行き、そ  
こから引き返してユランマヌ浜に帰る。スォールイが浜で待っている所へ出漁した船から  
「ウタカ」ムン[ʔutakaʷmuŋ] (漁獲物) が献上される。それを弟スォールイの妻が塩漬

けにしておき、その中から3升ほどのキシクの塩漬けを11月の「フバ」ヤク[「Φ uba」jaku] (久高島の御嶽御嶽を清掃する祭祀) の日に、参加した神女や男性神職者たちに配られる。久高島(外間根人)からは、別に塩漬けしたキシク(一升五合)を百名へ届けられた。現在のウミンチュ(漁師)はキシクをウミンチュのボーナスといっている。

「ギナイ」[「ginai」] (名)

一周忌。死後一年目の法事。スア「ティキヤー」 ウプフ「シュ ギナイヌ」 シューン[「ga」 tikja:」 ?u<sup>p</sup>Φu「fu ginainu」 fu:ŋ] (来月は祖父の一周忌がくる)。「ギナイ ウシャギーン」[「ginai ?uʃagi:ŋ] (一周忌を執り行う<一周忌をして差し上げる>)。ギナイ「ショーコー シュン」[ginai「ʃo:ko: fuŋ] (一周忌の法事をする)。久高島では法事には案内をする。身内と、ヘー「スウナイ」[he:「θu nai] (隣近所)に案内を出す。供物は重箱に「ハラザカナ」[「haraʒakana] (てんぷら、蒲鉾、昆布、豆腐など)を詰め、白餅、菓子(「ホー」グワシー「[ho:「gwa:ʃi<落雁>)を供えた。ハハー「ハハー ウワイジョーコーヤ」 ヌバチ アン「マー」 ジュー「サンニンキトゥ」 マ「ジョーイ」 ウスア「ギースァー」 アン「スイバ」[<sup>p</sup>Φa:「<sup>p</sup>Φa: ?uwaiʒo:ko:ja」 nubaʃi ?am「ma:」 ʒu:「sannipkitu」 ma「ʒo:i」 ?ura「gi:ra:」 ?an「θi ba] (祖母の終わり焼香は延ばして、お母さんの十三年忌と一緒に執り行いますよ。そうしなさい)。

「キネー ムチュン」[「kine: muʃuŋ] (連)

所帯を持つ。ヤー「ムチジク ジョーリ」[ja:「muʃiʒiku ʒo:ri] (家庭経営が上手)。

「キヤーチン」[「kja:ʃi」ŋ] (副)

どうしても。決して。何としても。「キヤーチン」 「プフルワーシ ヨースァンタン」[「kja:ʃi」m 「<sup>p</sup>Φuruwa:ʃi jo:rantan] (どうしても育てる<養育する>ことが出来なかった)。「キヤーチン」 「ナラン」[「kja:ʃi」n 「narant] (どうしても出来ない)。ウン「ター ミービキヤー キヤーチン」 ウイ「エー シーガ イキバル」 ナイル「[un「ta: mi:biki:ja kja:ʃiŋ」 ?ui「je: ʃi:ga ?ikibaru」 nairu] (これたちの結婚式には、何としてもお祝いにいかないといけない)。

「ギョー」ギ「[「gjo:」gi] (名)

祭祀。「行事」の義。神行事に従事する人が用いる言葉。ワツ「ター シマヌ ギョーギヤー」 イク「ター」 アガ「ヤー」[wat「ta: ʃimanu gjo:gja:」 ?iku「ta:」 ?aga「ja:」] (私たち<我々>の島の年中行事はいくつあるかなあ)。

ギン「グミ」[giŋ「gumi」] (名)

縁組。ギン「グミ チャン」[giŋ「gumi ʃan] (縁組をした)。

「グイン」[「guin」] (動)

酔う。グイ「ラン」[gui「ran] (酔わない)。グイ「ター」 ナーン[gui「ta:」 na:ŋ] (酔ってはいない)。グイ「タン」 ムンヌ[gui「tam」 munnu] (酔ったのに)。グイ「チャー」[gui「ʃa:」] (酔っ払い)。ウツ「ピグワー ヌルー」ティ グイ「タンナー」[ʔup「pigwa: nuru:」ti gui「tanna:」] (たったこれぼっち飲んで酔っ払ったのか)。



ク「カーウー[ku「ka:ʔu:] (名)

「ヤグ」イ[「jagu「i] (掛け声) の一種か。スアン「グワティマティー (麦、粟の収穫祭) のユーマティー (夕方の祭り) にンナグラー (15歳の少年) が魚を吊るした棒を担いで神職者と並んで立ち、東方に向かって唱える言葉。ンナグラーは15歳になる男子で、貢納用の貝を海中の穴蔵に活けて管理した者。

「グ」キ[「gu「ki] (名)

桶。桶 (一斗5升入り)。水を運んだり、豆腐を作るために石臼を載せて大豆を挽いたり、餅を作るために石臼を載せて糯米を挽いたりした桶。また芋搥り器を桶に横たえて芋を搥り、芋の澱粉を作ったりするのに用いた。グキ「シャーマ」 ミリ 「ハヤーシュン[guki「ja:ma」 miri 「haja:ʃuŋ] (桶で水を運ぶく通わせる>)。

グク「ラク[guku「raku] (名)

極楽。標準語からの借用語か。

クサ「ハパン[kuʂa「paŋ] (名)

キシ「ク[kiʃi「ku] (スク。アイゴの稚魚) が沖から寄ってきて、珊瑚礁内海の海草を食べてしまったもの。これを投網で漁獲し、塩漬けにしておいて自家用の出汁にしたり、朝晩の豚の飼料の出汁に使用した。キシ「クヌ ユティン アトゥ モー カティ」 ヌク「トゥーサー」 クサ「ハパン ナティ」 ミカ「シャーマ」 ティ「ターミシャーマ スウティ ティキティ」 ワー「ムンヌ ダシ スタサー[kiʃi「kunu jutɪŋ ʔatu mo: kati」 nuku 「tu:ʂa:」 kuʂa「pʰannati」 mi ka「ja:」 ti「ta:mɪʃa:ma θu ti tikiti」 wa:「munnu dafi sutara:」 (キシクが沖から寄ってきて後、海草を食って、珊瑚礁内海に残っているのはクサパンになる。昔は投網で漁獲し、塩漬けにして豚の飼料の出汁にしたものだよ)。

「グ」ショー[「guʃo:] (名)

後生。葬所。グショー「ムン[guʃo:「muŋ] (後生の者。相手を忌み嫌って罵ることば)。

「ク」ワシ 「ハハガリー」ガ[「kwa:ʃi 「pʰagari:「ga] (連)

「菓子を頂きにく菓子を配られに>」の義。旅で稼いで帰ってきた人の家に、子供達が土産を頂戴しに行く際に言った。この風習は国防婦人会によって廃止された。

クワツ「チー[kwat「tʃi:] (名)

ご馳走。クワツ「チー スアビタン[kwat「tʃi: ʂabitʌŋ] (ご馳走になりました。ご馳走さまでした)。クワツ「チー」ヌ 「マンディ 「ケーハンティッチ」 ヌク「シル チャル[kwa t「tʃi: nu 「mandi 「ke:hantitʃi」 nuku「ʃiru」 tʃaru] (ご馳走がたくさんあって、食べきれないで残してしまったよ)。

クワ「ソー[kwa「so:] (名)

火葬。旅で死んだ人は火葬され、遺骨が島に帰ってきて、島の墓に納骨される。戦前は寅年に納骨するのが立前であった。寅年以前に島に遺骨を迎える場合は、すぐ納骨しないで墓所の前に安置しておいた。ほとんどの人は崖下に安置しておき、寅年に納骨した。現在は寅年でない時にも納骨している。戦前は正月や八月十五夜、七月のお盆などの祭りの日

に死んだ人は、ガンに入れないで棺を棒で担いで西側海沿いの下道（シャ「ミチ[ja「miʃi]）からサギガタミで野辺送りをした。

クタンディ「ノー」シ[kutandi「no:ʔʃi]（名）

「疲れ直し」の義。慰労会。仕事の後の疲れをとるために酒食をとること。クタンディ「ノー」シスリー[kutandi「no:ʃisuri:]（「疲れなおしの集会」の義。慰労会）。「マティーヌ アトゥー」クタンディ「ノー」シ「チャン[「mati:nu ʔatu:ʔ kutandi「no:ʔʃi ʔʃag]（祭りの後に慰労会をした）。女性が慰労会をした。男性にはその習慣はなかった。ウンドー「クワイヌ アトゥ シェイネンヌスアヤ」クタンディ「ノー」シ スンチ「スリー「タン[ʔundo:ʔkwainu ʔatu ʃeinennura:jaʔ kutandi「no:ʃi sunʃiʔ suri:ʔtag]（運動会の後、青年達は慰労会をしようとして集まりよった）。

ク「チゲー[kyʔʃige:]（名）

口答え。反抗すること。目上の者に逆らって言葉を返すこと。「口害」の義か。「ドゥーヤ「アシルーティ」ウヤ「ネー」ク「チゲー スァンキバ[ʔdu:ja ʔaʃiru:tiʔ ʔujaʔne:ʔ kuʃiʔge: ʔaŋkiba]（自分は遊んでいて親に口答えするなよ）。

クティ「スアマ[kutiʔʔama]（名）

人骨。死者の骨。「クティ[ʔkuti]（骨）ともいう。クティ「スアマ ムンチューバカカイ イットタン[kutiʔʔama munʃu:bakakai ʔittag]（お骨を門中墓へ入れた）。「スウラドゥシャー スアビカイ マーチューンチュン」クティ「スアマー」ウン「ティケーチ ウンニール」パハカ「チャー イリラリータル[ʔθu raduʃa: ʔabikai ma:ʃu:n ʃugʔ kutiʔʔama:ʔ ʔunʔtike:ʃi ʔunni:ruʔ ʔʔakaʔʃa: ʔirirari:taru]（寅年には旅で亡くなった人もお骨をお迎えして、そのときに墓へ入れることができた）。

「クニガミ[ʔkunigami]（名）

「国神」の義。久高島を国に比定して表現したもの。ノロとニーガン、その補佐役である「ウッチュガミ[ʔutʃugami]（掟神。ノロ、ニーガンの補佐役）、「ニーツチュ[ʔni:ʔʃu]（根人）をさす。クニガミには定年がなく、死ぬまで続ける終身神職である。

「クバズカサ[ʔkubaʔukasa]（名）

フボー御嶽の聖域（拝所）の名。「フバリカ」サ[ʔʔubarikaʔsa]（フボー御嶽の聖域（拝所）の一つで、今帰仁へのお通し＜遥拝＞の拝所）ともいう。フボー御嶽で神が巫女に憑依するところという。

グヤー「マク[guja:ʔmaku]（名）

キシクの大きなもの。海草を食べていないときのキシクで、普通のキシクの3倍ほどの大きさのもの。塩漬けにして食した。最高に美味しい。キシ「クナカイ」マギ「スアスア」グヤー「マク チール[kiʃiʔkunakaiʔ magiʔʔaʔa:ʔ guja:ʔmaku ʃi:ru]（キシクの中で大きいのをグヤーマクという）。

「グリーンジン[ʔguri:ʃiŋ]（名）

ご霊前。仏壇。「グリーンジンカイ」ウシャ「ギーン[ʔguri:ʃiŋkaiʔ ʔuʃaʔgi:ŋ]（ご霊前に

お供えします)。

「グルイ」[*gurui*] (名)

踊り。パハティ「グワティグルイ」[*Pʰatiˈgʷatigurui*] (八月踊り)。8月10日のユーマティーの「ビンヌースウンヌー」[*binnuː θu nnuː*] (鳳凰の神謡。スィルル)の神事がなされ、それが済むと8月グルイで参集している島民環視の中でグルイが行われる。会場には商店や久高海運、漁船等から金銭や飲み物の寄付があるので、ジュースやビールが参会者に配られた。グルイが終わると太鼓と三線が鳴らされる。会場が盛り上がると、ノロ以下全巫女、男性神職者が次々と舞い、参会者へと続いて会場は祭りの雰囲気満喫するのである。年中の祭事でも一番盛り上がる一日である。

「クルマボー」[*kurumaboː*] (名)

くるま棒。大豆などを脱穀する際に棒を振り回しながら豆を打って脱穀する農具。

「クルキミボー」[*kurukimiboː*] (名)

「アマミヤーハンジャナシー」[*ʔamamjaːhanɕanaʃiː*]が持っているという「赤い棒」のこと。「シマグシ」ナ[*ʃimaguʃiˈna*]とも言われているが、クルキミボーが正しい。ユランマの浜でアマミヤーハンジャナシーがクルキミボーを持って、四名のアマミヤーと共に左回りをして久高島を祓い清める。

グン「グワティ」[*guŋˈgʷati*] (名)

五月。

グン「グワティマティー」[*guŋˈgʷatimatiː*] (名)

粟の穂祭り。一月のソージ「マティー」[*θoːɕiˈmatiː*] (麦の穂祭り)と対応している。

「五月祭り」の義。ソージ「マティー」[*θoːɕiˈmatiː*]ともいう。豊作祈願の祭祀で、外間殿、久高殿においてスアムトゥ以上の神女により祈願が行われる。ノロはヤグルガーで精進して外間殿に来る。供物は、現在は米を粥状に炊いたものを供えるが、本来は粟を粥状に炊いたものを供える。粥は十組の中の当番の家で準備される。お膳には水とマブッチ[*mabutɕi*] (粥状に炊いたもの)、アマミダーグ (茎の先に釘を刺し、悪魔祓いにするもの)、麦の穂三本を入れて供え、ノロが祈願する。「アラカ」[*ʔaraka*] (アザカ)の葉で四回お祓いをし、「ティブガー」キ[*tibuɡaːˈki*]の水でマブッチを祓い清める。外間ノロ、久高ノロ、根神にウヤウンシャクが、スアムトゥにはトーウンシャク (四名)が神酒を差し上げる。次に、新しくスアムトゥに加入した神女たちの儀式が執り行われる。久高殿でも同じ儀式が執り行われる。この祭りには、スアムトゥ「ウイエー」[*ɾamutuˈʔuijeː*] (ウンシャクの上の位で、神女が60歳になって、ノロのお供をする資格を得る祝い)も執り行われる。スアムトゥは、ノロの側に座って神事の進行をみまもり、諸々の雑用から開放される地位の高い神女である。男のソールイウイエーと同等の格式を持つといわれている。マティー (祭り)が終わった後、「シマジューク」[*ʃimaɕukuː*] (地名。外間殿前方約35メートルの道路の中心点、アジマー<十字路>)において、新スアムトゥ7名 (足りないときは、前年就任したスアムトゥに加わってもらって7名)がシマジュークを囲み、時計回りに

7回まわる儀式がある。儀式の最初に東方に向かって手を合わせ、終わった後にも手を合わせる。アサマティーが終わった後、各家では巳年生まれの男性を頼んで、その人との間で「スウシノーイ」[<sup>1</sup>θu<sup>1</sup>ʃino:i] (年直り) の「スウイケー」[<sup>1</sup>θu<sup>1</sup>ike:] (神酒で酌の取り交わし) が行われる。

グン「スイー」[gun<sup>1</sup>θi:] (名)

ご恩感謝。恩義。グン「スイー」 ワスイ「ター」 「ナラン」[gun<sup>1</sup>θi: wa<sup>1</sup>θi<sup>1</sup>ta: <sup>1</sup>naɾaŋ] (ご恩を忘れたらいけない)。

「クンチャサンヌ」ル[<sup>1</sup>kunʃa:sannu<sup>1</sup>ru] (名)

神女名。国笠ノロ。久高島の「ウプフラトゥヌ」ル[<sup>1</sup>ʔupuratunu<sup>1</sup>ru] (大里ノロ) のこと。五穀の壺を埋めたハタスを管理している大里家のノロ。尚徳王が喜界島を征討して戦勝報告に久高島へ渡島された際に寵愛を受けたノロである。「アカツツ」ミ[<sup>1</sup>ʔakattsu<sup>1</sup>mi:] という神職者がハタスを拝んでいた。アナゴノシ (『琉球国旧記』参照) が久高島ではアカツツミーといわれている。

「クンプチャマ」[<sup>1</sup>kumbuʃijama] (名)

地名。ウドウンミヤの側にある拝所。

「-ケー」[<sup>1</sup>-ke:ŋ] (接尾)

度。たび。回。回数を表す接尾辞。チュ「ケー」[ʃu<sup>1</sup>ke:ŋ] (一回)。チュトウ「カイ」マティーヤ「イク」ケー「ア」ガ[ʃutu<sup>1</sup>kai<sup>1</sup> mati:ja<sup>1</sup> ʔiku<sup>1</sup>ke:ŋ<sup>1</sup> ʔa<sup>1</sup>ga] (一年に祭りは何回あるか)。「タケー」[<sup>1</sup>take:ŋ] (二回)。「ミケー」[<sup>1</sup>mike:ŋ] (三回)。「ユケー」[<sup>1</sup>juke:ŋ] (四回)。「イティ」ケー[ʔiti<sup>1</sup>ke:ŋ] (五回)。「ムケー」[<sup>1</sup>muke:ŋ] (六回)。「ナナ」ケー[nana<sup>1</sup>ke:ŋ] (七回)。「ヤケー」[<sup>1</sup>jake:ŋ] (八回)。「フクヌ」ケー[ʔukunu<sup>1</sup>ke:ŋ] (九回)。「スウ」ケー[θu<sup>1</sup>ke:ŋ] (十回)。

「ゴーグ」チ[<sup>1</sup>go:gu<sup>1</sup>ʃi] (名)

悪口雑言。罵ること。反抗すること。「強口」の義。「ウラー」 ウヤ「ネー」ンカトーティ「ゴー」グチ スウタスアー[<sup>1</sup>ʔura:ʔ ʔuja<sup>1</sup>ne: ŋkto:ti<sup>1</sup> go:<sup>1</sup>guʃi θu<sup>1</sup>taɾa:] (これは親に向かって悪口雑言<反抗>をしていたよ)。「アラー」デー「ジナ」ゴー「グチャー」ヤル[<sup>1</sup>ʔara:ʔ de:<sup>1</sup>ʃina<sup>1</sup> go:<sup>1</sup>guʃa:ʔ jaru] (あれは大変な悪口雑言をいう人だ)。「アン」チ「ゴー」グチ シュン チュヌ グイヤー[ʔan<sup>1</sup>ʃi<sup>1</sup> go:<sup>1</sup>guʃi ʃunʃunu<sup>1</sup> guija:] (あんなに悪口雑言をいう人がいるものか)。

「ゴースウスウ」イ[<sup>1</sup>go:θu<sup>1</sup>θu<sup>1</sup>i] (名)

大変な年寄り。大変に高齢な人。

コー「ター」[ko:<sup>1</sup>ta:] (名)

ハンセン病患者。久高島にはハンセン病患者はいなかった。コー「ターヤ」アカン「グワン」ダチュータクトウ「ンドー」スアタスアー[ko:<sup>1</sup>ta:ja<sup>1</sup> ʔakaŋ<sup>1</sup>ɡwan<sup>1</sup> daʃu:takutu<sup>1</sup> ndo:<sup>1</sup>ɾata:ɾa:] (ハンセン病患者は子供も抱いていたから気の毒だったよ)。

「スアーキ」[<sup>1</sup>ra:ki] (固)

海底地名。津堅島と久高島の間にある環礁（リーフ）。「スアーキビ」シ[<sup>ʔ</sup>ra:kibi<sup>ʔ</sup>ʃi]ともいう。

スアーラ「ヌ クチアキー[ra:ra<sup>ʔ</sup>nu kuʃiaki]（連）

「俵の口開け」の儀。ニーンスウキヌウグワンの早朝、前任スォールイの妻が10キロ入りの米袋を新任スォールイ宅に持参する。新任の妻も10キロの米袋を出して両方の米袋を開けることをいう。口開けした米を一つにして両方のノロ家に9合宛て、スォールイの妻達が届ける。それは当夜のニーンスウキヌウグワンの祭事に、8升5合はウプフマーミキの神酒作りに充て、ウプフマーミキの祭祀が終了すると、ウプフウガミとウガミグワーでの祈願があり、それのお供えにも充てられる。またムムハメーの時に、祭祀に必要な供物の米を取り出すことにも「俵の口開け」がなされる。この場合は久高ノロ家と村頭の妻たちが米俵の口を開ける。この米俵は、この年のンナギーの売り上げ利益によって購入されたものである。これで料理を作り、ウブンを作って、ノロ神、神職者を招待し、「ウトウイ」ムチ[<sup>ʔ</sup>utui<sup>ʔ</sup>muʃi]（接待）をする。その時のウブンは、ノロ、ニーツチュ、ニーガンとそれ以外の神職者のウブンとは異なる。

サギ「ガタミー[sagi<sup>ʔ</sup>gatami:]（名）

「下げ担ぎ」の義。正月とか十五夜、七月のお盆の日などのシチ「ビー[ʃiʃi<sup>ʔ</sup>bi:]（節日）に死亡すると、がん（龕）に入れないで、棺をそのまま吊るして担いで「シャミチ[<sup>ʔ</sup>ʃamiʃi]（西側海岸沿いの下道）から墓所へ葬送した。その担ぎ方をいう。棺を綱で吊るして担ぐこと。普通の葬送はナカ「ミチ[naka<sup>ʔ</sup>miʃi]（中道）を通って墓所へ行く。このサギガタミーの葬送の風習が廃止されたのは戦後になってからである。ある高齢者が亡くなった際、サギガタミーでは不穏当であるとのことから、この風習は廃止された。正月、お盆などは祭祀の日程は変更できないからである。その他の場合は死人が出た日は穢れているとのことで祭祀の日程変更が行われた。八歳に達しない子供が死ぬ時は、「ダキングワ[<sup>ʔ</sup>dakingwa]（抱き子）で葬送をした。

「サシプ[<sup>ʔ</sup>saʃipu]（名）

神職。特にノロ、根神などの国神（終身の神職）、掟神に対していう。サシプ「ゲー「ル[səʃipu<sup>ʔ</sup>ge:<sup>ʔ</sup>ru]（国神、ノロ、根神、根人とノロ、根神の「ウツチュ「ガミ<掟神。先導神。補佐役>などの神職者が交代すること）。ノロは、昔は孫継ぎが正式であった。これが嫁継ぎとなったのは先代ノロの時代からである。「ヌンジー[<sup>ʔ</sup>nunʃi:]（ノロ地）やイラブーの漁業権（漁獲権）との絡みで変わってきた。

「サシプゲー「ル[<sup>ʔ</sup>saʃipuge:<sup>ʔ</sup>ru]（名）

通称は、スォー「ルイヌ「 ナイ「ハワイ[θo:<sup>ʔ</sup>ruinu<sup>ʔ</sup> nai<sup>ʔ</sup>hawai]（「スォールイの成り代わり」の義。交代）という。「スォー「ルイ[<sup>ʔ</sup>θo:<sup>ʔ</sup>ru]（竿取り神）交代の場合はスィーンユタが火の神に「シリガ「フー[<sup>ʔ</sup>ʃiriga<sup>ʔ</sup>ʔu:]（お礼<感謝>の祈願）を行い、次にトゥ「パ「シラ[tu<sup>ʔ</sup>pa<sup>ʔ</sup>ʃira]の神への祈願、その次に「スウク[<sup>ʔ</sup>θu ku]（床の神）に祈願がなされ、さらに「スィーンユタとスォールイの間での「スウイケー[<sup>ʔ</sup>suike:]（盃事。盃の取り

交わし)、スォールイと家族(母、姉妹、妻)とのスウィケーが行われる。ウグワンに供えた「ウブン」[<sup>ʔ</sup>ubug] (供物。供物を揃えたお膳一式)をスィーンユタの家に持参する。次のアラミンニーの日にスォールイはミガーで禊をしたところにも祈願し、その水でスォールダナを洗い清めた。パハシ「ギャー」[<sup>p</sup>ɸaʃi<sup>ʔ</sup>gja:] (橋川<橋井戸>)でも祈願し、「アカラムイ」[<sup>ʔ</sup>aka<sup>ʔ</sup>ramui] (ユランマの浜の上にある拝所)にも祈願する。その後にユランマの浜に祈願し、徳仁港にも祈願する。新任のスォールイも同様に祈願する。『スォールイ交代日誌』に次のように記されている。「午後六時後任宅よりユナイ神準備中との電話あり。着物を着替えて待つ。六時三十分よりスォールイ、ユナイ神来宅。お茶、スーキ」[<sup>ʔ</sup>su:<sup>ʔ</sup>ki]<茶請け>を出す。旧スォールイとユナイ神、後任スォールイ、ユナイ神と相対して座す。お茶、茶請けを拝食し、旧スォールイ香一束を焚き、香炉に立てて倒れないように深く埋め、別の盆に載せて外で待つ。新スォールイ、ユナイ神に渡して網を持ち、外に出て棹を担ぎ、新スォールイ、ユナイ神、旧スォールイ、ユナイ神の順で新スォールイ宅へ。新スォールイ香炉を受け取り、香を自分の香炉に移し、灰も取って入れる。外へ出て棹を取り、アダンの内側の枝へ立てかけてから取って担ぎ、旧スォールイの後に立ち拝祈し、竿を旧(スォールイ)は外枝、新(スォールイ)は内側に立て、旧スォールイ前になり家に入り、旧上座、新下座に座す。お茶スーキが出され拝食する。新スォールイ妻香炉に12本ずつ、ミティムン、トゥパハシラ、床へ焚き、新スォールイも12本焚く。ウユー九椀が出される。掟神がいないのでウブン捧者が取っておく。両スォールイ各自で受け取り、拝食する。ウユーが余ったのでユナイ神へも捧げる。ウユーの拝食が終わってから帽子を新スォールイに被らせる。新スォールイを先にして外へ出て互いに竿を取り、新(スォールイ)前、旧(スォールイ)後に立ち二人の棹を重ねて担ぎ、ノロさんの交代の祈りが済んだら新外、旧内側に棹を立て新を先にして座敷に上り、新上座、旧下座になる(その際、スーキを入れ替えさせる。新スォールイ夫妻、香12本を焚き、ウブンの配膳が始まる。ウブンの拝食が終わったらアーサ汁を出す。拝食が終わったら各家々へウブンを配る。新(スォールイ)及び妻、香一束ずつをミティムン、トゥパハシリ、トコ、神棚へ焚き、九合花米と酒で外間ノロ、ミティムン、トゥパハシリ、トコの順で祈願する。終わったら酒は両側へ回す。座敷中央に筵を敷き、洗い花米の膳を置き、新スォールイ「ユイムンバケーシンソーリ」を歌う。ノロ、根神、ウッチュ神、新旧スォールイの順で配る。終わって長男との盃のトゥイケーがあり、後に御前風が始まる。第1回ミーンニーのキノエ(甲)の頃、先役順昌氏が網を持参せり。後役へ網を借りて捧げ置くとのこと。注。網の持参は交代のミーンニーであるのが正しいとのこと」。

「サ」ス[<sup>ʔ</sup>sa<sup>ʔ</sup>su] (名)

「スォー」ルイ[<sup>ʔ</sup>θo:<sup>ʔ</sup>rui] (男性神職。<棹取り>の義)を指名する行事。本来は外間ニーツチュ(外間根人)が行う。「ユナ」イガミ[<sup>ʔ</sup>juna<sup>ʔ</sup>igami] (姉妹神)がいる場合は、姉妹神も同席して行われる。ノロが火の神を拝み、「ユナ」イガミも一緒に拝む。次にトゥパハシラにも祈願し、床の神にも祈願する。そこに母親と妻も同席する。ニーツチュが来られる

ことは、サス行事が承諾されることを意味する。ニーツチュの指名は断ることが出来ないからである。都合によって承諾不可能な場合は事前に申し出てお許しを受けなければならない。(「サシプゲール」[*ˈsaʃipuge:ˈru*]の項参照)。ニーツチュ不在の時は外間ノロ、久高ノロが代行した。現在はスォールイの制度もなくなっている。

「サバクチ」[*ˈsabaŋkuʃi*] (名)

聖域の地名。1月下旬から2月上旬に行われる「ピースァチ」[*ˈpi:raʃi*] (大漁祈願祭)のとき、「ハビヤーン」[*ˈhabja:ŋ*] (カベール)の岬で大漁祈願のティルルを謡った三つの聖域地名の一つ。現在は、そこでの祈願は省略され、ティルルも謡わない。

サン「ネンヌ ギナイ」[*sanˈnennu ginai*] (連)

三年忌(法事)。三年忌の焼香。「三年の年期焼香」の義。

シ「チョー」ザ」[*ʃiˈtʃo:ˈɬa*] (名)

「ハミダーリ」[*ˈhamida:ri*] (神託。託宣)によって選ばれる神職者。4月と9月のハンジャンシーの時に島清め、お祓いの役を果たす神職者名。ヒチョーザという人もいる。その補佐役と共に外間殿でナンチュからシュバを取って「ノースァ」[*ˈno:ra*] (お祓い)をする。

「シマグシ」ナ」[*ˈʃimaguʃiˈna*] (名)

「アマミヤールハンジャンシー」[*ˈʔamamja:hanʄanaʃi:*] (竜宮の神)が持っているという「赤い棒」のこと。正しくは、「クルキミボー」[*ˈkurukimibo:*]という。

「シマジユクマーイ」[*ˈʃimaʄukuma:i*] (名)

イザイホーは久高島最大の祭祀で13年ごとに行われる、島の30歳、40歳から41歳までの女性がこれに参加して巫女になる洗礼の儀式である。巫女になると、その年齢階梯集団に組み入れられる。この集団組織が現在年間29を数える祭祀行事の主体となるのである。この組織は、「ナンチュー」[*ˈnanʃu:*] (30歳から41歳まで。役目は、祭りの時の祭場を清掃すること)、「ヤジク」[*ˈjaʄiku*] (42歳から53歳まで。役目は、祭りの時の世話や祭りの雑役に当たること)、「ウンサク」[*ˈʔunsaku*] (54歳から60歳まで。ただし60歳の方は5月の粟のマブッチ祭りの前日まで。役目は祭りの時に御神酒を接待すること)。「スァムトゥ」(60歳で5月のマブッチ祭りの前日より70歳まで。役目は白衣を着けてノロ、根神、掟神のお供をするだけで、祭りにおける仕事は免ぜられる)で構成される。5月の粟の初穂祭(マブッチ祭)の前日に、儀式は各自の家で、ノロや根人、根神、掟神を招待して就任式と祝宴がある。翌日の粟のマブッチ祭りの朝マティー、タマティーと翌日のタマティーの終了後、計3回、外間殿前方約35メートルの道路の中心点をシマジユクと称するが、そこで新スァムトゥ7名(足りない場合は前年就任したスァムトゥが加わって7名)がシマジユクを囲み、時計回りに7回まわりし、済んだら合掌する。

スァガイロー「キー」[*ˈraɡairo:ˈki:*] (名)

「下げ籠」の義。吊るして用いる竹製の籠。木の枝や軒に吊るして食物や食品の腐敗を防ぐのに用いた籠。食物保存用の吊るし籠。ミカ「シャー」 ナナム「ノー」 スァガイロー「キー」カイル スァブイタル<「ハクゴー シュ「タル」>[*mikaˈʃa:ˈ namamuˈno:ˈ ˈraɡairo:*「

ki:kairu ɾabuitaru <ʰhakugo: ʃuʰtaru>] (昔は生ものはスアガイローキー<下げ籠。吊るし籠>で保存した<保管した>ものだ)。

「スアキ」[ʰraʰki] (名)

酒。「スアキ ヌミン」[ʰraki numiŋ] (酒を飲む)。「スアキ」ヌミヤ「[ʰrakiʰnumja:] (酒好き)。「スアキジョー」グー」[ʰrakiʃo:ʰgu:] (酒上戸。大酒のみ)。(注)[ʰra]はインフォーマントの内省観察によると「サ」と「ラ」の中間音だという。

スアキジョー「グー」[ʰrakiʃo:ʰgu:] (名)

酒上戸。酒の大好きな人。「アラー」 スアキジョー「グー ナヤーマ」 ヒル「マラン」 ヌミン「ローヤ」[ʰʔara:ʰ rakiʃo:ʰgu: naja:maʰ ʰɸiruʰmaranʰ numinʰro:ja:] (あれは酒上戸になって、真昼間からも酒を飲むよ)。

「スアキヌミヤ」[ʰrakinumja:] (名)

酒飲み。大酒飲み。酒の好きな人。「アラー」 スアキ「ヌミヤ」 ヤル」[ʰʔara:ʰ rakiʰnumja:ʰ jaru] (あの人は<あれは>大酒飲みである)。

「スアティキヤ」[ʰratikja:] (名)

来月。

「スアティマンヌ」 ワカ「グラ」[ʰratimannuʰ wakaʰgura] (連)

「スォー」ルイガナシの別称。「スアティマン」は、「たてがみ(鬘)」、「ワカグラ」は「若駒」の義。久高島では、朔日、十五日に竜宮の神が若駒に跨って島を回るという口碑が伝わっている。スォールイは竜宮の神を祀る神職者であり、竜宮の神は、通称ハビヤンヌ ハンジャナシー (カベールに鎮座します神) といわれている。

「スアナバタ」[ʰranabata] (名)

七夕。昔は、人が死んだ時に墓のある人は墓の掃除をしたが、墓のない人もいた。七夕の日からは水を茶碗に入れて霊前に供えた。風葬は島の西海岸のウティ「キン」[ʰutiʰkiŋ] (地名)、「グスク」[ʰgusuku] (地名)、「クンリ」[ʰkunri] (地名)、「スォー」ル「ク」[θo:ʰruʰku] (地名) の地で行われた。洗骨は12年ごとの寅年の冬に行われた。戦前までは、旅で死んだ人の納骨をする際は、浜辺でくり舟<サバニ>の帆を用いて仮屋を作り、そこで三日間宿泊をした。墓の開けられる日を待って納骨したものである。位牌は島から余所へ移動させることは「ハットゥ」[ʰhattu] (法度。禁止) であった。久高島では「シーミー」[ʰʃi:mi:] (清明祭) にも墓参の習慣はない。久高島は、進貢船の船長や船員を輩出させた島であるから昔から墓は建造されていた。(参考) 大正12年に福治家の墓を建てた際、当時の貨幣で二千五百円の経費がかかった。当時の家一軒の建築費は六百円ほどであった。

「スアマガエ」[ʰramagaje:] (名)

スアマガエとは、イザイホーの洗礼を受けた巫女達の総称である。ウプフティ「シジ」[ʰu pɸutiʰʃiʃi] は、巫女達は島に九箇所あるウタキ (御嶽) から亡祖母が歴代継承したウタキ (御嶽) の神を継承するが、それはイザイホーの初日早々亡祖母の「トゥハシラ」[ʰtu pɸaʃira] (家の南東の角に祀ってある香炉) に鎮座しますよりしろ (依代) の灰を、



持参した香炉に移し帰り、自己の家の香炉に移して継承する。亡祖母のいない巫女は根神に米占いをして貰って決めるのである。従って「ウプフティ」シジ[ʔupɸutiʃiɕi]とは、「ウプフ」は敬称で、「シジ」は亡祖母から継承する「ウタキ」[ʔutaki]（御嶽）の巫女としての守護を受ける神霊のことである。

「スアマシワキ」[ʔamaʃiwaki]（名）

漁獲物の受け取り分を配分すること。銘銘<各自>が受け取る分の漁獲物。「ヤー スアマシ」[ja: ʔamaʃi]（君の受け取り分）。

スアムトゥ「ウイエー」[ʔamutuʔuije:]（名）

神女たちの年齢階梯制の名称の一つである「スアムトゥ」[ʔamutu]（60歳～69歳までの神女）に就任する祝い。5月のソージマティーの前日に行われる。神女が60歳になった年の粟の穂祭りの前日に「スアムトゥ」[ʔamutu]に就任する。スアムトゥに就任すると、祭祀の雑役から開放されてノロのお供をするだけの神職となる。ノロがスアムトゥ祝いをする神女の家に来て神事を執り行う。当家からは、ノロ、神人に対して前日にワーン「ネー」[wa:nʔne:]（ご案内）がある。当家では、ノロ、根神、根人に対する供物には皿で蓋をしておく。「スウシノー」イ[θuino:ʔi]（巳年生まれの男の人）は火の神に九合花米と「アマガシ」[ʔamagaʃi]（甘菓子）を供えて祈願する。60歳以上の神女がノロのお供をして祈願し、「スイル」ル[θiruʔru]（神歌、ティルル）を歌う。次に「スウシノー」イよりスアムトゥウイ「エー」をする人に盃を渡し、男兄弟よりノロへ御礼の献杯をする。最後に長男よりノロへ献杯して終わる。

「スアムトゥミヤー」[ʔamutumja:]（名）

外間殿にある、スアムトゥ（60歳から70歳まで巫女）達が座る斎場。

「スアルマーミキ」[ʔaruma:miki]（名）

おもに麦粟で醸造した祭祀用の濁り酒（神酒）。タルマミキとも記録されている。

スアルマー「ユー」[ʔaruma:ʔju:]（名）

祭祀の時のお代わり用として出される米のお粥。儀礼的なものとして箸をかけるだけで、食する真似をするをする際に用いられる。

「スアングワ」ティ[ʔaŋgwaʔti]（名）

旧暦三月。

スアングワティ「ディナ」[ʔaŋgwatiʔdina]（名）

三月三日に執り行われる大漁祈願の祭祀。「三月綱」の義か。十三歳の若者がスオールイや他の大人と一緒に追込み漁に行く。戦前は十三歳になる男子は、その日に初めて「スアナ」ジ[ʔanaʔɕi]（禪）を締めた。漁師見習いの意味が含まれている。その日に漁獲した魚から三尾～五尾を外間殿と両ノロ家へスオールイが献上する。それを「ウタカムン」[ʔutakamuŋ]（献上の漁獲物）という。残った魚は「ハッシャ」[haʃʃa]（頭。村頭）が刺身にし、神酒と共に徳仁港から竜宮の神へお供えして祈願をした。その日は徳仁港で酒宴が催された。ノロ家ではイラキ「ニンジャラ」[ʔirakiʔninɕara]（麦を煎って粉にしたもの

をイモと捏ねてつくった食べ物。ウムニー）と煮魚を供えて祈願した。ノロ家で作ったイラキニンジャラを、クダカ「ヌンドウ」チ[kudaka「nundu」ŋi]（久高ノロ家）からは久高スォールイ家へ、フカマ「ヌンドウ」チ[ɸukama「nundu」ŋi]（外間ノロ家）からは外間スォールイ家へ持参し、スォールイはそれをスォールイ棚に供えて祈願した。

スァングワティ「スァニティ」[raŋgwati「raniti」]（名）

旧暦三月三日。この日には女性も漁に行く。「ペーンシ」[pe:ŋŋi]（久高島の南側＜南の瀬の義か＞）や「スァーキ」[ra:ki]（津堅島と久高島の間にある干瀬）へ行き、蛸漁をしたり貝拾いをしたりした。

スァン「グワティマティー」[raŋ「gwatimati:」]（名）

麦の収穫感謝祭。「三月祭り」の義。外間殿と久高殿において、九枕の「ウカライ」[ʔuka rai]（お飾り）、酒、煮魚等を供えて祈願した。神に対する感謝の祭り。供物は、戦前は麦飯を供えたが、現在は米飯を供えている。これを「ジーンバイ」[ŋi:ʔmbai]（地元の土地で生産された穀類で作る供物の飯。盛飯。ユーナの葉で覆い、ススキの茎を挿したものを丸い小型のバーキ＜竹箆＞に入れ、お膳に載せたもの。その上に小皿に塩を入れたものを置く）といい、「ハッシャ」[haŋŋa]（頭。村頭）と各組（10組）から供出される。久高殿と外間殿においてアサマティーとユーマティー、そして翌日のアサマティーに供えられた。アサマティーの後にスパーラキに参拝し、その後にフボー御嶽に参拝する。ユーマティーは、一膳に7枕ずつ揃えたもの二膳（マーミキ）を供え、「ンチャティオージ」[nʃatiʔo:ŋi]で「タルマーミキ」[taruma:miki]（「樽真神酒」の義か）の上を外間ノロが四回祓う。その後、ノロや祭り参加者にトーウンシャクが神酒を捧げる。ウンシャク[ʔuŋŋaku]は53歳から60歳までの神女が担当する神職（4名）。「ウヤウンシャク」[ʔujaʔuŋŋaku]は両ノロと根神に酌を捧げる神職（3名）。「トーウンシャク」[to:ʔuŋŋaku]は60歳以上の「スァムトゥ」[ramutu]に神酒を捧げる神職（4名）。「アシクム」[ʔaŋikumu]（枕の一種で柄が付いているもの）はムラガッシャ（頭）がトーウンシャクに神酒を注ぐ際に用いられる。トーウンシャクに神酒を注ぐのはムラガッシャ（頭）の役目である。ウヤウンシャクにはニブ「スウイ」[nibu「θu i」]（神女）が担当する。ニブスウイはイザイホーの時のスィルル[θi ruru]（神歌）にも歌われている。「ンナグラ」[nnagura:]（数え年15歳の少年）が魚を吊るした棒を担いで神職者の後ろに立ち、スォールイと神職者が並んで東方に向かって祈願した後、少年が「クカーウー」[kuka:ʔu:]と1回唱えたとユーマティーが終わる。外間殿、久高殿では、クカーウーの時の魚を煮魚にして翌日のアサマティーに供物として出す。煮魚は祈願した後に、ノロや神職者によって食された。

「スァンカー」[raŋka:]（名）

生後一年目の誕生祝い。「スァンカー」 ウイ「エー」[raŋka: ʔui「je:」]（誕生祝い）ともいう。メリケン粉を使って「アンダーギ」[ʔanda:gi]（油揚げ。てんぷら）や「フクミン」[ɸukumiŋ]（エビてんぷら）、「カタハランブー」[kataharambu:]（祝儀用てんぷら）、「スィームン」[θi:mug]（吸い物）、「ハラザカナ」[haraʔakana]（魚の煮付）、ンギヤナ「

ドゥネー[ɲgjanaˈdune:] (ニガナの和え物) などを作って、本家や母方の仏前に供えた。書物や算盤、お金などをお膳に並べて子供がどれを取るかを楽しみつつ、大きく成長することを祈願した。「シューヤ チャクシヌ スァンカー」 ウイ「エー ヤイビークトゥ」 イモーチ ウイ「エーツ」チ スウラシン「ショーリバ」[ʃu:ja ʃakuʃinu ɾaŋkaː ʔuiˈje: jaibi:kutu ʔimo:ʃi ʔuiˈje:tʃi θu ɾaʃiŋʃo:riba] (今日は長男の誕生祝いですのでおいでなさってお祝いして下さい)。

「スァンシン」[ʃaŋʃiŋ] (名)

三味線。「三線」の義。シブ「バヤー」 ドゥー「シャーマン ハハイタン チュン」 グタ「スァー」[ʃibuˈbajaː duːʃa:mam ʔɸaitan ʃuŋˈgutaˈɾa:] (芭蕉の渋張り三味線は自分自身で張った人もいたよ)。「アラー ンギヤナー」 ヤスイガ 「スァンシン ピキーヤ ンギヤナー」 スァン「タン」[ʔara: ɲgjanaː ja θi ga ʃaŋʃim piki:ja ɲgjanaː ɾaŋˈtaŋ] (あれは吃音者だが三味線を弾くと吃らなかった)。

スァン「ニンキ」[ʃaŋˈniŋki] (名)

三年忌。

「スァンリンショー」[ʃaŋriŋʃo:] (名)

易者。「三世相」の義。筮竹を使い、易によって人の吉凶を占うを業とする人。人の生年月日や干支、人相などによって、その人の吉凶を占っていた。久高島の人ユタの家には行ったが、スァンリンショーの家には行かなかった。

「ジーキヌ」 グァンタティ「[ʃi:kinu ɡwantati] (連)

屋敷の願立て。「ジーキヌ ウグワン」[ʃi:kinu ʔugwaŋ]ともいう。普通はヤシ「キヌ ウグワン」[jaʃiˈkinu ʔugwaŋ] (屋敷の願) という。ヤシ「キヌ ウサンミ」[jaʃiˈkinu ʔusammi] (屋敷の願) ともいう。

スイカ「シュン」[θikaˈʃuŋ] (動)

敷かせる。当てる。「ハコー スイカ「シュン」[ˈhako: θikaˈʃuŋ] (おむつを当てる敷かせる)。

「ジーンバイ」[ʃi:ʔmbai] (名)

島の畑から取れる穀物で作られる供物のお握り。3月の麦の収穫祭と6月の粟の収穫祭に供えるお握り。外間ノロ家側の、スウキヤー、グスウク、スウルバン、ウフフスイ、イキン、外間ノロ家、外間村頭から出るンバイ、計7膳と久高ノロ家、久高村頭側から出る7膳を両ノロと補佐役のウッチュガミ (掟神) の三人が「ンチャティオー」ジ「[nʃatiʔo: ʃi]で祓った。これをユーナの葉で覆い、ススキの茎をさし、丸い小型のバーキー等に入れてお膳に載せたもの。その上に塩を盛った小皿を置く。ジーンバイは久高殿と外間殿のアサマティーとユーマティー、そして翌日のアサマティーに供えられる。アサマティーの後にスベーラキに参拝し、その後にフボー御嶽に参拝する。ユーマティーには、一膳に七椀ずつ並べて供えた「スアルマーミキ」[ʃaɾuma:miki] (タルマーミキ) 二膳の上を外間ノロが「ンチャティオー」ジ「[nʃatiʔo: ʃi]で祓った。その後にノロや参加者にトーウンシャクか

ら神酒が捧げられた。

「ジク」[ʔɕiˈku] (名)

普通の家庭の女性。一般の家庭婦人。「俗」の義か。色町の女性を「ハハナ」[ʔpɕana] (花) と言うのに対する表現。

「ジグク」[ʔɕiguku] (名)

地獄。

シチ「ニンキ」[ʃiʃiˈniŋki] (名)

七年忌 (法事)。七年忌の焼香。

シティ「グワティ」[ʃiˈtigwati] (名)

七月。

シティグワティ「ディナ」[ʃitigwatiˈdina] (名)

「七月綱」の義か。「ウプフマーミキ」[ʔupɕuma:miki] (7月下旬の「ミーンニー」[mi:n ni:]<壬の日>に執り行われる大漁祈願祭)の後、適当な「ミーンニー」[mi:n ni:] (壬)の日を選んで (普通は「アラミンニー」[ʔaraminni:]<月の初めの壬の日>に) 執り行われる。13歳と15歳の男子 (「ンナグラ」[nnagura:]<貝を保管する所の係りとなる男子>) がスォールイガナシーと一緒に「スアーキビシ」[ra:kibiʃi] (津堅島と久高島の間にあ  
る干瀬の名。海底地名) で追い込み漁をし、漁獲した魚を「ウタカムン」[ʔutakamuŋ] (神に供える漁獲物) として、「ミー」アムトゥと神職者に献上する行事。

シマ「グシナ」[ʃimaˈguʃina] (名)

「クルキミ」ボー「[kurukimiˈbo:] (シマグシナの杖。棒) ともいう。四月と九月の「ハン  
ジャナシー」[hanɕanaʃi:] (島を祓い清める神事) の祭祀に用いる棒。赤い棒。島建ての  
時、アマミヤハンジャナシーが持つたといわれる棒。ユナンマの浜まで下りてきて、こ  
れで浜を祓い清める。ニライカナイから来臨さらた神が久高島を祓い清めるといわれてい  
る。「シュバ」[ʃuba] (ススキの茎) を両手に持って、それを振りながら清める。これが  
終わると外間殿の前で報告をする。

「シマジク」[ʃimaɕiˈku] (名)

ナー「レーラー」[naˈre:ra:] (宮平家) の左横にあたる道。「スアムトゥ」[ramutu] (60歳  
になった巫女) 7名が7回まわる儀式をするところ。

シマ「ジュリー」[ʃimaˈɕuri:] (名)

部落集会。「村揃い」の義。村人が集まって村協議を行うこと。

シム「ティキ」[ʃimuˈtiki] (名)

十一月。「ティムティキ」[timutiki] (霜月) ともいう。

「シャクウガミ」[ʃakuɕugami] (名)

「酌拝み」の義。正月元旦と三日の二回に亘って外間殿において執り行われる盃事。男は  
数え年十五歳から七十歳まで、女子はイザイホーを願って、それに参加した同じく七十歳  
までの巫女が対象である。しかし現在は島外からの参列者も参殿している。盃事は、元旦

はユキガ「シャク[jukiga「jaku]（男酌）から始まる。元旦の早朝、外間殿では外間ノロと根神が高膳に煮た芋二椀とお神酒九椀の供物を置いて、火の神を始め、祀られている神々に供えて豊作と豊漁の祈願をする。その頃エラブ鰻の燻製をする「スヌヌチグワー[「θu nufigwa:]では久高ノロと村頭夫妻らによるウラブ鰻のご飯を火の神と「トゥパハシリ[「tu pΦafiri]の香炉にお供えして豊漁祈願がなされたが、現在はノロも村頭も不在で、それは執り行われていない。外間ノロ家でも外間殿と同様な祈願がなされ、久高ノロ家でも久高ノロによる祈願が行われる。従前はアサンハリ（各家庭）でも豊作の祈願が早朝になされた。午前十時頃には、外間殿の庭に男の神職や島人も集まり、外間ノロ家の行事に参加した巫女らの来るのを待ち、やがて外間ノロを先頭に巫女らが来ると殿の前庭に五列に並び、ヘーナーガーキの「スイリ「ル[「θi ri「ru]（ティルル。神歌）が謡われる。前列右端の外間ノロが一節毎によどみなく謡いだと、巫女らがその都度「ウイレ[「?uire:]（復誦）するというような荘重極まる儀式である。歌意は多面にわたるが、神職者始め島人の健康祈願、豊作豊漁祈願、航海安全祈願に及び、両ノロと外間根人に与えられているエラブ鰻の採取場所も指定されて謡い込まれている。ヘーナーガーキーの儀式が済むと、ノロ、根神は「フワーシブン[「Φa:jibug]（円形の高膳）の一つにお神酒九椀を、もう一つには徳利と酒盃を置き、まず火の神に供え、次に外間殿に祀られている守護神の神々に供えて、人々のこの一年の健康を祈願する「シャクヌフェー[「jakunuΦe:]（酌拝み）がなされる。この祈願により、神の「セジ」がノロと根神に憑依されたとされる。酌は先ず神職者から始まり、続いて一般は年齢順に二名ずつ参殿してノロ、根神と対面して徳利から注いだ酒盃を盆に載せてノロ、根神に捧げるとノロ、根神はそれを受けて盆を目の高さに持ち、対面した人のこの年の健康を念じたのち盃を返す。対面者はそれを拝受して酒盃を頂く。次にノロと対面した人は根神に、根神と対面した人はノロに交互に酒盃を盆に載せて捧げる。ノロと根神は先刻と同様の所作を繰り返して盆を対面者に返す。対面者は酒盃を頂いてのち降殿し、カチャーシに合わせて踊ってから自席に戻るが、その際の踊りは神の加護に対する感謝と喜びを表すものと考えられる。従前のユキガシャク（男酌）のしんがりは村頭が勤めたが、現在は村頭がいないので、最年少者でもって終了する。続くユナグ「シャク[junagu「jaku]（女酌）の酌拝みは、お神酒で執り行われる。ノロ、根神から酒盃を頂くということは、神の「セジ」が憑依して神意を受け継いでいるノロ、根神からの祝福の酌を賜ることを意味するから、島の人々はその儀式を酌拝みという。「クガニシャク[「kuganijaku]（黄金酌）の意味である。近年はノロが高齢で正月の行事を始め、すべての行事に参加されないし、根神も不在であるので外間根人がノロ、根神に代わり正月行事の司祭を執行している。従って、あの荘重な儀式のヘーナーガーキのティルルも現在は省略されている。

「シャクヌフェー[「jakunuΦe:]（名）

「酌の拝」の義。ノロが酌を拝む人から神酒を受けて、その人の一年中の健康祈願をし、その神酒を酌を拝む人に授けて祝福すること。

「シャミチ」[ʃamiʃi] (名)

海岸沿いの道。「下道」の義。「イリーミチー」[ʔiri:miʃi:] (西側の道) ともいう。十五夜、正月、お盆等の節日に死亡した人はサギガタミにして葬送した道。

ジュー「グヤー」[ɕu:ˈguja:] (名)

8月15日に行われる健康祈願祭。前日の14日にパハカイ「メー」[pʰakaiˈme:] (「計り米」の義。15歳から70歳までの男子が供出するもの。糯米3合、現金、酒が十五夜の祭祀用として供出される) が行われる。これでもってブー「シンカ」[bu:ˈʃiŋka] (賦役仲間) が餅を作る。正人1人当たり3段重ねの餅を1組ずつ作る。外間殿では村中の正人(15歳から70歳までの男子)の分を作り、久高殿ではパハカイメーを提出した人の分(参拝する関係者の分)のみ作る。出稼ぎに行った人の分も当該家庭からパハカイメーが供出された。祈願が終了すると各家庭から供出された人数分の餅が各家庭へ配られる。外間殿ではデイゴの樹と石垣の間に「ミヨープ」[mjo:bu] (屏風。幕) が張られ、提灯が吊るされ、その下に供物(普通の高膳にカンビン4本<正人よりの供物>、円形の高膳に2個のコップ2組、「スアルマーミキ」[ʀaruma:miki]<樽真神酒>9椀<神女からの供物>)が供えられる。それに9個の餅(3段重ね。外間ノロの供物)、7組の餅(根神の供物)、5組の餅(外間根人の供物)、3組の餅(ノロのウメーギの供物)が供えられる。それらを揃えて供え、月に向かって祈願をし、次に外間殿に向かって祈願がなされる。その次に外間拝殿の前で東方に向かって同じ祈願がなされる。その時外間ノロ家の香炉と外間殿の大香炉を外間拝殿の壇の下に置き、線香を一杯立てて焚く。外間殿の香炉も同じく拝殿の下に移して、シマウコー(沖縄板香)を一杯立てて祈願する。祈願が終わると、各家庭へ餅が配られる。久高ノロ家でも外間ノロ家と同じ祈願がなされる。配られた餅は各家庭のトゥパシラの前で、その家の人によって祈願がなされ、火の神の前にも祈願される。

ジュー「グワ」ティ [ɕu:ˈgwaˈti] (名)

十月。ジュー「グワター マーミキグワヌ マティーヌ」 アスアー 「ウヌ ユスアン ディラー」 スォー「ルイヌ ナイハワイヌ」 アスアー [ɕu:ˈgwata: ma:mikigwa:nu mati:nuˈ ʔara: ʔunu juʀandira:ˈ θo:ˈruinu naihawainuˈ ʔara:] (十月はマーミキグワの祭りがあるよ。その日の夕方からスォールイの交代があるよ)。

ジュー「スアン」ナヤー [ɕu:ˈranˈnaja:] (名)

「十三歳になった者」の義。十三歳の男子。スァングワティ「ディナ」[ʀangwatiˈdina] (3月3日の大漁祈願祭) に、13歳になる男子が始めて禪をしめて大人と一緒に追い込み漁をした。

ジュー「スアンニンキ」 [ɕu:ˈranniŋki] (名)

十三年忌の法事。十三年忌の焼香。

シューカー「ワタイ」 [ʃu:ka:ˈwatai] (名)

「潮路<潮川>渡り」の義。旅で死んだ人のクティ「スアマ」[kutiˈrama] (お骨) を、海を渡って故郷の墓所へ納骨すること。三日間ほど浜で宿泊して不浄を祓い清めた後、墓

のある人は墓に納骨し、墓のない人は海辺のガマ（洞窟）に納めた。浜での小屋掛けは、後には1泊2日で終了するようになった。サバニの帆をテント代わりにして小屋掛けをし、宿泊した。久高島では寅年の洗骨に合わせてシューカー「ワタイをした。

「ジューマティー」[ʔu:mati:] (名)

「重祭り」の義。新スォールイが初めて参加する行事。島人の健康祈願祭。昨年10月から今年の9月までの健康のシリガフー[jiriga<sup>p</sup>Φu:]（感謝の祈願）と、今年10月から来年9月までの健康祈願の「ウグワンダティー」[ʔugwandati:]（願立て）がジューマティーで祈願される。従って、これは「シリガフー」と「グワンタティー」の二つの祭祀を二重に重ねた祭りの義であろう。祭りは全神職者によって執り行われる。「ハッシャ」[ˈhaffa]（村頭）の妻によって祭りの諸準備がなされる。祭りの前日にはハカイ「メー」[hakaiˈme:]（祭祀用の米と金銭の供出）が行われ、神職者の妻たちもこれを加勢する。シリガフーの祭りの当日は、朝早くから外間殿で供物の準備がなされる。「ニンジャラ」[ˈninɟara]（麦と芋を煮て握った握り飯）が昔の供物であったが、現在は米の握り飯に変わっている。細長く握った飯を九個ずつ立てて椀に盛り、九椀をハハーシ「ブン」[<sup>p</sup>Φa:ʃiˈbuŋ]（お鉢盆）に入れて供える。それにカンビンに酒を入れて1本、焼き魚を一皿供える。外間殿の火の神の前の供物はカンビン2本、盃1個、「メーニギリ」[ˈme:nigiri]（米の握り飯）を2椀、ハラザカナ2皿、これらを供えて昨年10月から今年10月までの感謝の祈願をする。それが済むとウプフグイ[ʔu<sup>p</sup>Φugui]（大庫裡）の前で九椀の供物を供えて外間ノロが祈願をする。参加者は神職者だけに限られており、島人全員の健康祈願が執り行われる。それが済むと二人のスォールイとアカッチュミーが供物を頂く。供物を頂くことを「ハミー」ン[ˈhami:ˈŋ]（押し頂く。捧げ頂く）という。村頭の妻がスォールイとアカッチュミーの家に供物を配達する。

「シュバ」[ˈʃuba] (名)

（植）茅。悪霊を祓うのに用いる茅。

シュバ「サシ」[ʃubaˈsaʃi] (名)

シバサシの祭り。

シュラスア「ナシュン」[ʃuraraˈnaʃuŋ] (動)

洗骨する。昔は寅年に洗骨した。シン「クティーヤ スウラドゥシヌ」 ジュー「グワティヌ ハハティカ ピーカイ」 シマ「ジュー」 シン「クチャー シュン」[ʃiŋˈkuti:ja θu ra duʃinuˈ ɬu:ˈgwaɪnu <sup>p</sup>Φatika p'i:kaiˈ ʃimaˈɬu:ˈ ʃiŋˈkutja: ʃuŋ]（洗骨は寅年の10月20日に、島中の家で洗骨が行われた）。

「シュリユリター」[ˈʃurijurita:] (名)

イザイホーに参加して巫女になる洗礼儀式を受けた40歳代後半から50歳代前半の年齢階梯集団に属する巫女。ソージャクの補助をする。

ショー「ガチ」[ʃo:ˈgaʃi] (名)

正月。「ギー」 「ショーガチ」 ヤイ「ビールヤー」[ˈgi: ˈʃo:gaʃiˈ jaiˈbi:ruja:]（いい正月

ですねえ)。

ショーガチ「リー」[ʃo:gaʃiˈri:] (名)

正月の年始回り。ショー「グワチーヤ」 シャク 「ウガミン」 メー「カイ」 ウプフ「ヤーヌ グリージン」 ウガリ「カラー マタ ハナスア スアットウーヌ」 ウヤ「スイラネー」 ショーガチ「リー シーガ」 イキン ウヤ「スイラヌ トウクマー」 シャク 「ウガリカラ イキ」ン 「チュン」 ゲン[ʃo:ˈgwaʃi:jaˈ ʃaku ˈʔugamimˈ me:ˈkaiˈ ʔuːʔuːˈja:nu guri:ʃiŋˈ ʔugariˈkara: mata hanara ʔattu:nuˈ ʔujaˈθi rane:ˈ ʃo:gwaʃiˈri: ʃi:gaˈ ʔikiŋ ʔujaˈθi ranu tukuma:ˈ ʃaku ˈʔugarikara: ʔikiˈn ˈʃuŋˈgug] (正月は酌を拝む前に本家のご霊前を拜んでから、また可愛がって頂いている先輩に正月(年頭)の挨拶をしに行く。先輩の家<所>へは酌を拜んでから行く人もいる)。

ショー「ガチリキー」[ʃo:ˈgaʃiriki:] (名)

旧暦一月。「しょうがつ・つき(正月月)」の義。ショー「グワ」チグワンタン[ʃo:ˈgwaˈʃigwantan] (正月元旦) には、「モーカーシー」ヌフェー[ˈmo:kɑ:ʃi:ˈnuːʔe:] (豊作祈願の拝)、「シャクヌフェー」[ʃakunuːʔe:] (酌の祈願の拝)があり、「ヘーナーガーキー」ヌ「スイリル」[ˈhe:na:ga:ki:ˈnu ˈθi riru] (健康と豊作、豊漁祈願の神歌。イザイホーに参加した神女たちが歌う)が歌われる。ノロと根神より、15歳以上70歳までの男子と、イザイホーに参加した70歳までの神女が酌を拝受<拝む>する。その後に直会が行われる。男達は同志の者が各自の家を回って、「ヤープフミカシ」[ˈja:ʔuːmikaʃi] (家を賑わすこと)をする。

ショー「コー」[ʃo:ˈko:] (名)

焼香。法事。「ナンカ」[ˈnaŋka] (七日焼香。七日忌)。チュ「ナン」カ[ʃuˈnaŋˈka] (第1回の法事。新七日忌)。「タナンカ」[ˈtananka] (二七日忌)。「ミナンカ」[ˈminanka] (三七日忌)。「ユナンカ」[ˈjunanka] (四七日忌)。イティ「ナンカ」[ʔitiˈnaŋka] (五七日忌)。「ムナンカ」[ˈmunanka] (六七日忌)。シン「ジュークニ」チ[ʃinˈʃu:kuniˈʃi] (四十九日忌)がある。一、三、五、七忌には餅を供えた。二、四週忌には、お握りと菓子を供えた。ハラザカナ[haraʒakana] (てんぷら、かまぼこ、こんぶ、大根など)をお重に詰めて供えた。チュ「ナンカ」とシン「ジュークニ」チは大きくする。重箱と餅を、チュ「クミ」[ʃuˈkumi] (一組の重。餅二重箱、ハラザカナ、二重箱をセットにしたもの)を供える。

ショー「コームン」[ʃo:ˈko:mun] (名)

焼香物。法事に供えるもの。仏前に供える供物。幼児達は供物の餅やご馳走を頂くのを楽しみにしていたので、無邪気にも、イッ「ター パハーパハー」 ヒーヤ 「ムチ」 「カー」ヤ「ー」[ʔitˈta: ˈʔa:ʔa:ˈ ʃi:ja ˈmuʃi ka:ˈjaːˈ] (君のところのお祖母さんが亡くなったら餅を食べようねえ)などと話していたものである。法事用の料理は日常的には食することの出来ない珍品料理であった。

「シラタルー」[ˈʃirataru:] (名)

御嶽名。シラタルー宮。伝説上の人名で、玉城村百名から始めて久高島に来た人と言われ



ており、島を創建した人として祀られている（『遺老説伝』）。妻は、「ハハーガナシー」[<sup>p</sup>Φa:ɡanaʃi:]（母ガナシ様）といわれており、「シラタルー ハハーガナシー（シラタルー母ガナシ様シラタルーご夫妻様）」と尊称されている。ウヅフニシミ（大西銘）から香炉をウドウンミヤの東側に移してお宮を建立し、村人に拝まれている御嶽。ウヅフヌシガナシーのウグワンダティーに拝んで回る。

「シワー」シ[ʃiwa:ʃi]（名）

十二月。「師走」の義。

シン「ク」ティ[ʃiŋʃkuʃti]（名）

洗骨。13年ごとの寅年の11月に死者の洗骨を行った。旅で死んだ人は洗骨までは墓のある家でも、墓の下に「ガマ」[ɡama]（洞窟）に安置していた。「シェンジェノー」スア「ビ」カイ「マーシュン」チョー「ハハ」カヌ「ツシャヌ」ガマカイ「ウチューティ」シン「ク」ティヌ「ピール」シン「ジュチャー」イリータル「シン」クチ「ムツ」チ「チューン」バーイヤ「ユランバマヌ」パハマカイ「プフー」ピチ「ミッカー」スウ「マティカラル」ムラ「ウチャー」イラリータル[ʃenʃeno:ʃraʃbiʃkaiʃma:ʃunʃfo:ʃΦaʃkanuʃʃanuɡamakaiʃuʃu:tiʃiŋʃkutinupi:ruʃinʃʃuʃa:ʃiri:taruʃiŋʃkuʃimutʃʃiʃu:mʃba:i:jaʃjurambananuʃΦamakaiʃΦu:pʃiʃiʃmikka:ʃθuʃmatikararuʃmuraʃʃuʃa:ʃirari:taru]（戦前は旅で亡くなる人は墓の下に洞窟に置いておき、洗骨の日にお墓へは入れた。洗骨を持ってくる場合はユランバマの浜に帆を張って、三日間泊まってから村内へは入ることができた）。洗骨する事を、「シュラスアナシュン」[ʃuranaʃuŋ]（きれいにする。美しくする。＜洗骨する＞）ともいう。悪天候で徳仁港へ入港せざるを得ないときは、穢れを祓う祈願をした。これを「ウスウリヌ」ウグワン[ʃuθuʃrinuʃʃuɡwaŋ]（畏敬の祈願。恐れ敬いの祈願）という。徳仁港の神、スベーラキを始めとする諸神に対する畏敬の祈願という。

シン「グワティ」[ʃiŋʃgwati]（数）

四月。

「シンジュ」[ʃinʃu]（名）

墓。「寝所」の義か。「シンジュ」マチガニ[ʃinʃuʃmaʃʃigani]（墓）ともいう。

「スジ」[suʃi]（名）

神女が額に付ける印。米粉を溶かして用いる。ノロが新しく入ったナンチュの額につけるしるし。

「スアー」キ[ʃa:ʃki]（固）

海底地名。津堅島と久高島の間にある干瀬（環礁。リーフ）の名。旧暦の三月三日の大潮には、女性たちも「スアー」キ[ʃa:ʃki]へ蛸漁に行った所。

スア「ティウグワン」[ʃaʃtiʃuɡwaŋ]（名）

御願立て。「立てお願（立願）」の義。神仏に祈願すること。神仏に願をかけること。

「スアムトゥ」[ʃamutu]（名）

イザイホーに参加して巫女になる洗礼儀式を受けた、60歳から70歳までの年齢階梯に属する巫女（神女）をいう。ノロ、根神、掟神のお供をするだけで、スアムトゥ座に侍り、神酒の接待を受ける。そして祭りにおける雑務は免除される。ウンサク（54歳から60歳未満の巫女）が60歳になったらスアムトゥに就任する。その就任式をスアムトゥ「ウイエー」[ramutuʔuije:]（スアムトゥ祝い）という。

「ステー」[ʔsyte:]（名）

所帯。家計の遣り繰りをする。家庭経済を切り盛りすること。「スアー」ガ「ステー」ムツチューガ[ʔra:ʔga syte: ʔmutʃu:ga]（誰が家計を切り盛りしているか。家計の責任者は誰か）。「ステー」ジョー「リ」[ʔsyte: ʔʃo:ʔri]（所帯もち上手。家計の遣り繰り上手）。

「スネー」[ʔsune:]（名）

和え物。大根やにがな（苦菜）と刺身を和えて作る酢の物。「酢の和え」の義か。デーケン「ドゥネー」[de:kunʔdune:]（大根の和え物）。ンギヤナ「ドゥネー」[ŋgjanaʔdune:]（苦菜の和え物）。

「スバサシ」[ʔsubasafi]（名）

旧暦八月九日に行われる村のお祓いをする神行事。

スリー「ジュリー」[suri:ʔʃuri:]（名）

集まること。うち集うこと。「揃いぞろい」の義。「アマヌ」ウイエーヤー「チ」スリー「ジュリー」ツチューティ「イキタスアー」[ʔʔamanu ʔʔuije:ja:ʔʃi suri:ʔʃuri:tʃu:ti ʔikita ra:]（あそこのお祝いに打ち揃って行ったよ）。

「スン」[ʔsun]（動）

する。動作を行う。「スアン」[ʔraŋ]（しない）。「チャン」[ʔʃaŋ]（した）。「スイバ」[ʔʃi ba]（～したら）。「シグトゥ」ツチャー「ヘー」イン[ʔʃigutu tʃi:ʔ he:ʔiŋ]（仕事をして帰る）。「スイバ」[ʔʃi ba]（～しなさい）。「シグトゥ」スイバ[ʔʃigutu ʃi ba]（仕事をしなさい）。「シグ」トゥ「スン」チョー「グラン」[ʔʃiguʔtu ʔsunʔʃo: ʔguraŋ]（仕事をする人はいない）。「ススアー」ススイガ「ムロー」スアンローヤー[ʔsuʃa: su ʃi ga muro: ʔraŋro:ja:]（することはするが、全部はしないよ）。「シグトー」スアン「トゥーティン」ティマン「ガン」トゥラ「リーヤ」[ʔʃiguto:ʔ ʔraŋʔtu:tinʔ timaŋʔganʔ turaʔri:ja]（仕事はしないで手間賃が取れるものか）。「シグトー」スイバル「ティマー」トゥラ「リール」[ʔʃiguto: ʃi baruʔ tima: turaʔri:ru]（仕事をしてはじめて手間賃も貰えるものだ）。

「スイーンム」チ[ʔʃi :mmuʔʃi]（名）

各門中が細長い餅を作り、高膳に供えて執り行われる健康祈願祭。八月十一日の「ハハティグワティグレイ」[ʔpʰatigwatigurui]（八月踊り）が終わって後、細長い餅を1椀に9本ずつ立て、その9椀をファーチブン（高膳）に載せて外間ノロ家や久高ノロ家が外間殿において健康祈願を執り行う。その翌日、ムトゥ家であるアガリンジョー家、ウプンシミ

家、大里家、大西銘家、チマリヤー、宮平家においても健康祈願が執り行われる。

「スィームン」[<sup>1</sup>θi:mup] (名)

料理名。吸い物。煮立てた出し汁に塩などの調味料を加えて味をととのえ、魚肉や野菜を入れて実とする。ンギャナ「ドゥネー」[ngjana<sup>1</sup>dune:] (苦菜の和え物)と一緒に各祝儀、  
「スァンカー」ウイエー「<sup>1</sup>ragka:<sup>1</sup>ʔuije:] (誕生祝い)などに出された。

「スィーンユタ」[<sup>1</sup>θi:njuta] (名)

神職者(神人)の一種。各家庭の祭祀の祈願をする人。一族の家庭レベルの一切の神事を執り行う巫女。一族の中でカミダーリ(神懸り)した人物がスィーンユタになることに決まっている。

スィカ「シュン」[θi ka<sup>1</sup>ʃug] (動)

あやす。子供をあやす。「すかす(賺す)」の義。「ワラ」ビ スィカ「シュン」[wara<sup>1</sup>bi θi ka<sup>1</sup>ʃug] (子供をあやす)。スィカ「チャン」[θi ka<sup>1</sup>ʃag] (あやした)。スィカ「スィバ」[θi ka<sup>1</sup> θi ba] (あやしなさい)。「ワラ」ビ スィカ「チャクトゥ」ナカン ナタン「<sup>1</sup>warabi θi ka<sup>1</sup>ʃakutu nakannatag] (子供をあやしたので泣かなくなった)。「ム」スィ「ワラ」ビ スィカ「シーヤ」ナ「カン」[<sup>1</sup>mu<sup>1</sup>θi<sup>1</sup> <sup>1</sup>warabi θi ka<sup>1</sup>ʃi:ja<sup>1</sup> na<sup>1</sup>kag] (もし子供をあやしたら、子供は泣かないよ)。スィカシ「ジョーリ」ヤンシャコー「ワラ」ビヤ「ナカン」[θi kaʃi<sup>1</sup>ʔo:ri jaŋʃako:<sup>1</sup> wara<sup>1</sup>bija<sup>1</sup> nakan] (あやし上手だったら子供は泣かない)。

スィティ「グワティ」[θi ti<sup>1</sup>gwati] (名)

「七月」の義。お盆。旧暦7月13日の午後2時ごろに「ウンケー」[<sup>1</sup>ʔunke:] (お迎え。祖霊迎え)を行う。仏壇には砂糖きびを約20センチの長さに切ったものを5,6本束ねて位牌の両側に供え、グシナ「グジー」[guʃina<sup>1</sup>guʃi:] (担い棒。「担い萩<黍>」の義)2本も供える。重箱のチュ「クミ」[ʃu<sup>1</sup>kumi] (「1組」の義。餅、2重箱と、「ハララカナ」[<sup>1</sup>hararakana] <昆布、牛蒡、蒲鉾、焼き魚>などを詰めた2重箱)を供えるのが慣わしである。「ハンジュー」[<sup>1</sup>hanʃu:] (重箱1組の半分のこと)は供えなかった。14日の昼には「ダグ」[<sup>1</sup>dagu] (だんご)を供え、「ウー」クイ「<sup>1</sup>ʔu:<sup>1</sup>kui] (お送り。精霊送り)は16日の昼に行われた。「スァナバタ」[<sup>1</sup>ranabata] (七夕)からは仏壇に水を供えた。

スィティ「グワティディナ」[θi ti<sup>1</sup>gwatidina] (名)

「七月綱」の義。漁労祭。「スァーキ」ビシ「<sup>1</sup>ra:ki<sup>1</sup>biʃi] (津堅島と久高島の間にある環礁。ターキビシと記されることもある)で「アンティキヤー」[<sup>1</sup>ʔantikja:] (追い込み漁)をすること。15歳までの男子をスォールイが引率し、一緒に漁をする。漁獲物の中から選んだ献上の魚(「ウタカムン」[<sup>1</sup>ʔutakamup])3尾か5尾を「ミー」アムトゥ「<sup>1</sup>mi:<sup>1</sup>ʔamutu]に献上する。

「スィナンバイ」[<sup>1</sup>θi nambai] (名)

「砂のお握り」の義。泥でお握りを作ったもの。「ンチャンバイ」[<sup>1</sup>nʃambai] (土の握り)ともいう。「ヒジムン」[<sup>1</sup>ʃiʃimup] (化け物。マジモノ。魔物)に化かされて「砂のお握り」

を食わされたという昔話がある。「スアンニチ ミーカイ」 トゥメーラ「タッチスイガ  
スイナンバイ キラトゥータッチスアー」[<sup>ʔ</sup>ṛanniŋi mi:kai<sup>ʔ</sup> tume:ra<sup>ʔ</sup>tatʃi θi ga θi na  
mbai kiratu:tatʃi:ra:] (三日目に探しだされたそうだが、砂のお握りを食わされていた  
そうな)。「ウラー」 シマヌ スウスウ「インシャー」 ハハナ「シー ヤイビール」[<sup>ʔ</sup>ura:<sup>ʔ</sup>

ʃimanu θu θu<sup>ʔ</sup>igfa:<sup>ʔ</sup> <sup>p</sup>Φana<sup>ʔ</sup>ʃi: jaibi:ru] (これは島の年寄り達の話でございます)。

「スイババンミ」チ「<sup>ʔ</sup>θi babammi<sup>ʔ</sup>ʃi】 (固)

地名。葬式の時、一時ガンを止めて、ニラー「ハナー」[nira:<sup>ʔ</sup>hana:] (ニライカナイ) へ、  
「ユースイリヤビタン」[<sup>ʔ</sup>ju: θi rijabitag] (亡くなりました<世を去りました>) と報告す  
るところ。ガンを担ぐ男七名が報告した。「アヌ」 ウプフ「シュー ソーシキヤー」 シマ  
「ジュンチュ」 ンギ「トゥータッチスアー」[<sup>ʔ</sup>ʔanu<sup>ʔ</sup> ʔupΦu<sup>ʔ</sup>ʃu: so:ʃikja:<sup>ʔ</sup> ʃima<sup>ʔ</sup>ʃu:n  
ʃu<sup>ʔ</sup> ŋgi<sup>ʔ</sup>tu:tatʃi:ra:] (あのお祖父さんの葬式には島中の人が出ていたそうだよ)。

スイム「ティキ」[θi mu<sup>ʔ</sup>tiki] (名)

陰暦十一月のこと。「霜月」の義。

「スイラ」[<sup>ʔ</sup>θi ra] (名)

寺。久高島では寺はなく、ほとんど寺を利用しない。ナン「ミンヌ スイラ」[nam<sup>ʔ</sup>minnu  
θi ra] (波の上のお寺)。

スイリ「ジカサ」[θi ri<sup>ʔ</sup>ʃikasa] (名)

スイリ「リカサ」[θi ri<sup>ʔ</sup>rikasa]ともいう。「フボー」ウタキ「<sup>ʔ</sup>Φubo:<sup>ʔ</sup>ʔutaki]の中の拝所の一  
つ。首里へのお通しの祈願が行われる拝所。ソデヅカサと表記されている。

「スイルル」[<sup>ʔ</sup>θi ruru] (名)

神歌 (神謡)。ティルルとも記録されている。

「スイルマン」[<sup>ʔ</sup>θi rumag] (名)

久高島に縁故のある子孫が先祖の遺跡を訪れて拝む行事。これを久高御廻りという。ティ  
ルマンと表記されることもある。久高御廻りは、戦前から5年、4年、3年越しに来島し  
た。これを「グニンウマー」イ「<sup>ʔ</sup>guniŋʔuma:<sup>ʔ</sup>i】 (5年御廻り)、「ユニンウマー」イ「<sup>ʔ</sup>juniŋ  
ʔuma:<sup>ʔ</sup>i】 (4年御廻り)、「サンニンウマー」イ「<sup>ʔ</sup>sanniŋʔuma:<sup>ʔ</sup>i】 (3年御廻り) という。  
スイルマンは首里、読谷、奥武島、津堅島あたりから来島したので、奥武スイルマン、津  
堅スイルマンのようにいう。近年は途絶したスイルマンが多い。スイルマンは沖縄本島の  
「東方ウマーイ」に相当する。「オースイルマン」[<sup>ʔ</sup>ʔo: θi rumag] (奥武島より久高島回りに  
やってくる人々) は火の神にハハナ「<sup>p</sup>Φana】 (花米) と「ウコー」[<sup>ʔ</sup>ʔuko:] (線香) を供え  
て祈願した。ウプフグイ、トゥパシラ、床の神にも祈願し、ヤグルガー、イシキバマ、イ  
シキバマのアガイイビにも祈願した。

「スイレー」[<sup>ʔ</sup>θi re:] (名)

ご馳走を振る舞うこと。大盤振る舞い。饗応。おごり (奢り)。「アマヌ」 シチジュー「スア  
ンヌ ウイエーヤ」 スイレー 「マンドウータスアー」[<sup>ʔ</sup>ʔamanu<sup>ʔ</sup> ʃiʃiʃu:<sup>ʔ</sup>ṛannu  
ʔuije:ja<sup>ʔ</sup> θi re: <sup>ʔ</sup>mandu:tara:] (あそこの家の七十三の祝儀は引出物やご馳走がとても

多かったよ)

スイレー「イン」[θi re:ʔjig] (動)

おごる(奢る)。ご馳走を振舞う。大盤振る舞いをする。饗応する。引出物を出す。スイレー「ター」 グラン「タン」[θi re:ʔta:ʔ guranʔtaŋ] (ご馳走を振舞わなかった。奢らなかった)。「アマヌ」 シチ「ジュースァンヌ」 ウイエーヤ「 スイレー「ランタン」[ʔʔamanuʔ ʃi ʃiʔʔu:rannu ʔuije:jaʔ θi re:ʔrantəŋ] (あの家の七十三の祝儀はあまりふるまわなかった。普通程度の祝いだった)。「アマヌ」 スイレー「イクトゥ」 チューティ「 ウッカ「チューティマリーヤ」 スイレー「ランティン」 スイミン「ローヤー」[ʔʔamanuʔ θi re:ʔjikutu ʔʔu:tiʔ ʔukkaʔʔu:timari:jaʔ θi re:ʔrantinʔ θi mi:nʔro:ja:] (あそこの家が大盤振る舞いをするからといって、借金してまで大盤振る舞いをしなくてもいいよ)。

「スイワースイ」[ʔ θi wa: θi] (名)

旧暦12月。「師走」の義。「スイワーシャー ムチーヌ」 アスァー「[ʔ θi wa:ʃa: muʃi:nuʔ ʔara:] (十二月にはムーチーがあるよ)。「ティワースイ」[ʔtiwa: θi]ともいう。

スイン「カリー」ン[θi ŋʔkari:ʔŋ] (動)

引張られる。むりに引張られて連れ去られる。しょつ引かれる。しょびかれる。「そびかれる」の義。スイン「カッ」ティ 「ンジャン」[θi ŋʔkatʔti ʔnʔŋaŋ] (引張られていった)。スインカリ「ラン」キ「バ」[θi ŋʔkariʔraŋʔkiʔba] (引張られるな)。スイン「カリヤッサ」ン[θi ŋʔkarijaʔraʔŋ] (引張られやすい)。スイン「カリーンフトー」 ナーン[θi ŋʔkari:ŋʔʔu to:ʔ na:ŋ] (引張られることはない)。ヒジ「ムンネー」 スイン「カッ」ティ イ「キ」ンバー「イ」 ゲー シーヤー「 ピー「シャー」マ 「ドゥー 「ヤカリーチンドー」[çiʔʔiʔmunne:ʔ θi ŋʔkatʔti ʔiʔkiʔm ba:ʔi ge: ʃi:ja:ʔ p'i:ʔʃa:ʔma ʔdu: ʔjakari:ʔʃindo:] (ヒジムン<化け物>に引張られる場合、反抗すると火で体を焼かれるということだよ)。「イライ 「シーガ」 イキヤーマ ヒジ「ムントウ」 ドウシ「 ナティ 「ウン 「アトゥラージフン ナイヤー」 エーリ 「シーガ」 シュー「タッチスァー」[ʔʔirai ʔʃi:gaʔ ʔikja:ma çiʔʔiʔmuntu duʃiʔ nati ʔʔuŋ ʔʔatura: ʔʔiʔʔun naija:ʔ ʔe:ri ʔʃi:gaʔ ʃu:ʔtat ʔʃira:] (漁りをしに行って、ヒジムンと友達になって、その後は漁りの時分になると合図しに来たってさ)。

「スインケーヤーヤー」[ʔ θi ŋke:ja:ja:] (名)

引っぱり合いの遊び。「アミル」シ「[ʔʔamiruʔʃi] (10月13日に執り行われる豊漁祈願祭。竜宮の神に祈願する祭祀)の日に未婚の娘たちが、「バンドウクマ」[ʔbandukuma] (地名。村の中心地。「番所」の義か)の道で、芋の蔓で作った丸い敷物(「スインケー」[ʔ θi ŋke:]<丸い敷物>に娘たちを載せて、歌(アミドウシヌ ティービケー歌)をうたいながら引き合って遊ぶ遊戯。

「スインヌジョー」[ʔ θi nnuʔʔo:] (固)

「天の門」の義。「ハンチャタイ」[ʔhanʔʃatai] (神の畑)の名。

「スウイファットゥ」[<sup>1</sup>θuiΦattu] (名)

「鶏法度」の義。麦、粟など、穀物の収穫がすむまでは鶏の放し飼いを禁じた村内の掟（村内法）。穀類（麦、豆、粟）の収穫時には、同時に庭や道々で穀類の日干し乾燥が行われる。鶏を放し飼いにすると多大の損害を受けるので、それを防ぐために作られた村内法である。この時期には青年たちが取り締まりを強化した。放し飼いにされた鶏は、青年たちが自由に捕獲して処分してよいことになっていた。

「スウヤー」[<sup>1</sup>θu :ja:] (固)

屋号。唐船（進貢船）の船頭を輩出した家。

「スウクヌハンジャナシー」[<sup>1</sup>θu kunuhanɕanaʃi:] (名)

床の神様。

「スウクリンガーヌ ウガミ」[<sup>1</sup>θu kuringa:nu ʔugami] (連)

徳仁港にある井戸＜井泉＞の祈願。9月下旬に「スウクリンガー」[<sup>1</sup>θu kuringa:]と、「イシンミガー」[<sup>1</sup>ʔiʃimmiga:]（石嶺家にある井戸。スウクリンガーウガミと同じ日に「イシンミガーウガミ」が執り行われる）への祈願を行う。井泉のゲン「スィー」[gun<sup>1</sup>θi:]（恩義。ご恩）に対する感謝の祈願。水の恵みに対する感謝の祈願。

「スウシノー」イ[<sup>1</sup>θu ʃino:ʔi] (名)

「歳直り」の義。干支がよく合って、その時の祭司になる人『伊波普猷全集五巻』の義という。「夕神之時、ノロ兩人、年ナフリ壱人、根人二人、頭頭・サバクリ、八重ノトノニ相揃・・・」『琉球国由来記』。久高島では麦の初種蒔きに巳年生まれの人に頼んで、ミーアムトゥ（外間ノロ家、久高ノロ家、外間根人家）の「ハッタニ」[<sup>1</sup>hattani]（麦の初種蒔き）を行うこと。その後一般家庭の麦の種蒔きができたという。

スウシン「ユルー」[θu ʃin<sup>1</sup>juru:] (名)

大晦日。「歳の夜」の義。スウシヌ「ユルー」[θu ʃinu<sup>1</sup>juru:]ともいう。12月30日の大晦日の夜には、「ンマリカシヌウガン」[<sup>1</sup>ʔmmarikafinuʔugan]の神行事が執り行われるが、同じ神事は24日にも執り行われる。

「スウスイ」[<sup>1</sup>θu θu i] (名)

雑巾。「ヌンギリ」[<sup>1</sup>nuggiri]（布切れ）ともいう。「ギノー」 スウスイ「シャーマル」  
プキ「タル」[<sup>1</sup>gino:ʔ θu θu i<sup>1</sup>ʃa:maruʔ puki<sup>1</sup>taru]（縁側は雑巾で＜ぞ＞拭いた）。

スウスウ「ビー」[θu θu <sup>1</sup>bi:] (名)

61歳、73歳の生年祝い。「歳日」の義か。旧正月の後の最初か二番目の「生まれ年の干支の日」に健康祈願の神願いを執り行った。これには村中の人に参加して祝った。スウスウビー「ウイエー」[susubi:<sup>1</sup>ʔuije:]（生年祝い）という。85歳の祝いは公的にはほとんど行わなかった。単に「ンマリスウスウビ」[<sup>1</sup>mmari θu θu bi]（生まれ歳日）という。88歳のスォー「ハキ」[θo:<sup>1</sup>haki]（トーカチ。斗搔の生年祝い。88歳の生年祝い）は旧暦8月8日に、「ハジマヤー」[<sup>1</sup>haɕimaja:]（97歳の生年祝い）は9月7日に執り行った。13歳は、ジュースァン「ウイエー」[ɕu:ɾaŋ<sup>1</sup>ʔuije:]（13歳の生年祝い）といい、女の子の場合は、実家です

る生年祝いとして賑やかにしてあげた。

「スゥネーイン[<sup>1</sup>θu ne:in] (動)

出かける。「スゥネータン[<sup>1</sup>θu ne:taŋ] (出かけた)。「スゥネータンドー[<sup>1</sup>θu ne:tando:] (出かけたよ)。

「スゥヌチグワー[<sup>1</sup>θu nuʃigwa:] (名) 殿内小。昔は国王の従者が宿泊した所という。現在はイラブーの焙乾小屋となっている。

「スゥバー[<sup>1</sup>θu ba:] (名)

兎唇。口唇裂。三つ口。「ショーエキラーヤ」 スゥバー 「ヤタツチル」 スォー「チン ジュータン」 タカ「ミネ ッチューン チュヌ」 ノー「チャツチスアー[<sup>1</sup>ʃo:ʃekiwo:ja<sup>1</sup> θu ba: ʃatatʃiru<sup>1</sup> θo:ʃi nɕu:tan<sup>1</sup> taka<sup>1</sup>mine tʃu:n ʃunu<sup>1</sup> no:ʃatʃira:] (尚益王は口唇裂であったそうだ。唐に留学した高嶺という人が＜切開手術を施して＞治したそうだよ)。

「スゥブシ[<sup>1</sup>θu buʃi] (名)

松根を割って鉛筆の大きさにし、それを点して祭祀の灯明に用いたもの。「ともしく点し >。海原の沖辺に等毛之 伊射流火波〜『万葉集 3648』」の義。久高島には松は産しないので、スゥブシを祭祀用として沖縄本島より購入した。

「スゥム[<sup>1</sup>θu mu] (名)

お供。花婿側の仲人に付き添う10歳前後の男の子。

「スゥムスイラー[<sup>1</sup>θu mu θi ra:] (名)

海に遭難した人の霊を弔う祭祀。毎年4月と9月のハンジャナシー祭りの期間中に、当該家では、各家のスイーンユタに依頼して執り行う。ユランマの浜で行われる。供物は、高膳に「ンムクリアンダーギー[<sup>1</sup>mmukuriʔanda:gi:] (芋くずの油揚げ。てんぷら) 2皿、酒2コップ、ハラザカナ2皿を供えて祈願する。祈願の後、供物のお初を海に投げ入れる。供物には特別の決まりはない。

スウラ「ティー」ン[<sup>1</sup>θu ra<sup>1</sup>ti:ŋ] (動)

育てる。ガン「ジュー」スァ スウラ「ティー」ン[ga<sup>1</sup>ɕu:ʔra θu ra<sup>1</sup>ti:ŋ] (丈夫に育てる)。  
スラ「ティラン[<sup>1</sup>θu ra<sup>1</sup>tiraŋ] (育てない)。「キャーチ」ン スウラティ「ヨースァンタン[<sup>1</sup>kja:ʃi<sup>1</sup>n θu rati<sup>1</sup>jo:raŋtaŋ] (どうしても育てることが出来なかった)。「ワー」ガ「スラ「ティティカラ ヤーネー」 ゲー「シユスアー[wa:ʃga<sup>1</sup> θu ra<sup>1</sup>titikara ja:ne:ʔ ge:ʃu ra:] (私が育ててから君にあげる＜遣る＞よ)。

「スウル」バン[<sup>1</sup>θu ru<sup>1</sup>baŋ] (固)

屋号。資産家であった。昔は唐船＜進貢船＞の船頭を出した家柄。西銘五郎氏（沖縄からの初代アメリカ移民）は、その一門の出身である。

「スゥンジー[<sup>1</sup>θu nɕi:] (名)

冬至。久高島では特に冬至の神事はない。冬至の雑炊も作らない。

スゥン「ジャク[<sup>1</sup>θu n<sup>1</sup>ɕaku] (名)

看病。介抱。ドゥースン「ジャク」[du: θu n<sup>h</sup>ʔaku] (自己看護。自分で自分の病気を治すこと)。「ティーン チャーマガ」イ チュータスイガ<sup>h</sup> ハハー「ハハー」ガ プティ「バーユー シャーマ」 メー「ニ」チ ピーヤチ スウン「ジャク チャクトウル」 ティース 「マガヤー」 ノー「タッチル」[<sup>h</sup>ti:n ʔa:maga<sup>h</sup>i ʔu:ta θi ga<sup>h</sup> <sup>p</sup>ʔa:<sup>h</sup>ʔa:<sup>h</sup>ga puti<sup>h</sup>ba:ju:ʔa:ma<sup>h</sup> me:<sup>h</sup>ni<sup>h</sup>ʔi<sup>h</sup> <sup>h</sup>pi:jaʔi θu n<sup>h</sup>ʔaku ʔakutu<sup>h</sup> ti:nu<sup>h</sup> <sup>h</sup>magaja:<sup>h</sup> no:<sup>h</sup>tatʔiru] (手も曲がったままになっていたが<そのまま曲がりしていたが>、お祖母さんが蓬湯で毎日冷やして看病したので、手の曲がり治ったそうだ)。

「スエーヤ」ク<sup>h</sup> [θe:ja<sup>h</sup>ku] (名)

神職を退くこと。「退役」の義か。男女70歳になると神職を退くことをいう。

「スエーラーガーミー」 [θe:ra:ga:mi:] (名)

8月12日に執り行われる祭祀。島の人々の健康祈願祭。「テラーガーミー」[te:ra:ga:mi:]ともいう。8月12日の朝、追い込み漁の準備がなされ、出漁する。「ウタカムン」[ʔutakamun] (献上物)を外間スォールイが外間殿、外間ノロ家へ、久高スォールイが久高殿、久高ノロ家へ奉納する。残りの魚は刺身にする。夕方、51歳から70歳までの男子が「スィンヌジョー」[θi nnuʔo:] (天の門)といわれる「ハンチャタイ」[hanʔatai] (神の屋敷)で健康祈願が執り行われる。それが済むと、そこから浜へ降りて行き、浜から「リューグー」[rju:gu:] (竜宮)へ向かって祈願が執り行われる。浜では刺身が配られてから、「スィル」ル<sup>h</sup> [θi ru<sup>h</sup>ru] (神歌。「ティル」ル<sup>h</sup> [tiru<sup>h</sup>ru]ともいう)を歌いながら「ミチジュネー」[mitʔiʔune:] (神職者たちがうたいながら歩くこと)をして久高殿に行き、久高殿で「コイナー」[koina:]の「スィル」ル<sup>h</sup> [θi ru<sup>h</sup>ru] (神歌。「ティル」ル<sup>h</sup> [tiru<sup>h</sup>ru]ともいう)が歌われる。その後着替えて、ユナンマの浜へ下り、そこで刺身を食べて歓談する。余興として若者達による相撲が取られ、村人たちがこれを見学して終わる。

スォージ「マティー」[θo:ʔi<sup>h</sup>mati:] (名)

五月に執り行われる粟の穂祭り。粟の初穂儀礼。ノロとウヤウンシャク (54歳から60歳までのイザイホーに参加した巫女) がヤグルガーで精進潔斎をして執り行う神事。「マブツチマ」ティー [mabutʔima<sup>h</sup>ti:] (粟の穂祭り)ともいう。「マブツ」チ [mabutʔi] (粟飯。現在は米飯)は祭りの当日、各組の畑の当番の人が作って外間殿、久高殿に運び、祭りの祈願が行われる。当日の「アサマティー」[ʔasamati:] (朝祭り)と「ユーマティー」[ju:mati:] (夕祭り)、そして翌日の「ユーマティー (夕祭り)の順で祈願が進められたが、現在は仕事の関係上、翌日の祭りは、「アサマティー (朝祭り)に変更されている。

「スォージャ」ク<sup>h</sup> [θo:ʔija<sup>h</sup>ku] (名)

イザイホーに参加して巫女になる洗礼儀式を受けた40歳代前半の年齢階梯集団に属する巫女。祭りの供物の準備、その他島の祭祀行事の雑役を担当する女性神職者。定員5名、任期3年。祭祀集団に加入した神女達が務める最初の神職。御嶽を清掃して祓い清める「禊役。精進役」の義か。

スォー「ミン」[θo:<sup>h</sup>min] (名)



そうめん（素麺）。スォーミン「チャンブルーヤ」 ウマ「スァンドーヤー」 ワナー ニチ「  
 ヨービヤ」 ピル「マーヤ」 チャー ウリ「ヤル」[so:min「ʧampuru:ja」 ʔuma「ʔando:ja」  
 wana: niʧi「jo:bija」 piru「ma:ja ʧa: ʔuri」 jaru]（素麺チャンブルーは美味しい  
 よ。私は、日曜日はいつも昼食はそれである）。

スォールイ「ウイエー」[θo:rui「ʔuije:」]（名）

スォールイガナシの就任祝い。徳仁港と「ユランマヌハハマ」[ʔjorammanu<sup>p</sup>Φama]（ユラ  
 ンマの浜）と「ミガー」[miga:]で新任者の祈願（グワン「ダティ」[gwan「dati」＜願立て。  
 祈願＞）と退任者の満期のお知らせ（グワン「ブトゥ」キ[gwam「butu」ki＜願解き＞）の  
 祈願をスィーンユタに依頼して執り行ってもらう。新任者の「ユナイガミ」[ʔjunaigami]  
 （姉妹神）が前任者の香炉から灰を貰い、新任者の香炉に移し、前任者の「ユナイガミ」[ʔju  
 naigami]（姉妹神）と一緒に香炉を新任者宅へ運ぶ。

「スォールイガナシー」[θo:ruiganafi:]（名）

わたつみの神（竜宮の神）に奉仕する役目の男性神職者。「ソールイ加那志」、また聖地  
 カベールに鎮座しますハビヤンヌ「habjannu」（神加那志）、それに壬（みずのえ）の日  
 に白馬に身を現じて島を廻られることから「サティマンヌワカグラ」（鬘の若駒）とも称  
 される。久高島では五十歳台前後に島の祭事の裏方である「ハッサ」[hassa]（頭）の役目  
 を務める仕来りがあり、任期は2年である。ハッサを務めた人が六十歳台には、やはり任  
 期二年の「スォー」ルイ「θo:」rui（ソールイ）に役に就く。従前、ハッサを務める年代  
 に島外に在住している場合、島にいる人に頼んで代理させた。それは、ハッサを務めないと  
 「スォー」ルイになる資格がないからである。「スォー」ルイは、外間スォールイと久高スォー  
 ルイと二名いて、隔年毎に交代する。ハッサやスォールイになる場合、年長順だが同年の  
 場合はティ「キスイラ」[ti「ki θi ra]（月兄者。生まれ月の早い者）からなる。スォールイ  
 指名はウプフマーミキの祭事の終了後、従前はニーツチュ（根人）の役目だが、不在の場  
 合は両ノロが代行する。指名のことを「サス」というが、スォールイの順番の家に出向く  
 と当該人は指名に来られることを承知しているので、家人と共に茶請けの接待をしてお受  
 けするのである。スォールイの指名を受けると旧暦十月の「アラミンニー」[ʔaraminni:]  
 （最初の壬の日）に「ユナイ」[junai]（姉妹）と連れ立って「ピザ」[piʔa]（島の東海岸に  
 ある地名）からスォールイ棹を立てるアダン木を自宅の庭の東側に移植して約1メートル  
 四方、高さ約40センチの竹垣を作り、中に「スウクリン」[θu kurig]（徳仁港）から取っ  
 てきた小石を敷く。これはスォールイ神のよりしろ（憑代）とされる棹を安置する所であ  
 るから、「ウドウングワー」[ʔudungwa:]（小御殿）と称する。棹は榎か杉の「キチ」[kiʧi]  
 で長さ約3メートルである。また、その日に一番座の東角に南向きに神棚を作り、備品の  
 香炉などの祭具を準備する。「サシプ」[safiʔu]とは島の男女神職者に対していうのである  
 が、スォールイも2年間は神職者になるので、サシプと言われるのである。サシプゲールの  
 「ゲール」とは「代替わり」のことであろう。神職の交代を意味するが、島ではスォー  
 ルイについてはスォールイのナイ「ハワイ」[nai「hawai]（代替わり）というのであって、

サシブゲールとは言わない。スォールイのナイハワイは「マーミキグワー」[*ma:mikigwa:*] (マーミキ祭祀)の夕刻に行われる。その日の午後、スィーン「ユタ」[*θi:j*]「juta」(ティーンユタ。各家庭の行事の祈願を務める巫女。めかんなぎ)に火の神、トゥパシリ、床の順に祈願がなされる。それが済むとスィーンユタを伴い、ミガー、ハシギヤー、アカラムイ、浜、徳仁に御願立の祈願がなされる。2年後の満期の際には無事に務めたウブクイの祈願が同様になされる。また当日は、国神といわれる根人、両ノロ、根神、ノロ、根神の補佐役の掟神から米五合を、前任スォールイから米5合と魚1斤半が来る。夕方国神が来宅される。その頃ユナイ神が(姉妹がいない場合は従姉妹)が前任者宅の神棚の香炉を受け取りに行く。ユナイ神は同宅で前任スォールイとそのユナイ神の接待を受け、それから香炉に十二本の香を焚き合掌してから盆に香炉を載せて庭に出て待っている新任のユナイ神に盆ごと渡し、自分は祭具の網を持って庭に出てスォールイ棹を肩に担ぎ、香炉を持つユナイを先頭に前任者、そのユナイ神の順で新任宅へ行き、一番座の前に立つ。新任は迎えて、ユナイ神から香炉を受け取り、香炉の香を神棚の香炉に移し、灰も3回取って入れる。それが済むと新任は外に出て準備してある棹を取り、アダン木の内側枝に立ててからすぐ取って担ぎ、東方に向いて棹を担いで立っている前任者の後ろに立ち、拝祈してから棹を前任はアダンの外側、新任は内側に立てて、前任者前になって座敷に上り、前任上座、新任下座に座る。お茶や茶請けが出る。新任の妻が香を十二本ずつ、ミティムン(火の神)、トゥパシリ、床へ焚き、新任もスォールイ棚の香炉に十二本焚いて祈願する。そしてウユー(お粥)九碗とお代わり用の一碗が出される。ノロ、根人、根神には掟神が捧げるが、不在の場合は巫女が捧げる。お代わり用の一碗は、「ハイワシ」[*haiwaʃi*]といって形式的に一箸ずつ受け取る。ウユーの拝食が済んだら新任を先にして庭に出て互いに棹を取り、今度は新任前、前任後ろにして立ち、二人の棹を重ねて左肩に担ぎ、祈願して右肩に移して又祈願する。根人存在の場合は根人も庭に出て立ち会う。それが済むと、アダンに新任のは外側、前任のは内側に棹を立てて、新任を先にして座敷に上り、今度は新任上座にして座る。そこで前任は、スォールイの正装である「ハタマチ」[*hatamaʃi*]とウフウービ[*ʔuΦuʔu:bi*] (大帯)を引き継ぐ。新任と妻は十二本ずつ香を焚き、前の三箇所祈願し終わるとウブンの配膳が始まる。ウブン拝食はただ箸をつけるだけの形式的な仕草をする。拝食が終わったらウブンは手伝いに来た人達が神職者の家に届ける。前任者宅にも届けられる。新任はスォールイ棚の香炉に香を十二本焚く。外間ノロが無事交替の祈願をするが新任、前任、神職者、参会者も合掌祈願し、続いて高膳に九合花とウユーを供え、ミティムン(火の神)、トゥパシリ、床にも祈願する。それから一番座の中央に蓆を敷き、七回洗ったアレーバナ(洗米)九合を高膳に置く。従前は外間根人が「ユイムンバケーシンソーリ」と言ってアレーバナを蓆に撒くと外にいた参観者が競って取り合ったが、戦後に怪我人が出たこともあって中止となり、現在は神職 前スォールイ、新スォールイと参会者が五、六粒ほど摘む形式的なものになっている。「ユイムンバケー」の後は祝宴となる。島での還暦以上の生年祝い同様、島人は招待無用、島全体でのお祝いである。翌朝前任夫

妻、スネー（酒肴）を持参して新任宅に来宅する。それは、エーズ ナイビラ（仲間にならしましょう）との契りの意である。スネーは新任宅のと混せて両方に出す。それからトゥイケー（酒盃の取り交わし）が行われる。前任持参の酒で、前任から新任へ三回、新任妻へ三回、新任宅の酒で新任より前任へ三回、前任妻へ三回、新任妻より前任へ三回、前任妻へ三回の取り交わしが行われる。エーズになった印である。翌々朝、新任は前任のスォールイ棹を担ぎ、妻は前任ユナイ（姉妹）持参の香炉を持ち、前任宅へ行き、棹をウドウングワーの棹立てに立てて、香炉は新任妻より前任妻に渡し、前任妻はスォールイ棚所定の所に置く。新任夫妻ともに座敷に上がり酒肴の持て成しを受け、無事務めた前任に肖るよう、トゥイケーをして帰る。交替してからの壬（みずのえ）の日に、新任と前任はスォールイ棹と対をなす「網」作りをする。網作りに要する網イツ（木綿糸）と網目を作る「アガイ」[ʔagai]、「アグタ」[ʔaguta]を準備して外間殿の庭で、最初は各自で「ミミー」[mimi:]（三目）を編み、左廻りに各家庭に回して各家庭三目ずつ編む。女家庭は隣家の男に頼む。この網は外間スォールイの交替の時、隔年毎に新調する。福治友邦氏の祖父は外間スォールイだったが、網を新調するのは外間スォールイがワラビ神（年少者）で、いふなれば玩具であるとのことを話されたという。スォールイは就任すると毎月の初みずのえ（初壬。大体毎月の三日）の日には、「ミンニーソージー」[minni:so:ʔi:]がある。昭和五十七年当時の久高スォールイだった西銘喜盛氏の記述によると、午前五時四十五分起床、六時十五分柄杓、タオルを持参して先任宅へ、先任スォールイ神棚を拝み、先任先にてミガー（ミ川）へ向かう。平五郎氏宅前で「ヘーイ」と声をかける。ミ川下から三段目で草履を取っており。先任右、新任左側に、花米は香置きに置き、一緒に礼拝してから左右より洗い流し、花米を双方分け持って左右より撒き清め、柄杓一杯の水を汲んで傍らに置いてから礼拝し、柄杓を持ち帰り、お茶、酒はウドウングワーにこぼし、茶碗、酒コップ、香炉の順で拭いてから清め水で室内外を清めた後、朝のお茶を上げる。スォールイ棚には、朝昼はお茶、晩は酒を供える。スォールイ棚ウドウングワーの棹、祭具一式は後任スォールイが次のスォールイに引き継ぐ迄その儘にして置く。後任が在職中に死亡した場合、神は前任者のスォールイ棚に戻られるからである。スォールイ在職中は室内外の清めが大事であったことからか、お産の場合、嫁は実家に行ってお産をする習わしであった。

（以下、補遺の「スォールイガナシーの祭祀の事例」を参照）。

スォールイスウイ「ケー」[θo:ruiθuiʔke:]（名）

新任スォールイと前任スォールイの間で取り交わされる盃事。フバヤク[Φubajaku]の第二日に執り行われる。

「スォールイダカ」ティ[ʔθo:ruidakaʔti]（名）

スォールイが関与して執り行う村の神行事の経費を各戸から徴収したもの。ウプフマーミキとマーミキグワーの時に徴収する。現在は百円ずつ徴収してスォールイ棚に保管し、「フバ」ヤク[ʔΦubaʔjaku]（久高島の御嶽の清掃すること。健康祈願、大漁祈願をした後、70歳になった「スアムトゥ」[ʔramutu]（神女が60歳になると神事の雑役から解放されてノ

口のお供をする神女組織の階級)の退任式をフボー御嶽で行い、スウイケー[<sup>ʔ</sup>θu ike:] (トゥイケー。盃の交換。盃事)を執り行う際に収支の決算をする。

「スォールイダナ[<sup>ʔ</sup>θo :ruidana] (名)

スォールイ神を祀ってある神棚。一番座の縁側の東南隅の桁にしつらえ(設え)である。朝昼晩線香を焚き、御茶湯を供え、神酒を供えて拝んだ。スォールイを交代する際は、現任のスォールイの神棚の香炉より灰を移して祀り、それを受け継いだ。「アラミンニー[<sup>ʔ</sup>paraminni:] (月初の干支の巳の日)に「ミガー[<sup>ʔ</sup>miga:]で身を清め、スォールイ棚を洗い清めた。昔はスォールイガナシが冷水をかぶって身を清めたという。冷水を被ることを、パハーミカ「スン[<sup>ʔ</sup>Φa:mika<sup>ʔ</sup>sup] (体温を温める。冷水を被った後、体が自然に温まること)といていた。

スォールイ「マカネー[<sup>ʔ</sup>θo :rui<sup>ʔ</sup>makane:] (名)

スォールイ賄い。外間根人家から始まる。各家庭より、イザイホーに参加した神女(巫女)がスォールイ家の玄関に跪いて合掌し、スォールイマカネーのご案内の趣旨を言上する。案内をした家では、先ずスォールイと案内した家の主人との間で盃事が取り交わされ、次に奥さんとスォールイの間で盃事が行われる。盃事の終了後に「チョーキ[<sup>ʔ</sup>ʧo:ki] (茶請け)をスォールイの苞く土産にする。スォールイマカネーの神酒を集めるためにミキ「ハティミヤー[miki<sup>ʔ</sup>hatimija:] (神酒を担ぐ人。「ンナグラー[<sup>ʔ</sup>nnagura:]<十五歳になった少年。ジューゴーナヤーのこと>)がスォールイと一緒に各家をまわった。神酒一升を量ってスォールイが備え付けのバケツに入れ、次にその家の男の人数分を分けて入れる。本来は15歳の少年(「ジューゴーナヤー[<sup>ʔ</sup>ʧu:go:naja:]<15歳の少年>)が神酒を担いで運んだが、現在はジューゴーナヤーがいないので各家庭より持参して祭りの場に備え付けてある容器に神酒を入れる。これが8月10日、11日、12日に行われるパハチグワチマティーの祭祀用の神酒として利用される。一軒の神酒を集めた所へ次の家の人が来てワーンネーをすると、その人に導かれて神酒を集めに行った。

スォーン「チュミム「チ[<sup>ʔ</sup>θo :n<sup>ʔ</sup>ʧumimu<sup>ʔ</sup>ʧi] (名)

唐黍(トウモロコシ)で作った餅。「トーナチン餅」(唐黍餅)の義。ハシャ「キー[haʃa<sup>ʔ</sup>ki:]の時に作って火の神や仏壇に供えた。

「ダキングワ[<sup>ʔ</sup>dakingwa] (名)

「抱き子」の義。8歳未満の幼い子供が死ぬと、親が抱いて葬式を出した。その葬式の仕方。

「ダビ[<sup>ʔ</sup>dabi] (名)

葬式。8歳以上の人が死ぬと柩をガンに載せて葬式をした。「チュヌ「ヒ「ヤーマ「(「マーシャーマ) シュー「ヤ「ダビ「 ヤッチロー[<sup>ʔ</sup>ʧunu<sup>ʔ</sup> ʧi<sup>ʔ</sup>ja:ma<sup>ʔ</sup> (「ma:ʃa:ma:ʔ) ʃu:<sup>ʔ</sup>ja dabi<sup>ʔ</sup> jatʃi:ro: (jai<sup>ʔ</sup>bitʃi:ro:)] (人が死んで<亡くなられて>、今日は葬式だそうだと葬式だそうです)。人が死ぬと、51~70歳以上の男の人が集まり、その家の庭で「ブン[<sup>ʔ</sup>p'un] (船。柩)を作る。「ブン「トゥクイガ「イキン[<sup>ʔ</sup>p'un<sup>ʔ</sup> tukuiga<sup>ʔ</sup> ʔikiŋ]

(柩を造りに行く)という。久高島では乳幼児の臨終に際して、台所へ連れて行き、そこで臨終を迎えさせる習慣があった。村に死者が出ると、各家の門に「ハヘー」[<sup>p</sup>he:] (灰)を撒き、「ソー」[<sup>t</sup>θo:] (棹)を門の入り口に渡しておいて悪霊の進入を防ぐ習慣がある。「クニガミ」[<sup>k</sup>unigami] (国神。ノロ、ニーガミ<根神>、ニーツチュ<根人>、ウツチュガミ<掟神。ノロの補佐役>)が亡くなるときは、各家庭よりお米の供出があり、それで「ヤジク」[<sup>j</sup>aɕiku]たちが餅を作った。また、51歳以上の人が死んだ場合には餅をつくった。入棺の時は家の戸を全部閉め切って入棺を行い、それが済んだら、すぐガン<赤馬>に入れた。ガンは前二人、後ろ二人の四人で担いだ。

「タナ」バタ「[<sup>t</sup>ana<sup>ˈ</sup>bata] (名)

たなばた (七夕)。7月のお盆は七夕から始まる。また、七夕からは水を供える。昔は水を茶碗に入れて仏壇に供えるだけで、墓の掃除はしなかった。最近は掃除をするようになった。七夕でなくても土曜、日曜日を利用して掃除をする人もいる。

「チャー」キ「[<sup>t</sup>ʃa:<sup>ˈ</sup>ki] (副)

すぐ。すぐさま。即刻。即時に。シン「シー」ヤ「スウグリンチュ ヤク」トウ「チャー」キ「ワカイン「シェー」ムンヌ「[<sup>f</sup>ɪŋʃi:<sup>ˈ</sup>ja<sup>ˈ</sup> θu gurinɕu jaku<sup>ˈ</sup>tu<sup>ˈ</sup> ʃa:<sup>ˈ</sup>ki wakaɪŋʃe:<sup>ˈ</sup>munnu] (先生は優れた人だから、すぐお分かりになりなされるよ)。

「チュ」パツ「ク「[<sup>t</sup>ʃupak<sup>ˈ</sup>ku] (名)

一網。「一袋」の義か。網を1回入れて漁獲すること。追い込み漁をする際に網を1回入れること。スイティグワティ「ディナ」ヌ「バーイ スアーキカイ」チュ「パツクシャー」マ「ユカイシャク」スウティ「ビ」ヒヤースァ「ヘーティ「チャスアー「[θi tigwati<sup>ˈ</sup>dina<sup>ˈ</sup>nu<sup>ˈ</sup> ʃa:<sup>ˈ</sup>ki ɾa:kikai<sup>ˈ</sup> ɕu<sup>ˈ</sup>pakkuʃa:<sup>ˈ</sup>ma<sup>ˈ</sup> ʃukaiʃaku<sup>ˈ</sup> θu ti<sup>ˈ</sup> ʃa:<sup>ˈ</sup>ra<sup>ˈ</sup> he:ti<sup>ˈ</sup> ʃa:<sup>ˈ</sup>ra:] (七月網のとき、スアーキビシ<ターキ干瀬>で、一袋<一網>で沢山の<相当量の>漁獲をして<獲って>早々と帰って来たよ)。

チュ「クミ「[<sup>t</sup>ʃu<sup>ˈ</sup>kumi] (数)

一組 (一对)。重箱の一組。餅を重箱に詰めたもの一对 (2箱)、ハラザカナ (揚げもの)を重箱に詰めたもの一对 (2箱)、合計4箱をセットにして1組といい、それを供える。初七日忌と四十九日忌、一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、二十五年忌、三十三年忌には餅2対 (4重箱)、ハラザカナ2対 (4重箱)と「マー」チュン「チュウ「[<sup>m</sup>a:<sup>ˈ</sup>ɕu:nɕu:] (亡くなった人)の分として「チュ」ジュ「[<sup>t</sup>ʃuɕu:] (餅1重箱、ハラザカナ1重箱)を供える。ワツ「ター シマー チュヌ マーシーヤー」ショ「コーヤ」ハハ「ティナンカトウ」シン「ジュークニチ マタ」ニンキ「ショーコーヌ バーイヤ ムチャー」ジュー「バク ユーティ スアカナン」ジュー「バク ユーティ マー」チャン「チュヌ メーカイムチ」チュ「ハハク スアカナ」チュ「ハハク ウンネーヤ」チュ「ジュウ「チール ウシャギティ」ショ「コーヤ」シュル。「タナンカ ユナンカ ムナンカヤ イーシガウリ」メー「ニギリトウ スアカナール ウシャギール [wat<sup>ˈ</sup>ta: ʃima: ɕunu ma: ʃi:ja:<sup>ˈ</sup> ʃo:<sup>ˈ</sup>ko:ja<sup>ˈ</sup> ʃa:<sup>ˈ</sup>tinagkatu<sup>ˈ</sup> ʃin<sup>ˈ</sup>ɕu:kuniɕi mata<sup>ˈ</sup> niŋki<sup>ˈ</sup> ʃo:ko:nu ba:i:ja

muʃa:ʔ ɬu:ʔbaku ju:ti ɾakananʔ ɬu:ʔbaku ju:ti ma:ʃan ʃunu me:kai muʃi  
 ʔ ʃuʔpɸaku ɾakanaʔ ʃuʔpɸaku ʔunne:jaʔ ʃuɬu:ʃi:ru ʔuʃagitiʔ ʃo:ʔko:jaʔ  
 ʃuru ʔtananka junanka munankaja ʔi:ʃiga ʔuriʔ me:ʔnigiritu ɾakana:ru  
 ʔuʃagi:ru] (私らの島は、人が亡くなると焼香は初七日忌と四十九日忌、また年忌焼香の  
 場合は餅は重箱の四つ、肴も重箱の四つ、亡くなった人の前に餅1箱、肴1箱、それには  
 チュ「ジュー[ʃuʔɬu:]<1重箱>というが、それらを供えて焼香はする。二七日忌、四七  
 日忌、六七日忌は言うけれど、握り飯と肴をくぞ>お供えする<ただだ>)。「ギナイ[ʔgi  
 nai] (一年忌)。スアン「ニンキ[ɾanʔniŋki] (3年忌)。シチ「ニンキ[ʃiʃiʔniŋki] (七年忌)。

ʔツツビ[ʔtsutsubi] (名)

おび (帯)。おぶいひも (負い紐)。ツツビ「シャーマ アカングワʔ オーパハ「シュン[ts  
 utsubiʔʃa:ma ʔakangwaʔ ʔo:ʔpɸaʔʃuŋ] (負い紐で赤ちゃんを負んぶする)。

ʔツタイ[ʔʃutai] (名)

一滴。「一垂れ」の義。

ʔティースァʔチジューグニチ[ʔti:raʔʃiɬu:guniʃi] (連)

朔日十五日。

ティ「ケーシュン[tiʔke:ʃuŋ] (動)

ご案内する。お連れする。

ʔティナ[ʔtina] (名)

綱。

ʔティブ[ʔtibu] (名)

つば (壺)。アンラ「ティブ[ʔanraʔtibu] (油壺。ワー「アンラ[wa:ʔanra]<豚の脂>を  
 入れて保管する壺)。マシュ「ティブ[maʃuʔtibu] (塩を入れて保管するのに用いる壺。  
 「塩壺」の義)。ʔマショー マシュ「ティブチ イリリバ[ʔmaʃo: maʃuʔtibuʃi ʔiririba  
 ] (塩は塩壺に入れなさい)。

ʔティンムチ[ʔtimmuʃi] (名)

長さ約5センチの細長い餅、およびそれを供えて祈願する祭祀。1碗に9個ずつのティン  
 ムチを入れた9碗をファーシブンに載せて外間殿のミウプグイミンナカに供え、ティンウ  
 ガミをするのに用いた。ティンムチは、8月11日より13日にかけて島の祭祀終了後、外間  
 殿において行われる。島では、家庭の祭事を祈願する巫女をティンユタという。これから  
 類推すると、餅で繁栄を祈願する趣旨の祭事であろう。ティンムチは島としての祭祀では  
 なく、特定旧家とその親戚によって行われる祭祀である。8月11日、御殿庭におけるタマ  
 ティ、引き続き8月グルイの後の三線楽器による盛大な祭り行事が終わってから、外間殿  
 において外間家と外間ノロ家のティンムチの祈願が行われる。供物の9個のお碗には、そ  
 れぞれに9個のティンムチが入っており、丸い高膳に載せて供えて祈願される。供物はそ  
 れぞれ外間家、外間ノロ家から出された。外間ノロの司祭で、参列の両家の親戚も庭から  
 合掌祈願する。祈願後ウサジリ (神饌のお下がり) がある。久高ノロ家でも外間殿と同時

刻にティンムチの祈願が行われる。参加者は久高ノロ家で、司祭は久高ノロである。8月12日のティンムチ。午後7時過ぎから、アガリンジョー家、ウブンシミ家のティンムチが外間殿で行われた。各家のティンムチは9椀に各椀9個ずつ入れて、ファーシブン（丸い高お膳）に載せ、ミウプグイミンナカ（大香炉）の前に横一列に供えられる。外間ノロ司祭による祈願の後、酒、ティンムチのウサジリ（神饌のお下がり）を頂く。8月13日のティンムチ。午前7時は宮平家、夕方はウプチマラー家のティンムチである。司祭は外間ノロで12日と同じ要領で行われた。

「ティンリー」[<sup>1</sup>tinri:] (名)

ふるい（篩）。麦の粉を篩うのに用いる器具。ムジ<sup>1</sup>ー イラチ ピチカラー<sup>1</sup> ティン<sup>1</sup>リー<sup>1</sup> カイ<sup>1</sup> 「プヤーマ<sup>1</sup> ユニ<sup>1</sup>コー<sup>1</sup> トウ<sup>1</sup>クイタル[mu<sup>1</sup>ɕi<sup>1</sup>: ʔira<sup>1</sup>ʃi pi<sup>1</sup>ʃikara:<sup>1</sup> tin<sup>1</sup>ri:<sup>1</sup> kai<sup>1</sup> 「puja:ma<sup>1</sup> juni<sup>1</sup>ko:<sup>1</sup> tu<sup>1</sup>kuitaru]（麦を煎って、挽いてから篩にかけて麦焦がしを造った）。

-トゥ[-tu] (接尾)

数を表す語について、「年」を表す。「チュトゥ」[<sup>1</sup>ʃutu]（一年）。「タトゥ」[<sup>1</sup>tatu]（二年）。

「トーウンシャク」[<sup>1</sup>to:ʔuŋʃaku] (名)

両ノロ、根神以外の神職者に神酒を捧げる役の四名の神女（巫女）。

「トートーメー」[<sup>1</sup>to:to:me:] (名)

位牌。

ドゥーヤツ「スァン」[du:ja<sup>1</sup>ɕ<sup>1</sup>raŋ] (形)

たやすい（容易い）。簡単である。ドゥー<sup>1</sup>「ヤスイムン<sup>1</sup> ヤル」[du:<sup>1</sup>ja θi mu<sup>1</sup>ŋ<sup>1</sup> jaru]（容易いことである）。「ウン<sup>1</sup> 「アタイグワヌ シグトー<sup>1</sup> ドゥーヤスイ<sup>1</sup>「ムン<sup>1</sup> ヤル」[<sup>1</sup>ʔuŋ<sup>1</sup> ʔataigwa:nu ʃiguto:<sup>1</sup> du:ja θi<sup>1</sup> mu<sup>1</sup>ŋ<sup>1</sup> jaru]（その程度の仕事は容易いこと<簡単なこと>である）。

トゥク<sup>1</sup>「イン」[tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>iŋ] (動)

作る。トゥク<sup>1</sup>「ラン」[tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>raŋ]（作らない）。トゥク<sup>1</sup>「タン」[tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>taŋ]（作った）。トゥ<sup>1</sup>「クランタン」[tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>raŋtaŋ]（作らなかった）。トゥク<sup>1</sup>「イ<sup>1</sup>ブシヤン」[tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>i<sup>1</sup>bu<sup>1</sup>ʃaŋ]（作りたい）。トゥク<sup>1</sup>「インチュ」[tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>iŋʃu]（作る人）。トゥ<sup>1</sup>「クリバ」[tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>ri<sup>1</sup>ba]（作りなさい）。「ヤーガ<sup>1</sup> トゥク<sup>1</sup>「イヤー<sup>1</sup> ワヌン トゥク<sup>1</sup>「イスアー」[ja:ga<sup>1</sup> tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>i<sup>1</sup>ja:<sup>1</sup> wanun tu<sup>1</sup>ku<sup>1</sup>i<sup>1</sup>ra:]（君が作ったなら私も作るよ）。

「ナー」[<sup>1</sup>na:] (代)

二人称の軽い敬意を含む代名詞。あなた（貴方）。目上に対して用いられる。「ヤー」[<sup>1</sup>ja:]（君。お前。同輩、目下に対して用いられる二人称代名詞）より一段上の敬意を含む表現。

「ウンジュ」[<sup>1</sup>ʔuŋɕu]とはいわない。「ナーヤ<sup>1</sup> イクティ<sup>1</sup> 「ナイビタガ」[na:ja<sup>1</sup> ʔikuti<sup>1</sup> naibitaga]（貴方は幾つ<何歳>になりましたか）。「チュヌ スウシ チチ<sup>1</sup> ヌー<sup>1</sup>「シュガ」[<sup>1</sup>ʃunu θu ʃi ʃi<sup>1</sup> nu: ʃuga]（他人の歳を聞いてどうするつもりか）。

「ナーチャ」[<sup>1</sup>na:ʃa:] (名)

翌日。「チュヌ」 ヒジカラ 「スォーシキ」 「チャヌ ナーチャー ナーチャミーメー シーガ」 ヒティ「ミティカイ イキタスアー」[ʔunu ʔiʔikara ʔo:ʔiki ʔanu na:ʔa: na:ʔami:me: ʔi:ga ʔitiʔmitikai ʔikitara:] (人が死んでから葬式をした翌日は、ナーチャミーメー<翌日見舞い>ををしに早朝に<墓へ>行ったものだ)。

「ナーチャウイエー」[na:ʔaʔuije:] (名)

「翌日祝い」の義。結婚式の翌日、花婿の家、花嫁の実家で別々に行う披露宴。ナカ「ダティンチュ」[nakaʔdatinʔu] (仲人。媒酌人) やミー「ビキンチュ」[mi:ʔbikinʔu] (花嫁側の仲人) を招き、親戚の者が集まって二日間にわたって結婚を祝った。

「ナーチャミーメー」[na:ʔami:me:] (名)

「翌日見舞い」の義。「ナーチャミー」[na:ʔami:] (翌日見) ともいう。棺を墓に納めた葬式の翌日、早朝に墓参りをする。昔、人が死んで棺を墓に納めた後に死者が蘇生したという故事による慣習。三日の間続けられた。

「ナーヤー」[na:ja:] (名)

翌年。

ナー「ン」[na:ʔŋ] (形)

ない (無い)。ミカ「シャー」 ナーン「タン」[mikaʔʃa:ʔ na:nʔtan] (昔は無かった)。ナーン「シャコー」 ハンゲー「リバ」[na:ŋʔʃako:ʔ hange:ʔriba] (無ければ考えなさい)。「ムンヌ シデー」シデー「ナーン」ナ「ティ」 「イキン」[munnu ʃide:ʔʃide:ʔ na:nʔnaʔtiʔikig] (ものが次第に無くなっていく)。「ナーン」 「フトー」 ナーン「ヤー」ス「ア」ネー「ナ:ŋ ʔʔuto:ʔ na:n ʔja:ʔraʔne:] (無いことは無いだろうよ)。ナーン「シャコー」 ハ「ワイ」ム「チ」フー「バ」[na:ŋʔʃako:ʔ haʔwai mutʔʃi ʔu:ʔba] (無かったら代わりを持って来い)。ナーン「ティン」 ティミー「クトウ」 フー「バ」[na:nʔtinʔ timi:ʔkutuʔ ʔu:ʔba] (無くてもいいから来いよ)。ミカ「シ」ラ ナーン「タン」[mikaʔʃiʔra na:nʔtaŋ] (昔から無かった)。「アリバ スイミ」タン「ムンヌ」ヤー「[ʔariba ʔi miʔtamʔmunnuʔja:] (あればよかったのになあ)。ハン「ゲー」ティ ミヤーン「リバ」[haŋʔge:ʔti mi:ja:nʔriba] (考えて見なさい)。

ナカ「ダティンチュ」[nakaʔdatinʔu] (名)

花婿側の仲人。媒酌人。身内の中で一番近い叔父がその役を果たした。これには10歳内外の男の子が「スウム」[ʔu mu] (お供) として1名、付き添った。

ナガ「ユー ミチャン」[nagaʔju: miʔʃaŋ] (連)

長命した。長生きした。「長世を見た」の義。ワツ「ター」 パ「ハー」パ「ハーヤ」 ナガ「ユー」 ミン「ショー」チャン「[watʔta: ʔʔa:ʔʔa:jaʔ nagaʔju: miŋʃo:ʔʃaŋ] (私の祖母は長命されたく長生きされた)。

ナカ「ワタイ」[nakaʔwatai] (名)

中間支払い。「中渡し」の義。お盆の経費として鰹漁業の船主が船員に支払う給金。

ナシ「キラ」[naʔʃiʔkira:] (名)



末子。末っ子。

「ナシュン」[ˈnaʃuŋ] (動)

産む。子供を産む。「ナマ」 ナシュン ワラ「ビャー」 ユキガー 「ヤー」スア「ネー」[ˈnama ˈnaʃuŋ waraˈbjaː ˈjuːkiɡaː ˈjaːˈraˈneː] (今度産む子供は男の子だろうよ)。

「ハー」 ナスイ「バ」[ˈhaː na θi ˈba] (早く産めよ)。

「ナンカ」[ˈnaŋka] (名)

七日。七日毎に死者の追善供養のために四十九日まで七日ごとに行う法事。チュ「ナン」カ [tʃuˈnaŋˈka] (初七日。一七日)。「タナンカ」[ˈtanəŋka] (二七日)。ミ「ナンカ」[miˈnaŋka] (三七日)。「ユナンカ」[ˈjuːnaŋka] (四七日)。イティ「ナンカ」[ʔitiˈnaŋka] (五七日)。「ムナンカ」[ˈmuːnaŋka] (六七日)。シン「ジュークニ」チ [ʃinˈtʃuːkuniˈtʃi] (四十九日)。二、四、六の「ナンカ」[ˈnaŋka] (法事) は家族と親戚だけで執り行った。他家の人には案内しなかった。初七日と四十九日の法事には他家の人にも案内をした。「チュナンカトゥ」 シン「ジュークニチ」 ニン「キジョーコーン」 バーイン「メー」ニギリヤ「ウシャ」ギー スア [tʃuˈnaŋkatu ʃinˈtʃuːkuniˈtʃi niŋˈkiʃoːkoːm baːim meːˈnigiriːja ʔuʃaˈgiːra] (初七日と四十九日、年忌焼香の場合もお握りもお握りをお盆に山盛りにして供えた)。

「ナンチュ」[ˈnaŋtʃu] (名)

イザイホーに参加して成巫儀礼を受け、新たに神女<巫女>となった30歳から41歳までの巫女。祭場を清掃する役を担当する。「なり子」(神が依り憑き、神に成り変わった人『沖縄古語大辞典』)の転訛したもの。「なり」の母音[i]により[ko]が口蓋化されて[kjo]となり、さらに口蓋化されて[tʃu]になったものと考えられる。

「ニージミチ」[ˈniːtʃimiˈtʃi] (名)

道路の名。集落の中央部を東西に走る道。「ニージ」[ˈniːtʃi] (根地) の前を通ることから命名されたという。

ニー「ドゥシ」[niːˈduʃi] (名)

子年。十二支の第一番目の歳。「ウシ」ドゥシ [ʔuʃiˈduʃi] (丑年)。「スウラ」ドゥシ [θuˈraˈduʃi] (寅年)。「ウー」ドゥシ [ʔuːˈduʃi] (卯年)。「スアティ」ドゥシ [ˈraːtiduʃi] (辰年)。「ミン」ドゥシ [ˈminˈduʃi] (巳年)。「ンマ」ドゥシ [ˈmmaˈduʃi] (午年)。「ピティ」ドゥシ [ˈpitiˈduʃi] (未年)。「スアン」ドゥシ [ˈraːnˈduʃi] (申年)。「スウイ」ドゥシ [θuˈiˈduʃi] (酉年)。「イン」ドゥシ [ʔinˈduʃi] (戌年)。「ギー」ドゥシ [ˈgiːˈduʃi] (亥年)。

ニーン「スウキヌ」 ウグワン [niːn θuˈkinu ʔugwaŋ] (連)

「子の時(刻)の御願」の義。大漁祈願祭。ウプマーミキの前日と8月9日に行われる。ノロがスォールイを招待し、スォールイが両ノロ家を訪問して接待を受ける「スォールイマカネー」[θoːruimakaneː]の神事である。先ず外間ノロ家で祈願がなされ、ついで久高ノロ家へと移って祈願された。ノロがスォールイを招待すると、スォールイの妻は「スァーラヌ」 「クチアキ」[ˈraːranu ˈkʰuʃiaki] (俵の口開け<米>)をノロ家へ持参する。その米はウプマーミキに使用される。「スァーラヌ」 「クチアキ」の米は両スォールイが各家庭よ

り金を徴収して米を購入し、九合ずつ両ノロ家へ届けたものである。子の時（刻）の祈願の際、届けられた米で粥を作り、トゥパシラに供えて大漁祈願をする。外間ノロは外間ノロ家のウプフダイ（トゥパハシラ）と火の神、床の神に両ソールイの健康と大漁祈願を執り行い、ノロとソールイのスウイ「ケー」[θu i<sup>h</sup>ke:]（盃事）、シ「チョー」ザ[ji<sup>h</sup> tjo: ʔda]とソールイの盃事が行われる。屋内での祈願が済むと、供えられた粥をソールイが頂いて後、屋外（東側の庭）に出て再度「スアルマーユー」[ʔaruma:ju:]（米のお粥）をいただく。その後、東方（カペールのリュウグーの神、フボー御嶽に向かって）ニライカナイへの「ウトゥーシ」[ʔutu:ʃi]（遥拝）の祈願がなされる。それが済んでから次のノロ家へ行く。現在は久高ノロ家ではノロ不在のため、準備された供物を用いてソールイ（二人）自身で祈願している。8月10日頃から10月12日まで、各家庭（親類同志）でソールイマカネーが行われる。ウプマーミキの祈願が済んだ日に、次期ソールイ予定者を「サ」ス[sa<sup>h</sup>su]（指名する）神事が行われた。

ニジュー「グニンキ」[niʃu: ʔgunipki]（名）

二十五年忌の法事。二十五年忌の焼香。

ニブ「ニブ」[nibu]（名）

ひしゃく（柄杓）。ニブ「シャー」マ「ミリ」クミン[nibu ʃa: ʔma ʔmiri kumig]（柄杓で水を汲む）。

「ニラーヌフェー」[nira:nu ʔfe:]（名）

ハンジャナシー祭りの日に執り行われる祭祀で、ニラーハナーの神々に対して守護を願う趣旨で、各ムトゥヤーで行われるワーンネー（ご案内）の祈願。各ムトゥヤーで執り行われる。供物は「ウブン」[ʔubun]（ご飯）、「カンビン」[kambig]（燗燗）2本、「ハラザカナ」[haraʔakana]（てんぷら類。汁の出ないお菜。揚げ物類）が供えられる。外間ノロ家ではノロとシ「チョー」ザ[ji<sup>h</sup> tjo: ʔda]、シ「チョー」ザの補佐役の三名の「ウブン」[ʔubun]（ご飯）が供えられる。現在はノロは亡くなって不在。

「ニンキジョーコー」[nipkiʃo:ko:]（名）

年忌の法事。「年忌焼香」の義。「ギナイ」[ginai]（一年忌）。サン「ネンヌ」ギナイ[san<sup>h</sup> nennu ginai]（三年忌）。シチ「ニンキ」[ʃiʔi nipki]（七年忌）。ジュー「サンニンキ」[ʃu: sannipki]（十三年忌）。ニジュー「グニンキ」[niʃu: ʔgunipki]（二十五年忌）。ウ「ワイジョーコー」[ʔu waiʃo:ko:]（三十三年忌。「終わり焼香」の義）のこと。ショー「コー」ヤイビーグトゥ「イモーリ」「チューンスアー」[ʃo: ʔko: jaibi:gutu<sup>h</sup> ʔimo:ri ʔʃu:nra:]（焼香＜法事＞ですのをおいでくださいって言うよ）。焼香が終わると供物を下げて、参加した人に配った。

ニン「グワティ」[nip ʔgwati]（名）

二月。スアン「グワティ」[ʔag ʔgwati]（三月）。シン「グワティ」[ʃig ʔgwati]（四月）。グン「グワティ」[gun ʔgwati]（五月）。ルク「グワティ」[ruku ʔgwati]（六月）。スイティ「グワティ」[θi ti ʔgwati]（七月）。パハティ「グワティ」[p<sup>h</sup> ʔati ʔgwati]（八月）。クン「グワティ」[kun<sup>h</sup>

gwati] (九月)。ジュー「グワティ [ɬu: ʔgwati] (十月)。シム「ティキ [ʃimu ʔtiki] (十一月)。「シワー「シ [ʃiwa: ʔʃi] (十二月。師走)。

ニン「グワティハリマー「イ [niŋ ʔgwatiharima: ʔi] (名)

「二月風回り」の義。旧暦二月に、急に時化ること。旧暦二月ごろ、急に北風が強く吹き荒れること。これで遭難することがあった。

ニン「ジャラ [nin ʔɟara] (名)

芋を煮て捏ねたもの。「捏ねた芋のご飯」の義。沖縄本島方言の「ンムニー [ʔmmuni:] (芋練り) のこと。

「ノースア [ʔno:ra] (名)

神職者がお祓いの際に用いるヌサ (幣) の一種。シ「チョー「ザ [ʃi ʔtʃo: ʔɬa] (神役名) とその補佐役が外間殿でナンチュから渡されるシュバ (ススキ)。それでお祓いをし、ユラシマの浜においてもそれでお祓いをする。

「ハーウガミ [ʔha: ʔugami] (名)

「井戸拝み」の義。井戸の祈願。ハンジャナシー (9月中旬の健康祈願祭) の翌日、徳仁港の近くにある三箇所の拝所で執り行われる祈願。外間根人家と外間ノロ家は一膳、久高ノロ家、アマミヤを出しているイチャリグワー、大里家 (五穀を司る) は一膳、計四家で祈願が行われる。供物は、「ウブン [ʔubun] (ご飯、2 碗)、スクガラス (2 碗)、麦の種 (1 碗) を供える。それから屋号内間門中も加わり、竜宮の神に対して、徳仁港と屋号イシンミーにおいて海上平安の祈願が行われる。祈願が終わるとイシンミで直会が行われる。それが済むと外間殿のウプフグイに報告がなされる。これをウヒ「ケー [ʔuɕi ʔke:] (報告) という。

「ハー「ミ [ʔha: ʔmi] (名)

かめ (瓶) の総称。麦やあずき (小豆)、黒砂糖などを入れて保管するのに用いた。ムジ「ガーミ [muɕi ʔga:mi] (麦を入れて保管する瓶)。ミリ「ガーミ [miri ʔga:mi] (水がめ)。「パハントーガーミ [ʔpʰanto:ga:mi:] (口の広い水瓶)。「クチ「ヌ マギ「スアスア「パハントーガーミ「ツ「チル 「イータル [ʔkʰuɕi ʔnu magi ʔra:sa: ʔpʰanto:ga:mit ʔɕiru ʔi:ta ru] (口の大きいのはパントー瓶といった)。

ハーラ「ヤー [ha:ra ʔja:] (名)

瓦家。瓦葺きの家。

「ハイワシ [ʔhaiwaʃi] (名)

おかわり。ご飯のおかわり。「代わり箸」の義か。「スオールイマカネー「ヌ バー「イヤ「ウユー ウシャ「ギースイガ ウンニーヤ「ウユーヌ 「ハイワーシン スアリーン [ʔro:ruimakane: ʔnu ba: ʔija ʔuju: ʔufa ʔgi: ʔi ga ʔunni:ja ʔuju:nu ʔhaiwa:ʃin rari:ŋ] (スオールイマカネーの時にはお粥を差し上げるが、その時にはお粥のお代わりもされる)。ウユーヌ 「ハイワシーヌ「アン [ʔuju:nu ʔhaiwaʃi:nu ʔaŋ] (お粥のお代わりがある)。

「ハクグ」[<sup>h</sup>akugu] (名)

「格護」の義。保護すること。幼児を保護すること。

「ハコー」[<sup>h</sup>ako:] (名)

ぼろ (襦袢)。襦袢切れ。おしめ。おむつ。「ハコー シカ」スン[<sup>h</sup>ako: <sup>ʃ</sup>ika<sup>h</sup>sug] (おしめを当てるくおむつを敷かせる)。昔は子供が生まれると満産の日まで産衣を着せず、古着で包んでいた。それを「ハコー」という。満産の日に産衣をきせたという。

「ハハギーン」[<sup>h</sup>ʔaɡi:ŋ] (動)

剥ぐ。剥く。「ハー」ハジカラ[<sup>h</sup>ha: <sup>h</sup>kaʃikara] (皮を剥いでから)。

ハシャ「キー」[<sup>h</sup>aʃa<sup>h</sup>ki:] (名)

旧暦6月24日に行われる健康祈願と家内安全祈願の祭祀。「スップシ」[<sup>h</sup>θu buʃi] (松根油を含んだ松の幹を鉛筆の大きさに切ったもの)をイティ「カキ」[<sup>ʔ</sup>iti<sup>h</sup>kaki] (五片くスアティウグワーン[<sup>ʔ</sup>ati<sup>ʔ</sup>ugwa:ŋ] <6月から12月までの健康祈願の立てお願。お願立ての意を含む>)、ナナ「カキ」[<sup>h</sup>nana<sup>h</sup>kaki] (七片く「ウブ」クイ[<sup>ʔ</sup>ubu<sup>h</sup>kui] <昨年12月から今年6月までの健康祈願のお礼の義。スィリ「ガプフー」[<sup>h</sup>i ri<sup>h</sup>gaʔʌu:] お礼。「孵で果報」の義を含む>)の二つの祈願を籠めて、「ウカマガナシー」[<sup>ʔ</sup>ukamaganashi:] (竈神)に「スップシ」を灯して供え、「ウブン」[<sup>ʔ</sup>ubun] (御飯)と「ハラザカナ」[<sup>h</sup>araʔakana] (から肴。汁の出ない惣菜類)を供える。健康祈願と家内安全祈願を中心にスィーンユタによって祈願される祭祀である。供物はトゥパシラと「スウク」[<sup>h</sup>θu ku] (床の神)にも供える。スィーンユタには謝礼として、ウブン (大盛り御飯) とハラザカナを、祈願を依頼した人が直接にスィーンユタの自宅に持参した。

ハシャ「キー」[<sup>h</sup>aʃa<sup>h</sup>ki:] (名)

旧暦の4月に執り行われる健康祈願の祭祀。外間殿で三十五の「ウカライ」[<sup>ʔ</sup>ukarai]を供えて、ノロが祈願をする。ハシャキーは、「おこわ (御強)」の義。こわめし。赤飯のこと。沖縄本島のカシチーのこと。各家庭より米を、ハハカイ「メー」[<sup>h</sup>ʔakai<sup>h</sup>me:] (「量り米」の義。一合枴や五合枴で祭祀用の米を各家より計量して徴収すること)をして徴収し、それを外間殿に供えて祈願する。その米でハシャ「キー」[<sup>h</sup>aʃa<sup>h</sup>ki:] (おこわ)を炊き、15歳から70歳までの男性一人につき1個ずつのお握りを作る。祈願が終わると各家庭より15歳から70歳の男性の人数分のハシャキーを受け取りに人が来る。

ハスアギ「トゥー」ン[<sup>h</sup>aʔagi<sup>h</sup>tu:ŋ] (動)

妊娠している。ハハラ「ルー」ン[<sup>h</sup>ʔara<sup>h</sup>ru:ŋ] (孕んでいる)ともいう。「アラー」ハスアギ「ター」グ「ラン」[<sup>ʔ</sup>ara:ŋ <sup>h</sup>aʔagi<sup>h</sup>ta:ŋ <sup>g</sup>u<sup>h</sup>raŋ] (あの人は妊娠してはいない)。ハスアギ「トゥーン」シャコー スォー「ター」イカ「ラン」[<sup>h</sup>aʔagi<sup>h</sup>tu:ŋʃako: <sup>θ</sup>o:ŋ<sup>h</sup>ta: <sup>ʔ</sup>ika<sup>h</sup>raŋ] (妊娠していたら、連れてはいかない)。ハスアギ「トゥーン」ハハリ「ロー」[<sup>h</sup>aʔagi<sup>h</sup>tu:m<sup>h</sup> <sup>h</sup>ʔari<sup>h</sup>ro:] (妊娠しているはずだよ)。

ハ「チャイピチャイ」[<sup>h</sup>ʃa<sup>h</sup>ʔi<sup>h</sup>ʃai] (名)

嘔吐下痢症状。「口から吐いたり、尻から放ったりすること」の義。「クチグスウ」[<sup>h</sup>ku

figuθu] (嘔吐したもの。「口糞」の義) ともいう。

「ハッ<sup>ㇿ</sup>タニ[<sup>ㇿ</sup>hat<sup>ㇿ</sup>tani] (名)

麦の初種蒔き。種下ろし。ミーアムトゥ (外間ノロ家、久高ノロ家、外間根人家) の畑 (ヌルジー<ノロ地>、ニーツチュジー<根人地>) で麦の初種蒔き (スウ<sup>ㇿ</sup>シノー<sup>ㇿ</sup>イ [θu<sup>ㇿ</sup>ʃino:<sup>ㇿ</sup>i] <巳年の人に依頼して種蒔きをさせること。スウ<sup>ㇿ</sup>シノー<sup>ㇿ</sup>イは、「干支がよく合ってその時の祭司になる人」という『伊波普猷全集5巻』323頁。「夕神之時、ノロ兩人、年ナフリ壺人、根人二人〜」『琉球国由来記』参照>) を行わせる行事。これが済んで後に一般家庭の種蒔きが行われる。

「ハッティ[<sup>ㇿ</sup>hatti] (名)

「勝手」の義。お産を多くさせた人。医療に詳しい人。仕事の経験者。その道に詳しい人。ミカ<sup>ㇿ</sup>シャー<sup>ㇿ</sup> ワッ<sup>ㇿ</sup>ター シマー<sup>ㇿ</sup> スァン<sup>ㇿ</sup>バー グラナー ハッティンガル ックワー<sup>ㇿ</sup> ナシ<sup>ㇿ</sup>ミータツチル[mika<sup>ㇿ</sup>ʃa:<sup>ㇿ</sup> wat<sup>ㇿ</sup>ta: ʃima:<sup>ㇿ</sup> ɾam<sup>ㇿ</sup>banu gurana: hattingaru kkwa:<sup>ㇿ</sup> naʃi<sup>ㇿ</sup>mi:tatʃiru] (昔は、私たちの島は産婆がいないので、勝手<経験者、その道に詳しい人>にが子供は産ませたそうだ)。「ハッティヌ<sup>ㇿ</sup> アカン<sup>ㇿ</sup>グワー ナシミタン[<sup>ㇿ</sup>hattinu<sup>ㇿ</sup> ʔakaŋ<sup>ㇿ</sup>gwa: naʃimitaŋ] (勝手<経験者>が赤子を生ませた)。

「ハッシャ[<sup>ㇿ</sup>haʃʃa] (名)

かしら(頭)の義。村の神事の雑役に当たる人。二人制で、年令50歳前後の人になる。この役を経験してはじめて「スォールイガナシ[<sup>ㇿ</sup>θo:ruiganaʃi] (棹取り神)になる資格を得るといわれている。ハッシャもスォールイガナシも昔は二年任期で、交互に新任と交代した。それによって神事の経験者が毎年残るシステムになっていた。ハッシャにされる予定の人が旅に出る場合は代役を願い出て、島にいる人に代理を務めさせてもらうことも出来た。現在はハッシャになることが敬遠され、制度は存在しない。

パハカイ<sup>ㇿ</sup>メー[<sup>ㇿ</sup>pʰakai<sup>ㇿ</sup>me:] (名)

「量り米」の義。祭祀用の花米を各家庭より杵で計量して徴収すること。

パハティ<sup>ㇿ</sup>グワティ[<sup>ㇿ</sup>pʰati<sup>ㇿ</sup>gwati] (名)

八月。

パハティ<sup>ㇿ</sup>グワティグル<sup>ㇿ</sup>イ[<sup>ㇿ</sup>pʰati<sup>ㇿ</sup>gwatiguru<sup>ㇿ</sup>i] (名)

八月踊り。

「ハブイ[<sup>ㇿ</sup>habui] (名)

神女の頭に被るもの。「被り」の義。トウズルモドキ(植物)を輪のように丸めて結わえ、神女の頭に被って神のよりしろ(依代)としたもの。祭祀の場でノロや神女が頭に被って祈願をした。

ハマー<sup>ㇿ</sup>ローエー[<sup>ㇿ</sup>hama:<sup>ㇿ</sup>ro:je:] (名)

「竈祝い」の義か。竈神が昇天する日の祈願。旧暦12月24日に火の神が天に昇るといわれている。「ハマードーエー[<sup>ㇿ</sup>hama:do:je:]ともいう。その日には、「ミガー[<sup>ㇿ</sup>miga:] (久高島の産土神の井戸)で水を汲み、竈の火の神(3個の石)を洗い清めた。鉛筆の大きさに

削った「トゥブシ」[<sup>h</sup>tubufi] (ともし。松明) を旧暦6月にも「イティカ」キ[<sup>h</sup>ʔitika<sup>h</sup>ki] (5片)、「ナナカ」キ[<sup>h</sup>nanaka<sup>h</sup>ki] (7片)、12月にも「イティカ」キ[<sup>h</sup>ʔitika<sup>h</sup>ki] (5片) と「ナナカ」キ[<sup>h</sup>nanaka<sup>h</sup>ki] (7片) を灯して祈願した。

「ハミダー」リ[<sup>h</sup>hamida:<sup>h</sup>ri] (名)

神託(託宣)。神のお告げ。神霊が憑依すること。神がかりしてぐったりすること。発熱したり、寝付けない状態が続くとき、「ムヌシリ」[<sup>h</sup>munufiri] (ユタ。「物知り」の義) の家に行って神に仕える事情を話して判断して頂き、その神を拝む<信仰する>ようになることをいう。戦前は島のユタに判断してもらっていた。「アラ」ー「ユロー」「ニンダラン」 ティブ「ル」ン ヤミン「チースイガ」 ハミ「ダーラ」ー アラ「ニーヤ」ー[<sup>h</sup>ʔara:<sup>h</sup> juro:<sup>h</sup> ʔnindaran<sup>h</sup> tibu<sup>h</sup>ru<sup>h</sup>n jamin<sup>h</sup>ʔi:θi ga<sup>h</sup> hami<sup>h</sup>da:ra:<sup>h</sup> ʔara<sup>h</sup>ni:ja:] (あの人は夜は眠れず、頭も痛いというが、神霊が憑依したのではないだろうか)。「アラ」ー ナンクワイ「ン」 パラ「リン」 ウル「スンチーガ」 ハミダーラ「ー」 アラ「ニーヤ」[<sup>h</sup>ʔara:<sup>h</sup> ʔnaŋkwai<sup>h</sup>m para<sup>h</sup>riŋ<sup>h</sup> ʔuru<sup>h</sup>sunʔi:ga<sup>h</sup> hamida:ra:<sup>h</sup> ʔara<sup>h</sup>ni:ja] (あれは何回妊娠しても流産するというが、神がかりではないだろうか)。

「ハヤ」[<sup>h</sup>haja] (名)

かや(茅)。ハヤ「ヤー」[haja<sup>h</sup>ja:] (茅葺の家)。

「ハライハビ」[<sup>h</sup>haraihabi] (名)

「飾り紙」の義。正月には床の間に赤、白、黄の色紙を重ね、その上にシークワースアー[<sup>h</sup>ʃi:kwɑ:ra:] (ヒラミレモン) を載せて新年を祝い、ウカマガナシー、トートーメー、トゥパシラ、スックに供えて家族の健康と豊年豊漁を祈願した。その飾りの赤い紙。

「ハラザカ」ナ[<sup>h</sup>harazaka<sup>h</sup>na] (名)

汁のない肴。テンプラ、揚げ豆腐などの揚げ物、昆布、蒲鉾、パパヤ、大根などの汁の出ない炒りもの料理。

「ハリー」[<sup>h</sup>hari:] (名)

えんぎ(縁起)。嘉例と表記する。「嘉例<めでたい長寿>」の義。「ハリー」 ティ「キタン」[<sup>h</sup>hari: ti<sup>h</sup>kitan] (「嘉例をつけた」。縁起がいい)。「ハリー」 ティ「キーン」[<sup>h</sup>hari: ti<sup>h</sup>ki:n] (「嘉例を付ける」。縁起がいい)。「ハリー」 「ワッサ」ン[<sup>h</sup>hari: ʔwassa<sup>h</sup>n] (縁起が悪い。漁に出る際、道で最初に女性と出会うと縁起が悪いといわれている)。

「ハリガーユーハー」[<sup>h</sup>hariga:ju:ha:] (名)

悪霊祓え。無縁仏を村から追い祓う儀式。お盆のウウクイ(旧暦7月16日)の夕方、久高ノロ、外間ノロを中心にイザイホーに参加した神女全員参加し、フボー御嶽で島を祓い浄める祈願して帰り、先頭の外間ノロは右手に刀剣を持ってかざし(翳)ながら集落に入る。番所で一旦休み、その間に集まって来た子供達を、それぞれの祖母が「シュバ」[<sup>h</sup>ʃuba] (茅で作ったお祓い用の祭具)で肩を軽く叩いて祓い浄める。集落内では子孫のない霊がまだ残っているので、それらを追い払うため、そこから外間ノロー一行は、ノロは右手に刀を翳して巫女達を従え、集落内を回ってお祓いをしながらユランマの浜へ同行する。久高

ノロ一行もノロを先頭にして悪霊祓えをしながら集落を通り抜けスベーラキから徳仁港の灯台に出てユランマの浜へ同行し、そこで外間ノロ一行と合流する。ユランマの浜で両方一列になって向き合い、「シュバ」[ʃuba]を手持って打ち振り、ノロは刀剣を持って向き合い、「マキラン マキラン」[makiram makirag]の声を発しながら両グループ交錯しては元の位置に戻り、またマキランマキランと声を発して、ガーエー（景気付け。威勢を張ること）をし、悪霊祓えをした。子供達は仏壇にお供えした砂糖黍をかじりながら見物したものである。この行事も戦後早い時期（終戦数年後）に廃止されて現在では行われていない。

ㇿバン[ʔbaŋ] (名)

番。順番。水汲みの順番。

ㇿハンジャナシー[ʔhanɕanaʃi:] (名)

ニラーハナー<ニライカナイ>からの来訪神を迎えて島を祓い清め、正人（15歳から70歳の男）の健康祈願をする祭祀。旧暦4月と9月の「アラミンニー」[ʔaraminni:]（最初の壬癸）に執り行われる。9月のハンジャナシー祭にはムム「ハメー」[mumu ʔhame:]（イラブー漁の感謝祭）が行われる。「ハミダーリ」[hamida:ri:]（神託。託宣）によって「シチョーザ」[ʃiɕo:ʔda]（神職名）が選ばれる。4月と9月にアマミヤー、シチョーザとその補佐役、パハーガナシの「ックワガミ」[kkwagami]（子供神）が外間殿に集まり、ナンチュからシュバをシチョーザに渡され、これで「ノー」スア[no:ʔra]（お祓い）が行われる。その後、外間殿よりユランマの浜へ移動する。浜では神女達が対座し、その中で「クルキミ」ボー[kurukimiʔbo:]（アマミヤーハンジャナシが持っている赤い棒。「シマグシ」ナ[ʃimaguʃiʔna]ともいうが、正しくは「クルキミ」ボー）を持ったアマミヤー（アマミヤー・ハンジャナシー）四名が左回りに回って祓い清める。帰りは二手に分かれ、島を祓い清めて外間殿に合流する。ウグワンダティは「パハナ」[ʔpʰana]（花米）で祈願し、ウブクイは「ウブン」[ʔubun]（盛りご飯）の供物を供えて祈願する。

ㇿハンジャナヤマ[ʔhanɕanajama] (名)

地名。集落後方の島の最高地点。現在の給水タンクのあるところ。そこにイザイホー祭のアリクヤーの綱に使用した綱を放置したという。

パハーチ「ブン」[ʔpʰa:ɕiʔbun] (名)

供物を載せる丸い高膳。パハーチ「ブンカイ」 ウカ「ライ」 ウチ「 ウグワ「ノー」 シュル[ʔpʰa:ɕiʔbunkai ʔukaʔrai ʔuʃi ʔugwaʔno: ʃuru]（丸い高膳にお飾りの<供物三十五品>を置いて祈願はするのだ）。

パハー「パハー」[ʔpʰa:ʔpʰa:] (名)

おばあさん（祖母）。ワツ「ター」 パハー「パハーヤ」 ナガ「ユー」 ミチャン[watʔta: ʔpʰa: ʔpʰa:ja ʔnagaʔju: miʃaŋ]（私の祖母は長生きをした<長世を見た>）。

ㇿパハカ[ʔpʰaka] (名)

墓。墓石などはない。本来は海辺の崖の下に墓を作ったが、次第に上の方に作るようになった。

た。現在は土地管理委員会に申請し、その認可を得て作っている。戦前は風葬もあったが現在はない。墓の型には破風型と亀甲型がある。しかし、ハーフーバカとかカーミヌクーバカとはいわない。墓にも三十三年の儀式があった。「ハンナーバカ」[ˈhanna:baka] (漢那墓。廃家)、「ミンダカリ」バカ[ˈmindakariˈbaka] (新仲村渠墓)、フ「カマバカ」[Φuˈkamabaka] (外間墓。墓口が三つある)、「ヌンドウチ」バカ[ˈnunduɟiˈbaka] (ノロ殿内墓)、「メーサキ」バカ[ˈme:sakiˈbaka] (前崎家の墓) などがある。大正12年に、当時の金額の二千七百円で建立したという福治家の墓には入り口が三つあり、久高島最大の墓である。向かって右が建立した本人の家族用、中が三人の弟等とその家族用、左が叔父家族用の三つの入り口である。当時は「チャー」ギ[ˈtʃa:ˈgi] (高級犬楨の建材) の瓦葺の家を新築するのに千円の建築費が掛ったという。昭和8年には六百円で家一軒新築できたという。

ハハカ「ジー」[PΦakaˈɟi:] (名)

墓地。西海岸にある。東海岸は神聖な聖域で墓地は作らない。徳仁港から東海岸は聖域であるから、そこには墓地は作れないことになっている。

ハシャ「キー」[haʃaˈki:] (名)

糯米を蒸して作ったご飯。「米の強飯」。ハシャ「キーヤ ムチグミハシャキートウ」ンムトゥ「スォーン」チュミシャーマ「マン」キティ「スァンシンガーシャーマ」ティ「テリ」スォーン「チュミ ム」チ トウ「クティ」シンメー「ナビカイ」ンブ「チル」トゥクイル「マタ」ンムトゥ「ムジ」マンキティ トウクイシン「アタ」スァー[haʃaˈki:ja muɟigumihafaki:tu mmutuˈθo:nˈɟumiʃa:maˈmaŋˈkiti ɾanɟigga:ʃa:maˈtiˈtiriˈθo:nˈɟumi muˈɟi tuˈkutiˈɟimmeˈnabikaiˈʔmbuˈɟiruˈtukuiruˈmataˈʔmmutuˈmuɟiˈmaŋkitiˈtukuifɟiˈʔataˈɾa:] (ハシャキーは糯米のハシャキーと、芋とトウモロコシで混ぜて月桃の葉で包んでトウモロコシの餅を作って大鍋<四枚鍋>で蒸して作る<作るものだ>。また、芋と麦を混ぜて作るのもあったよ)。米餅も月桃の葉で包んで作っている。

パハティウク「シー」[patiukuˈʃi:] (名)

「初起こし」の義。仕事始め。事始め。正月2日の早朝に大漁祈願をする。パハティウク「シーヤ」ヒティ「ミティ」ピ「ヒャーサラ ウヌ トウシ」ヌ「タイローキグワン ススイ」ヤル、「プン」キユミティ「タイローキグワン ススイガ」プナダマ「ガナシー マチトゥー」ヌ「プノー プナダマ」ガナシー「ウガミン」。ウガ「ラヌ」アトー「ンナ」スルティ「スァキ ヌ」リ「パハナ」シー「ツチカラ」ヤー「ミグイ ツチ」タヌ「シミ」ン[PΦatiukuˈʃi:jaˈçitiˈmiti PΦja:sara ʔunu tuɟiˈnu tairo:kigwan suθiˈja ruˈpˈuŋˈkijumitiˈtairo:kigwan suθigaˈpˈunadamaˈganaɟiˈmaɟituˈnuˈpˈunoˈpˈunadamaˈganaɟiˈʔugamiŋˈʔugaˈranuˈʔatoˈˈnnaˈsurutiˈɾakinuˈri PΦanaˈʃiˈtɟikaraˈjaˈˈmiguɪ tɟiˈtanuˈɟimiŋ] (仕事始<初起こし>は早朝から、その年の大漁祈願をすることである。船を祓い清めて大漁祈願をするが、船霊



さまを祀っている船は船霊さまを拝む<祈願する>。拝んだ後は皆揃って酒を飲んで話をしてから各家めぐりをして楽しんだ。

「ハハティ」ウンチ[<sup>P</sup>Φati<sup>u</sup>nɕi] (名)

「初運氣」の義。初運勢。旧正月の後、沖縄本島在住の「ユタ」[<sup>j</sup>uta] (巫女。ふげき<巫巫見>。いちこ。くちよせ)の家を訪ね、家族の運勢を占ってもらうこと。「ハハティウンチ」ンジャクトゥ ジナンワラビヤー ウンチヌ「 ヨー「スァン」チ ンギ「トゥークトゥ」 ユー キー「チキリヨーツ」チ 「イヤーツタン」[<sup>P</sup>Φatiunɕi ʔnɕakutu ɕinaɲ warabja: ʔunɕinu<sup>u</sup> jo:<sup>o</sup>ʔan<sup>u</sup>ɕi ʔŋgi<sup>u</sup>tu:kutu<sup>u</sup> ju: ki:<sup>u</sup>ɕikiriʝo:t<sup>u</sup>ɕi<sup>u</sup> ʔija:ttan<sup>u</sup>] (初運氣を見てもらいに行ったら、「次男の運気が弱いと出ているのでよく気をつけなさい」といわれた)。多くの場合、初運勢は知念村志喜屋のユタの家で占ってもらうのが普通であった。

「ハハティ」グワティマティー[<sup>P</sup>Φati<sup>u</sup>ɡwatimati:] (名)

八月祭り。旧暦8月10日、外間殿、久高殿において、スァムトゥ以上の神女によって健康祈願が執り行われる祭祀。「アサマティー」[<sup>ʔ</sup>asamati:] (朝祭り)と「ユーマティー」[<sup>j</sup>u:mati:] (夕祭り)がある。「ハブイ」[<sup>h</sup>abui] (トウズルモドキで作った冠。被り物)を被り、神酒を神職者とスァムトゥに捧げて祈願が行われる。その年に60歳になった「スァムトゥ」[<sup>ʔ</sup>amutu] (巫女)7名が「シマジ」ク[<sup>j</sup>imaɕi<sup>u</sup>ku]<sup>u</sup><ナー「レーラー」[na:<sup>u</sup>re:ra:]>宮平家の左横にあたる道>で7回まわる儀式を行う。新入のスァムトゥ (巫女)が7名に達しない場合は先輩が加勢する。この儀式は「グングワティマティー」から「ハハティグワティ」マティー[<sup>P</sup>Φatigwati<sup>u</sup>mati:] (八月祭り)までの祭りのたびにおこなわれる。夕方になるとユーマティー[<sup>j</sup>u:mati:] (夕祭り)が行われる。

「ハハティ」ナーリ」キ[<sup>P</sup>Φatina:ri<sup>u</sup>ki] (名)

旧暦八月のこと。八月の蔑称。「八月は悪い月」の義という。

「ハハナ」[<sup>P</sup>Φana] (名)

神前、仏前に供える米。「花米」の義。

「ハハナ」[<sup>P</sup>Φana] (名)

遊女。花町 (色町) の女性。

「ハハナイ」リー[<sup>P</sup>Φanairi:] (名)

花米を入れること。中元に相当するもので、お盆や「シーミー」[<sup>j</sup>i:mi:] (清明祭)、十六日祭に竹線香3本と花米3掴みを親戚の家に持参し、仏前に供えた。「ハハナ イリー」ン[<sup>P</sup>Φana ʔiri:<sup>u</sup>ŋ] (花米を入れる)という。

「ハハマー」ローエー[<sup>P</sup>Φama:<sup>u</sup>ro:je:] (名)

「竈祝い」の義。「シムティキ」[<sup>j</sup>imutiki] (旧暦十一月)に行われる神事。12月24日に竈の神が昇天するといわれる日の神事。

「ハハマ」シーグ[<sup>P</sup>Φama<sup>u</sup>ʃi:gu] (名)

旧暦3月29日に行われる害虫祓い祈願の神行事。「浜シヌグ」の儀。「シーグ」[<sup>j</sup>i:gu]は

沖縄本島の「シヌグ」[ʃinugu]の転訛したもの。ハツ「シャ」[haʃʃa] (村頭。頭役) が芭蕉の葉柄を一尺ほどに切り、それを四、五本組んで小さな筏を作る。芭蕉の葉で帆を作って各家庭から集められた害虫を筏に載せて流した。その際、ノロ達は虫祓いの祈願をし、「スイル」ル[ʃi ruʳu] (ティルル。神歌) を歌った。昔はユランマの浜の砂丘に村人がご馳走を作って昼前頃から沢山集まり、ノロ達が祈願している間、一定時間<半日>を過ごしたが、今は1、2時間で終了している。

「ハハライ」[ʰPɸarai] (名)

漁獲がないこと。まるはげ (まる禿げ)。スイティ「グワティヌ キシコー ワーティキ ワッサヌ チュピーン ユラントン ヌー」ン スウラ「ラン」 バー「イヤ ハハライチン イースアー (「イー」ンミヤー) [θitiʰgʷatinu kiʃiko: wa:tiki waɾɾsanu ʃupi:n jurantan nu:ʳn θu raʳramʳ ba:ʳija ʰPɸaraitʃiŋ ʔi:ra: (ʳi:mʳmja:)] (7月のキシク<スク、小魚>は天気が悪いので一匹<一尾>も寄らなかった。何も取られない時はパライともいうよ<いうさ>)。

「ハハラミムン」[ʰPɸaramimun] (名)

妊婦。孕んだ人。「孕み者」の義。「ハハラミムンヌ」 チャン[ʰPɸaramimunnuʳ ʃaŋ] (妊婦が来た)。「ハハラ」ル「ン」 ッ「チュヌ」 チャン[ʰPɸaraʳru:ʳn tʰʃunuʳ ʃaŋ] (孕んでいる人<妊婦>が来た)。

「ハハラ」ル「ン」[ʰPɸaraʳru:ʳŋ] (動)

妊娠している。孕んでいる。「アラー」 ハハラ「ルー」ツ「チュスアー」[ʔara:ʳ ʰPɸaraʳru:tʃu ɾa:] (あれは妊娠している人だ。あれは妊婦だよ)。「アラー」 ハハラ「ラー」 グラン[ʔara:ʳ ʰPɸaraʳra:ʳ gurag] (あの人は妊娠してはいない)。「ハハラ」ル「ン」 ハハリ「ロー」[ʰPɸaraʳru:mʳ ʰPɸariʳro:] (妊娠しているはずだよ。妊娠しているはずだ)。「ミー」ビキ スイバ「 ハハラミ」スアー[mi:ʳbiki θi baʳ ʰPɸaramiʳɾa:] (結婚したら妊娠するよ)。「パラ」ル「ン」 ッ「チュヌ」 ッ「チャン」[ʰPɸaraʳru:ʳn tʰʃunuʳ tʃʰaŋ] (妊婦が来た) <上品な表現>。

「ハハン」ジュ「ー」[ʰPɸanʳʃu:] (名)

「半重」の義。お重一組の半分の意。「マー」チャン チュー[ma:ʃan ʃu:] (死んだ人。死者)の前に「スイ」キーン[ʃi ki:ŋ] (供える) 供物のこと。「ショー」コム「ノー」カーン キネン「 アタ」ッチ「スアー」[ʃo:ʳko:muno: ka:ŋ kine:ŋ ʔatatʃiʳɾa:] (焼香の供物、法事のご馳走を食べない家もあったそうだよ)。

「バキーン」[baki:ŋ] (動)

化ける。幽霊が化けて出る。標準語「化ける」の転訛したものか。あまり使用しない。「バキ」ラン[bakiʳraŋ] (化けない)。「バキ」タン[bakiʳtaŋ] (化けた)。「バ」キー「ヤー」[baʳki:ja:] (化けたら)。「バキ」リ「バ」[bakiriba] (化けろ。化けなさい)。「ユー」リー「ガ」 バ「キー」ヤ「デー」ジ「 ヤル」[ju:ʳri:gaʳ baʳki:jaʳ de:ʃiʳ jaru] (幽霊が化けたら大変だ)。「ユー」リー「ヌ」 バ「キー」ヤ「 ウト」ウルシ「ムン」 ヤル[ju:ʳri:nuʳ baʳki:jaʳ ʔuturuʃiʳ mu

ɲ<sup>ɾ</sup> jaru] (幽霊が化けたら恐ろしいものだ)。

「バケー」[<sup>ɾ</sup>bake:] (動)

取り合い。奪い合い。カミ「チャノー」 スアルートゥ 「ジロートゥ タイ「シャーマ」  
バケーツチ 「ジロー 「スウジ ナタツチスアー[kami<sup>ɾ</sup>ʃano:<sup>ɾ</sup> ɾaru:tu ʃi:ro:tu tai  
ʃa:ma<sup>ɾ</sup> bake:tʃi ʃi:ro: ʃu ʃi natatʃi:ra:] (カミちゃんは太郎と次郎と二人で奪  
い合いして、次郎の妻になったそうだ)。「スアルーヤ 「スィー 「クータ」ンバー 「ヤル  
[<sup>ɾ</sup>ɾaru:ja ʃi: ʃu:ta<sup>ɾ</sup>mba: ʃaru] (太郎は指をくわえた訳だ)。

「ハタス」[<sup>ɾ</sup>hata:ɬu] (名)

地名。

「バチ」[<sup>ɾ</sup>baʃi] (名)

ばち (罰)。神仏が悪行に対して下す懲らしめ。悪事の報い。ウンネー「ジュー シーヤ」  
バチヌ 「アタインローヤー[ʔunne:<sup>ɾ</sup>ʃu: ʃi:ja:<sup>ɾ</sup> baʃinu ʔatainro:ja:] (こんなこ  
とをすると罰が当るぞ)。「バチ 「クワースアリンローヤー[<sup>ɾ</sup>baʃi ʃu:wa:ɾarinro:ja:]  
(罰を喰らわされるぞ)。「バチ 「ハンジュン[<sup>ɾ</sup>baʃi ʃanʃuŋ] (罰をかぶる)。

「バリン」[<sup>ɾ</sup>bariŋ] (名)

たわし (束子)。バリン「シャーマ」 ナビ 「アレーン[bariŋʃa:ma<sup>ɾ</sup> nabi ʔare:ŋ]  
(束子で鍋を洗う)。

ハハレー「ヤ」ク[<sup>p</sup>ʃare:<sup>ɾ</sup>ja<sup>ɾ</sup>ku] (名)

干支の生まれ年の翌年。「晴れ厄」の義。フタ「ビヤー」 ハハレー「ヤ」ク 「ヤク」トウ 「  
ドゥーヤ 「ユー 「ハネーティ アッカカンバ[ʃu:ta<sup>ɾ</sup>ʃa:<sup>ɾ</sup> <sup>p</sup>ʃare:<sup>ɾ</sup>ja<sup>ɾ</sup>ku ʃaku<sup>ɾ</sup>tu  
du:ja ʃu: ʃane:ti ʔakkamba] (今年は晴れ厄の年だから、よく体に気をつけてい  
なさい<あるきなさい>)。

「ハンチャタイ」[<sup>ɾ</sup>hanʃatai] (固)

神屋敷の名。

バン「ドゥク」マ[ban<sup>ɾ</sup>duku<sup>ɾ</sup>ma] (名)

「番所」の義。村の中央にある空き地。昔は旧暦1月4日に、そこに村人が集まって村協  
議をおこなったという。ミカ「シャー」 シマ「ジュリーヤ ミツチャン」スウクヌ 「ナー  
チャ」 バン「ドゥクマカイ」 スウリー「タツチスアー[mika<sup>ɾ</sup>ʃa:<sup>ɾ</sup> ʃima<sup>ɾ</sup>ʃuri:ja mitʃan  
ʃu kunu ʃa:ʃa<sup>ɾ</sup> ban<sup>ɾ</sup>dukumakai ʃu ri:<sup>ɾ</sup>tatʃi:ra:] (昔は、島の集会は、正月三日  
の翌日、番所に集まった<揃った>そうだ)。

「ヒー」サチ[<sup>ɾ</sup>ʃi:<sup>ɾ</sup>saʃi] (名)

正月の吉日。旧暦1月下旬(1月29日)から2月上旬の「ミーンニー」[<sup>ɾ</sup>mi:nni:] (干支の  
壬癸の日)を選んで執り行われる大漁祈願祭。「ハビヤーン」[<sup>ɾ</sup>habja:ŋ] (カベール) 岬の  
三箇所祈願される。祭りの前日、両スォールイから各「ヌン」ドゥンチ[<sup>ɾ</sup>nun<sup>ɾ</sup>dunʃi]へ  
9合花米と魚1斤を捧げる。ピーサチの朝、両ヌンドゥンチ(外間ヌンドゥンチと久高ヌ  
ンドゥンチ)から両スォールイへ、「ウブンガナシー」[<sup>ɾ</sup>ʔubuganaʃi:] (煮魚とスネー<刺

身の和え物>が米のご飯と共に盆に入れたもの)が届けられる。両スォールイはスォールイ棚にウブンガナシーを供えて大漁祈願をする。神女(巫女)たちは外間殿のスァムトゥミャーに集まって、外間ノロが外間殿の火の神を拝むのを見守る。拝みが済むとフボー御嶽へ向かう。「イビ」[ʔibi] (威部。御嶽の香炉を安置してある所)に供物を供え、神女達は車座になって口三味線をしながら調子を取り、手を打って歌謡を奉納する。フボー御嶽での祈願を済ませて、ノロを先頭にカペールへと向かう。カペールでは神女(巫女)たちは「ハブイ」[ʔhabui] (トウズルモドキで作った冠。被り物)を被り、ノロが「インヌハナ」[ʔinnuhana]で大漁祈願のティルルを歌うと神女たちも「ウイレ」[ʔuire:] (復唱)をする。ノロはトウズルモドキの束を上下に振り、魚を追い込む所作をしながらティルルを謡う。トウズルモドキは岩の穴に結わえておく。以前は「インヌハナ」[ʔinnuhana]、「アリンダチ」[ʔarindaʃi]、「スァバンクチ」[ʔabankuʃi]の三箇所ではティルルを謡ったが、現在はノロが老齢でウッチュ神が代行しているので、インヌハナ一箇所だけで、ティルルも謡わず省略している。ティルルが済んだ後、持参した弁当を開き、軽い食事をする。それが済むと連れ立ってフボー御嶽に帰る。フボー御嶽でも持参の弁当をフバリカサの前に供えてノロが祈願する。祈願後、各人が供えた物を各人に返して本格的な食事をする。その後、ノロ、神女(巫女)達が歌を歌って踊りをする。これをア「スイビ」[ʔa ʔi bi] (神遊び)という。久高島では、神前においては三味線は弾かない。

#### 「ヒガン」[ʃigag] (名)

彼岸祭り。春分の日。秋分の日。「スイーンユタ」[ʔi ʃjuta] (神職者の一種。一族の中で神懸りした者になり、家庭レベルの神事に従事した)を頼んで「ヤシキヌ」[ʔjaʃikinu] 「ユサンミ」[ʔusammi] (屋敷の祈願。屋敷を祓い清める祈願)を行った。旧暦2月と8月は彼岸入りの後に行く。屋敷の四隅に祈願した。2月は「グワンダティ」[ʔgwandati] (願立て)、8月は「スイリガフ」[ʔi riga ʔu:] (願解き。お礼)の祈願。

#### ヒジ「ムン」[ʃiʃi ʔmug] (名)

想像上の怪物(動物)。「キジムナー」のこと。潮干狩りの時などに人間を助けて、よく大漁させたという。ヒジムンと友達になって、漁の時刻になると人間を起こしにやってきたという伝説もある。かっぱ(河童)の一種。「ンダルー」[ʔndaru:] 「チュー」[ʔtʃu:] 「スイガ」[ʔsiga:] 「アカトゥキ」[ʔakatuki:] 「ガー」[ʔga:] 「チ」[ʔtʃi:] 「イキヤーマ」[ʔikja:ma:] ヒジ「ムンネー」[ʃiʃi ʔmunne:] 「マヤー」[ʔmaja:] 「スアッティ」[ʔsatti:] 「マー」[ʔma:] 「ガラヌ」[ʔgana:] 「ガマン」[ʔgaman:] 「シャツ」[ʃaʃtʃu:] 「スォー」[ʔso:] 「ティ」[ʔti:] 「イカッティ」[ʔikaʃti:] 「ヘーター」[ʔhe:ta:] 「フーナ」[ʔfu:na:] 「シマ」[ʃima:] 「ジュー」[ʃu:] 「ソードー」[ʔso:do:] 「ツチュー」[ʔtʃu:] 「ヤビー」[ʔjabi:] 「タッチスアー」[ʔtatʃira:] 「ンダルー」という人が早朝の水汲みに行って、ヒジムンに迷わされてどこかの洞窟の下に連れて行かれて帰ってこず、島中騒動していたそうです<外間ノロの夫君談>。スァプシのアッティミー<お父さん>が探して帰ったそうです。「イライ」[ʔira:] 「チ」[ʔtʃi:] 「イキヤーマ」[ʔikja:ma:] ヒジ「ムン」[ʃiʃi ʔmug] 「トゥ」[ʔtu:] 「スアックスウイ」[ʔsaksui:] 「バーケー」[ʔba:ke:] 「ツチャン」[ʔtʃan:] 「チューヌ」[ʔtʃu:nu:] 「パハナ」[ʔpa:na:] 「シーヤ」[ʃi:ja:] 「チチャン」[ʔtʃiʃan:] 「クトー」[ʔkto:] 「アスアー」[ʔasaa:]

ʔʃi ʔikja:ma ʧiʃi mun tu ʔaku θui ʔa:ke: tʃan ʃu:nu ʔΦana ʃi:ja ʃi  
ʔʃaŋ kuto: ʔa:ra:] (漁りし<潮干狩り>に行つてヒジムンと蛸獲り競争をしたという  
話は聞いたことがあるよ)。

「ヒッチャキ[ʔitʃaki] (名)

つまずく(躓く)こと。蹴躓くこと。「ヒッチャキピッチャキ[ʔitʃakipitʃaki]と重ねて  
(疊語化して)用いることが多い。「ユビヤー エーカンヤー ʔカ グイ ʔヤーマ へー  
イヤ ゲーミ ナヤーマ イシヌ アスアー ʔワカ ʔラナ ウヌ イシンカイ ʔヒッ ʔチャ  
キ スアーマ ʔドゥ ʔゲッタースアー[ju ʔbja: ʔe:kaŋja: ʔka gui ʔja:ma he: ʔija  
ge:mi naja:ma ʔiʃi nu ʔa:ra: waka ʔrana ʔunu ʔiʃikai ʔitʃaki ʔa:ma du  
ʔge:ttara:] (昨夜は親戚の家で酔っ払つて、帰りは闇夜になって、石があるのを知らず  
に、その石に蹴躓いて<蹴躓きして>転んだよ)。

「ヒッチャキピッ ʔチャキ[ʔitʃakipitʃaki] (名)

先祖の祟りが子孫にかかること。「ひっかかりごと」の義。

「ピーマティ[pi:mati] (名)

火の神の祈願祭。旧暦1月の吉日に各ムトゥにおいてナンチュ以上の神女(巫女)が集まり、クニガミによって「ピー ʔマティの「ウグワンダ ʔティ[ʔugwanda ʔti] (願立て)が「ミー  
アムトゥ[mi:ʔamutu] (外間ノロ殿内、久高ノロ殿内、外間根人家<外間殿を含む>)で執り行われる祭祀。「火祭り」の義か。火事が起きないようにと祈願する祭祀。外間ノ  
ロ殿内の火の神への祈願から始まる。次にウプグイ、スウクヌハンジャナシーの祈願が行  
われる。フワーチ ʔブン[Φa:ʃi ʔbuŋ] (丸いお盆)にサンゴー ʔバナ (三合花米)を入れて  
祈願する。神女達はクンジー (紺地)の衣装をまとして参加する。旧暦12月の吉日には、  
その「スイリガ ʔフー[ʔθi rigap Φu:] (感謝祭。願解き。願結び)が行われる。供物は「ハ  
ラザカ ʔナ[ʔharaʔaka ʔna] (煮魚)、「メーニギリ ʔフクン ʔティリ[ʔme:nigiri ʔΦu  
kun ʔtiri] (握り飯九個)をスア ʔカジン[ʔa ʔkaʃiŋ] (高膳)に盛ったものを供える。「ハッ  
シャ[ʔhaʃʃa] (村頭)の妻二人と「スォージヤク[ʔθo:ʃijaku]が外間ノロ家に来て準備す  
る。それを外間ヌン殿内に持参し、ウ ʔフグイに供物を供えて感謝祈願を行い、火の神、  
床の神に祈願が行われる。次に久高ヌン殿内に移り、同様の祈願が行われる。この一年間、  
健康で無事に祭りを執行できたことに対する感謝の祈願が行われる。両ノロ家は外間殿で  
祈願を行い、ウ ʔフグイ、火の神、床の神の三箇所祈願がなされる。「スアムトゥ[ʔra  
mutu]たちは、「スアムトゥミヤ ʔ[ʔramutumja:]でノロ達が祈願している時に、同時に  
祈願する。それが終わるとウガミ ʔグワー[ʔugami ʔgwa:]に行き、祈願をする。ウグワン  
ダティの時は、ウ ʔフウガミから祈願するが、スイリガ ʔフーの時はウガミ ʔグワーから先  
に祈願される。次にティリリカサー、ワカリカサー、クバジカサーの順にウ ʔフウガミの  
祈願が行われる。祈願が済んだらウサンデーを頂いて直会をし、全員御嶽から帰る。タティ  
御願は ʔハナグミ (花米)で祈願し、スイリガ ʔフー (感謝祭)は「ウブン[ʔubun] (ご  
飯。お握り)を供える。

ピ<sup>レ</sup>キン[pj<sup>レ</sup>kiŋ] (動)

挽く。ウスイ<sup>レ</sup>カイ<sup>レ</sup> ムジ<sup>レ</sup> 「ピ<sup>レ</sup>チ<sup>レ</sup> フーヤ<sup>レ</sup> トウ<sup>レ</sup>クイタル<sup>レ</sup>[ʔu θi<sup>レ</sup> 'kai<sup>レ</sup> muʔi<sup>レ</sup> 'pi<sup>レ</sup> ʔʰi<sup>レ</sup> ʔʰu:ja<sup>レ</sup> tʊ<sup>レ</sup> 'kuita<sup>レ</sup> ru] (臼で麦を挽いて粉を作った)。ピ<sup>レ</sup>カン[pj<sup>レ</sup> 'kaŋ] (挽かない)。  
ピ<sup>レ</sup>チャン[pj<sup>レ</sup> 'ʧaŋ] (挽いた)。「ピキブシャン<sup>レ</sup>[ 'pikibuʧaŋ] (挽きたい)。

ピヌ<sup>レ</sup>カン[pinu<sup>レ</sup> 'kaŋ] (名)

火の神。「ウカマガナシー<sup>レ</sup>[ 'ʔukamaganafi:]ともいう。竈の奥に石を3個並べてご神体として拝む。

ピラ<sup>レ</sup>カサー[pira<sup>レ</sup> 'kasa:] (名)

平麦。平麦を混ぜて作った粥の神酒。米と麦を混ぜて粥にしたもの。

「ピジャ<sup>レ</sup>[ 'piʧa] (名)

地名。ニージミチを東につきった東海岸一帯のことをいう。ムチーの時にショー<sup>レ</sup>「ガチワ<sup>レ</sup>[ʃo: 'gaʧiwa:] (正月用の豚肉をとる豚)を屠った。これを三、四軒で配分して塩漬けにすると、正月三日以降に食することが出来た。また、人が死ぬと翌日の葬式の日、ピジャより「イシナグ<sup>レ</sup>[ 'ʔiʃinagu] (小石)を取り、清めの「ウシュ<sup>レ</sup>[ 'ʔuʃu] (海水)をバケツに汲んできた。葬式の晩にはその家を清める儀式がある。二番座の、死者を寝かせておいた所を男女7名で7回まわる。先頭の人が弓矢を持ち、次の人は「ブーブー<sup>レ</sup>[ 'bu:bu:] (小板に縄を結び、振り回してぶんぶん鳴らすもの)を持つ。以下の人は小板を打ち鳴らす。真ん中にいる人は「マブルメー<sup>レ</sup>[ 'maburume:] (葬式の晩に、死体を安置しておいた所に置く米飯。それを中心にヘーフーハリフーの儀式が行われる)と杖を持っている。その人を囲んで7回まわり、潮水を撒く。7回まわったらマブルメーの前にいた人が台所から出てきて杖をつついて、それを置き、最後尾になって7名ともにボーンキヤーまで行く。板を打ち鳴らしつつ、前方の人がヘーフーと唱え、後方のひとがハリフーと唱えながら歩いて行く。この一行に遭遇しないように村人達は戸締りをする。先頭の人弓を持って歩く。ボーンキヤーに着くとブーブーを振り回して鳴らし、死者の霊を祓い、持参したものをそこに打ち捨てて家に帰る。

「ピジャイサン<sup>レ</sup>ニ<sup>レ</sup>[ 'piʧaisan<sup>レ</sup> ni] (名)

平たく盛った二重ねのンバイ。米飯。

「ピ<sup>レ</sup>ヒヤーイ<sup>レ</sup>[ 'p<sup>レ</sup>ʰja:i] (名)

日照り。旱魃。「ピ<sup>レ</sup>ヒヤーイヌ<sup>レ</sup> バーイヤ<sup>レ</sup> ミリクミヤー<sup>レ</sup> バン<sup>レ</sup> スウティル<sup>レ</sup> 「クミタスィガ<sup>レ</sup> ミラー<sup>レ</sup> ツタイ<sup>レ</sup>「ナー<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup> ウティー<sup>レ</sup>「クトウ<sup>レ</sup> バン<sup>レ</sup> スウ<sup>レ</sup>ティン<sup>レ</sup> ドウヌ<sup>レ</sup> 「バンヌ<sup>レ</sup> ツチ<sup>レ</sup> 「グキ<sup>レ</sup> ミタスン<sup>レ</sup>チ<sup>レ</sup> 「ピマ<sup>レ</sup> クワ<sup>レ</sup>ティ<sup>レ</sup> チューユル<sup>レ</sup>「ナー<sup>レ</sup> ハカ<sup>レ</sup>イン<sup>レ</sup> バーン<sup>レ</sup> アタ<sup>レ</sup>「スアー<sup>レ</sup>[ 'p<sup>レ</sup>ʰja:inu<sup>レ</sup> ba:i:ja<sup>レ</sup> mirikumja: ʔ<sup>レ</sup>ban<sup>レ</sup> θu<sup>レ</sup> tiru<sup>レ</sup> 'kumi ta θi ga mira: ʔ<sup>レ</sup>tutai<sup>レ</sup> 'na: ru ʔ<sup>レ</sup>uti: 'kutu<sup>レ</sup> ban<sup>レ</sup> θu<sup>レ</sup> 'tin<sup>レ</sup> du:nu<sup>レ</sup> 'bannu<sup>レ</sup> tʃi<sup>レ</sup> 'guki mitasun<sup>レ</sup> ʔ<sup>レ</sup>tʃi<sup>レ</sup> 'pima kwa<sup>レ</sup> ti ʔ<sup>レ</sup>ʃu:juru<sup>レ</sup> 'na: ʔ<sup>レ</sup>haka<sup>レ</sup> 'im<sup>レ</sup> ba:n<sup>レ</sup> ʔ<sup>レ</sup>ata<sup>レ</sup> 'ra:] (旱魃<日照り>の時は、水汲みは順番をとって汲んだが、水は一滴ずつ落ちるので、順番をとっても自分の番が来て桶を満たそうと時間がかかって<暇を食って>、一晩中もかかる

ことがあったよ)。アン「スクトゥ」 ナサ「リーン キネーヤ」 ミリ「グラン」 アタ「スアー」  
[ʔanˈsukutuː nasaˈriːŋ kineːjaː miriˈguranˈ ʔataˈɾaː] (だから可能なく出来る  
>家庭は水タンクもあったよ)。ミリ「グラン」 アンヤーヤ ナナ「キネー」 ヤタル[mi  
riˈguraŋ ʔaŋjaːja nanaˈkineːː jataru] (水タンクのある家庭は7軒だった)。

「ヒャーイ」[ʔhjaːi] (名)

酢。芋の煮汁で造った酢。「ンムヌ」 「ハー」 「ハハジカラ ニチ ウン シン」 ハーミ「  
グワーカイ イッティ プフタ クーティ」 ハッコー 「シミータル」[ˈmmunu haː ʔ  
hʔaʔikara niʔi ʔuŋ ʃiʔ haːmiˈgwaːkai ʔitti pʔuta kuːtiː hakkoː ʃimiː  
taru] (芋の皮を剥いで、煮て、その汁を瓶に入れて蓋をしてから発酵させた)。

「ビンヌースウンヌー」[ˈbinnuː θu nnuː] (名)

8月10日の久高殿でおこなわれる「ユーマティー」[ˈjuːmatiː] (夕祭り) の祭祀で謡われる  
神歌。御殿庭でのユーマティーが済むと同じ場所でノロとウメーギ、スアムトゥ、ウンサ  
ク以上の巫女によるビンヌースウンヌーという「スイルル」[ˈθi ruːru] (スイルル。神謡)  
を歌いながら円舞をする行事が行われる。スアムトゥ (60歳~70歳の巫女) 以上は「ンチャ  
ティオージ」[ˈʔnʃatiʔoːʔi] (表に太陽と鳳凰、裏に月と牡丹が描かれた大きな扇) を右手  
に広げてかざし (翳し)、ウンサク (54歳~60歳の巫女) は左手に小太鼓、右手にばち  
(撥) を持ち、全員裸足である。外間ノロウメーギを先頭に外間ノロ、久高ノロ、スアム  
トゥと続いて、ウメーギ、両ノロがビンヌースウンヌーのティルルを一節毎に歌い、スアム  
トゥはこれをウイレ (復誦) しながら円陣を作り円舞する。ビンヌースウンヌーが済むと、  
待機していたヤジク (42歳~53歳の巫女)、ナンツ (30歳~41歳の巫女) ら全巫女が出  
場して、「グルイ」[ˈguruːi] (踊り) が歌い踊られる。グルイは沖縄本島でいう「ウシデー  
ク」[ˈʔufideːku] のことである。現在はノロ不在のため、「ビンヌースウンヌー」は省略され  
ている。

ブー「ブー」[buːˈbuː] (名)

木片や竹片、小板などを縄で結んで振り回し、ぶーぶーと鳴らして悪霊を祓うのに用いる  
葬具の一つ。

ブー「シンカ」[buːˈʃiŋka] (名)

神行事の供物を作る労働力としてを割り当てられる組 (仲間、組織、当番)。「賦役仲間」  
の義。村全体を10組に分割して当番制で作業を分担した。

フカマ「トゥン」[ʔukamaˈtuŋ] (名)

外間殿。久高島の氏神を祀ってある家。天神地祇を祀ってある。

「フカマニーツチュ」[ˈʔukamaniːtʃu] (固)

外間根人。

フ「カラ」ク[ʔuˈkaraːku] (名)

外間殿での共食儀礼。「アミル」シ[ˈʔamiruːʃi] (旧暦10月13日に徳仁港の7ヤルイで竜宮  
の神に豊漁祈願を行う祭祀祭祀) の祈願が済んだ後、ノロは帰宅される。外間殿では、外

間根人が外間ノロ、外間ウッチュ神を招待して共食儀礼を行う。ハ<sup>h</sup>ハーチ「ブン」[<sup>p</sup>Φa:ŋi<sup>h</sup> bug] (大きな脚の付いた、朱塗りの丸盆) に「ンバイ」[<sup>ʔ</sup>mbai] (米飯) とイラブチの「ウスドゥクイ」[<sup>ʔ</sup>usudukui] (刺身) 3 碗、ンナギヌ「シン」[<sup>ʔ</sup>nnaginu<sup>h</sup>ŋiŋ] (イラブーの汁) 1 碗、「ピジャイサン」ニ「<sup>h</sup>piŋaisan<sup>h</sup>ni」(平たく盛った二重ねの米飯。ンバイ) 1 碗、「マ」シュ「<sup>h</sup>ma<sup>h</sup>ŋu」(塩) 1 皿、「ミキ」[<sup>h</sup>miki] (神酒、現在は粥) 2 碗を盛って「ウ<sup>h</sup>フグイ」[<sup>ʔ</sup>upΦugui] (大庫裡) の大香炉の前に供える。その後に供物を下げて直会 (共食) をする。

フク「ミン」[Φuku<sup>h</sup>miŋ] (名)

テンプラの一種。魚や人参をたね<種>にして油で揚げたもの。

フクン「キリ」[Φukun<sup>h</sup>kiri] (数)

九切れ。ムム「ハメー」[mumu<sup>h</sup>hame:] (旧暦九月におこなわれるイラブー漁の感謝祭) でノロ、ニーッチュ、ニーガンに出されるウブンに、ンナギ (イラブー) を九切れずつ立てて盛る料理の作法。

フ「クンティ」グンジュー「<sup>h</sup>Φu<sup>h</sup>kunti<sup>h</sup>gunŋu:」(名)

49歳の誕生祝 (生年祝い)。フ「クンティ」グンジューヌ「<sup>h</sup>ウイエー」[Φu<sup>h</sup>kunti<sup>h</sup>gunŋu:nu<sup>h</sup> ʔuije:] (49歳の生年祝い)。冠婚葬祭や61歳、73歳の生年祝いは招待なし。村中の人が招待なしで祝うことになっている。その他は招待による参加となる。

フクン「ティリ」[Φukun<sup>h</sup>tiri] (数)

九つ。九個。「九粒」の義か。

フ「スイーン」[Φu<sup>h</sup>θi:ŋ] (動)

着せる。「リキン」フ「スイーン」[<sup>h</sup>rikiŋ Φu<sup>h</sup>θi:ŋ] (着物を着せる)。フ「スイラン」[Φu<sup>h</sup>θi raŋ] (着せない)。フ「スイタ」ン「<sup>h</sup>Φu<sup>h</sup>θi ta<sup>h</sup>ŋ」。フ「スイーブシャン」[Φu<sup>h</sup>θi :buŋaŋ] (着せたい)。「リキン」フ「スイーティ」ン「チャー」キ「ハハリー」ンヨー「<sup>h</sup>rikiŋ Φu<sup>h</sup>θi :ti<sup>h</sup>n ʔa:ki<sup>h</sup> pΦari:ʔjo:] (着物を着せてもすぐ脱ぐよ)。「ヤーガ」フ「スイーヤ」ワヌン「<sup>h</sup>Φu<sup>h</sup>θi :ja<sup>h</sup> wanuŋ Φu<sup>h</sup>θi :ra:] (君が着せたら僕も着せるよ)。「ハー」フ「スイリバ」[<sup>h</sup>ha: Φu<sup>h</sup>θi riba] (早く着せなさい<着せれ>よ)。

「プシングワーン」[<sup>h</sup>pʰuŋŋwa:ŋ] (名)

運氣祈願。家族の運氣願い。健康祈願の一つ。これは「スイーンユタ」[<sup>h</sup>θi :ŋjuta] (家庭レベルの祈願を担当する巫女。各家庭によって決まっていた) が祈願してくれた。謝礼として、「ソーミンチャンプルー」[<sup>h</sup>θo minŋŋampuru:]が出された。

フ「トゥ」キ「<sup>h</sup>Φu<sup>h</sup>tu<sup>h</sup>ki」(名)

仏。仏様。「ユー」スイリーンショータクトウ「<sup>h</sup>フトゥキ」ナリンショーリ「<sup>h</sup>ju: θi ri:ŋfo:takutu<sup>h</sup> Φu<sup>h</sup>tuki<sup>h</sup> nariŋfo:ri」(お亡くなりになったので、成仏なさって<仏様になって>ください)。

「プナダマ」[<sup>h</sup>pʰunadama] (名)

船霊。船霊さま。



## 「フバワ」ク「Φubawa」ku（名）

通称は「フバヤク」[「Φubajaku」という。旧暦11月の「ミーンニー」[「mi:nni:」（干支の壬戌の日）に、二日間に亘り、各御嶽でノロ以下イザイホーに参加した全巫女が参加して御嶽を回り、木を切る許可を神に祈願して、御嶽の樹木の下枝を落としたり、清掃をした後、「スイルル」[「θi ruru」（ティルル。神謡）を謡う神事。この神事の後にしか各家の庭木の下枝の剪定は出来なかった。島の畑地は島民の総有であり、一組10戸単位の10組に分割されているから、祭祀に要する神酒はこれらの各組から割り当てられた順番で祭りの際に供出される。フバヤクの初日、当番の組から供出された神酒は外間ノロ家に集められる。当日の朝、外間ノロ家に両スォールイが来て、ノロ立会いの上、供出された神酒、「スアルマーミキ」[「raruma:miki」（タルマー神酒）を新スォールイ（ウットウスォールイ＜弟スォールイ＞という）が量って別の容器（ポリバケツ）に移し入れる。そこへ新スォージヤクになった二人が平服で来て、スォールイが量った「スアルマーミキ（タルマー神酒）からミーアムトゥへ2 椀ずつ分けて届けられる。本来はナンチュから割り当てられた者が行うが、イザイホーは平成2年の庚午のイザイホーから途絶えているのでナンチュの神職者がいない。それ故スォージヤクに就任する巫女が代行したのである。ミーアムトゥではスアルマーミキを供えて祈願がなされる。外間ノロがヌル神に神酒を供えて祈願し、火の神、床の神にも同様に祈願をする。以下「シュリユリタ」[「furijurita」（40歳代後半から50歳代前半の巫女。スォージヤクの補助をする神職者）の祈願も外間ノロ家、久高ノロ家、久高殿で執り行われる。次に竿の先に鎌を固定して結わえ、樹木の枝打ちをする儀式が行われ、スベーラキ（徳仁港の上の御嶽）へ参る。新スォージヤクで年齢が上の二人が鎌を竹竿の先に固定して括りつけたものを持参している。これはクバ（びろう＜蒲葵＞）の葉や樹木の枝打ちをするためである。道行はノロなどのクニガミを先頭に、スアムトゥ、ウンサク、シュリユリタの順である。スォージヤクの竿、鎌持参の二人はノロー行の先になる。スベーラキはノロ、根神のウプフティシジ（祖霊）の鎮座ましますところで、スアキマーイ（御嶽回り）には、このスベーラキが起点となる。スベーラキで、スォージヤク達は予め用意しておいたクバの葉を腰に巻き、櫛掛けをする。スォージヤクの支度が出来たところで、外間ノロの音頭のもと、全員スベーラキに向かって合掌祈願し終わるとスォージヤク達は先ずスベーラキのアダンの葉を払い落として足早にスベーラキを出る。そこでスォージヤクは二手に分かれる。（1）シャミチ（下道）。西側の海沿いの道を真直ぐフボーウタキに抜けて、カベールのクバ林まで行き、ノロー行の到着を待ってアグルラキでウイミチの一行と合流し、アグルラキを清掃した後フボー御嶽へ行く。（2）ウイミチ（上道）。東側の海沿い道を通り、イシキ浜を掃除（アダンの葉を払うだけ）してアグルラキまで行き、シャミチの一行とアグルラキを清掃し、ノロー行が到着する前にフボー御嶽に先回りする。（3）ノロー行の道行き。スォージヤク等がスベーラキを出発した後、ノロ、ウメーギ、スアムトゥ、シュリユリタ等は行列をなして道行きが行われる。久高小中学校正門前を通り、外間殿へ行き、そこで祈願してからフボー御嶽前を通り、カベールへ行き、外間ノロ

の音頭で全員合掌し、アグルラキへ行く。そこでは巫女は外間側、久高側に分かれて並び、予めスォージヤクらがアグルラキから取って用意したクバ（蒲葵）の葉を外間側と久高側の隣同志で持ち、少し体を左右に揺すりながら、最初はイビ（御嶽の神の在所。霊石のある聖域）に向かって、スィルル（ティルル＜神謡＞）を歌う。外間ノロウメーギを中心に外間ノロ、久高ノロらが先に歌い、他の巫女達がウイレ（復誦）をする。歌っている途中で外間ノロウメーギが「はい」という合図を発すると全員ぐると向きを変え、東方に向かって続ける。スィルルが終わると全員イビに向かって合掌祈願を行い、フボー御嶽へ移動する。一行がフボー御嶽に到着する前に、スォージヤク達が先回りしてフボー御嶽の草刈などの清掃をする。それが終わった頃にノロ一行が到着する。巫女達の各自の座る場所は定まっている。外間ノロがイビに向かって合掌祈願し、全巫女これに合わせて合掌する。終わるとスィルル（ティルル）が歌われる。それが終わると新スォージヤク達が神酒をイビの前に供える。外間ノロが祈願し、それが済むと70歳になったスアムトゥ（タムトゥ）がテーヤク（退役）になるので、家人が持参したお菓子や蜜柑をスォージヤクが皆に配る。この振舞いが一通り済むと、巫女の何人かがテンポの早いカチャーシー歌を歌い、全員拍手で囃し立てる。先ずテーヤクの巫女等が踊り、ノロが続き、全巫女が踊ってテーヤクを祝う。フバワク二日目。朝早くスォージヤク達が外間殿前に参集し、年上の二人は竿、鎌を持ち、他の4名も草刈り鎌を持参している。外間殿に向かって合掌礼拝した後、中外間（屋号）裏→クンプチ用。外間殿裏山→ウドウンミヤ用（御殿庭用）。大里家裏山→ハンジャナ山用。ウブンディ山→ウブンディ山用の順に、年上のスォージヤク二人がクバ（蒲葵）の葉を竿鎌で切り落とす。それを年下のスォージヤクが各祭場に置く。最初の中外間裏山で切り落としたクバ（蒲葵）の葉を帯にしていた。ウタキ（御嶽）、拝所回り。午前8時過ぎ、ノロ以下全巫女が大里家前にあるハンザナヤマの祭場へいく。スォージヤク達が準備したクバの葉を取り、外間側、久高側のノロ、巫女達が隣同志でそれぞれ持ち、ウメーギ、外間ノロ、久高ノロがスィルル（ティルル。神謡）を歌い、巫女達がウイレ（復誦）をする。それからクンプチとウブンディ山でも同様にスィルルが歌われる。最後のウブンディ山での神事が終わると一行はフボー御嶽へ向かう。フボー御嶽では祈願があるだけで、午前中に3箇所でのスィルルとフボー御嶽参りは終了し、神職者たちは一応帰宅して着替えて御殿庭の祭場に参集する。ウプフヌシガナシーの振舞いを受ける。ウプフヌシガナシーの振舞い。この振舞いを「ウイキーマカネー」という。御殿庭のハンアシャギの前にノロ以下の巫女達へお神酒がスォールイの桶から外間村頭の桶、久高村頭の桶と3回にわたり、全員にお椀一杯ずつ振舞われる。接待役はスォージヤクである。次にスクガラスの振舞いが行われる。このスクガラスは6月に、スォールイに献上されたものを、前任スォールイがこの日のために塩漬けにしてあったものである。スクガラスも各自が用意してきたクバの葉の容器に入れる。スクガラスを配る前に、昨日各家からスォールイが集めた野菜が配られ、その後一掴みほどのスクガラスが入れられたのである。スクガラスが配られると両ノロと根神、ウメーギはその場で合掌して祈願する。このスォールイガ

ナシーの振舞いは「ユイムンヌゲー」(スクの大漁祈願)である。最後にスォールイが各戸から集めたお金で買ったお米のウブンが出される。スォージヤクが新任スォールイの家で準備したのを運んでくる。ウブンの振舞いを受けるのは、外間、久高両ノロ、根神、外間ノロウメーギ、根人、ハニマンガナシー、アカツミー、スォールイ(2名)、計9名の神職者である。現在は塩サバを両ノロ、根神、根人に対しては7切れ、その他には5切れで振舞うのである。しかし今回は、スォールイは存在しないので、その振舞いもない。

「フバリカ」サ[<sup>ɸ</sup>ubarikaˈsa] (固)

「フボー」ウタキ[<sup>ɸ</sup>uboːˈʔutaki] (クボー御嶽)の中の拝所の一つ。今帰仁へのお通しの祈願が行われる拝所。ヤグルガーを含めていう。クバヅカサと表記される。

「フボーリ」ー[<sup>ɸ</sup>uboːriː] (名)

久高島の男子。「フバ島<クバ島>の人」の義。「フボー」[<sup>ɸ</sup>uboː] (久高島、津堅島)からきたことばという説がある。／フボーリーガ アイズハタ イトゥハキティ タビミソーリ／(久高人の行くところは 絹布を敷いたように波は静かにさせて下さい)「ヒー」スァチ[<sup>ɸ</sup>iːˈɾaʃi] (大漁祈願祭)の「ティルル」(『神々の原郷 久高島 下巻』より)。

「フフルワーシュン」[<sup>ɸ</sup>ʔuruwaːʃuŋ] (動)

成長させる。そだてる。ガン「ジュー」スァ 「フフルワーシュン」[ganˈtʃuːˈɾa <sup>ɸ</sup>ʔuruwaːʃuŋ] (健康に育てる<成長させる>)。「フフルワースァン」[<sup>ɸ</sup>ʔuruwaːʃaŋ] (育てない)。「フフルワーチャン」[<sup>ɸ</sup>ʔuruwaːʃaŋ] (育てた)。ワー「ガ」ル 「フフルワーチャル」[waːˈgaˈru <sup>ɸ</sup>ʔuruwaːʃaru] (私が育てた)。「フフルワー」チ 「ミーン」[<sup>ɸ</sup>ʔuruwaːˈtʃi <sup>ɸ</sup>miːŋ] (育ててみる)。イク「タイ ヤティ」ン 「フフルワー」シュン[ʔikuˈtai jatiˈm <sup>ɸ</sup>ʔuruwaːʃuŋ] (何人でも育てる)。「フフルワーシヨースァンタン」[<sup>ɸ</sup>ʔuruwaːʃijoːɾantaŋ] (養育できなかった。育て得なかった)。「ワーガ」 「フフルワーチカラ ヤーネー」 「ゲー」シュスァー[ˈwaːga <sup>ɸ</sup>ʔuruwaːʃikara jaːneːˈ geːˈʃuɾaː] (私が育ててから君にやるさ)。「ゲー」スァッタン[ˈgeːɾattaŋ] (与えられた。遣られた。嫁に遣られた)。「ヤー」フフルワスイバ[ˈjaː <sup>ɸ</sup>ʔuruwa θi ba] (君が育てなさい)。

フワーチ「ブン」[ʔaːʃiˈbuŋ] (名)

丸いお盆。

「ブン」[ˈpʊŋ] (名)

棺箱。死者を納める棺。「クワンバ」ク[ˈkwambaˈku] (棺箱)ともいう。「舟」の義。昔は人が死ぬと、51歳以上の男の人が集まって棺箱を作った。死人が出ると、その日の中に与那原へ板を買いに行った。昭和19年に久高島の人全員沖縄本島北部の金武村あたりに移住させられ、敗戦後の昭和21年5月ごろに全員帰島させられた。昭和22年に福治家の祖母が亡くなった際、棺箱を作る板に困ったが、床の間の裏座の床板は釘を打ってないことに気づき、これを利用して作ったという。病気で死が予想される場合、与那原へ行って板を調達してきたという。

ヘー「イン」[heːˈiŋ] (動)

帰る。ヘー「ラン[he:ʔrag] (帰らない)。ハー「ヘーッ「ティ フー「バ[ʔha: ʔhe:tʔti  
 Φu:ʔba] (早く帰って来いよ)。ヘーイ「ブスアン[he:iʔburan] (帰りたい)。ヘー「イン  
 チョー「 グラン「トゥーティ「 プノー ンギヤスア「ラン[he:ʔinfo:ʔ guranʔtu:tiʔ  
 puno: ɲgjaʔraʔrag] (帰る人がいなくて船は出港できない<出されない>)。

ヘー「スウナイ[he:ʔθu nai] (名)

隣近所。ヘー「スウナイツチャー「 ショー「コー ヤイビークトゥ「 イモーリ ッ「チュー  
 ンサー[he:ʔθu naitʃa:ʔ ʃo:ʔko: jaibi:kutuʔ ʔimo:ri tʃʊ:ɲɡra:] (隣近所へは、法  
 事<焼香>ですのでいらっしゃってください、と言うよ)。昔は子供がそれを伝える役目  
 であった。61歳以上の生年祝いとミー「ビキ[mi:ʔbiki] (結婚祝い) は島中で祝う。85歳  
 の生年祝いは久高島ではしなかった。

「ヘーナーガー「キ[ʔhe:na:ga:ʔki] (名)

神謡。「スイルル[ʔθi rururu] (神謡。ティルル) の一種。ウムイの一種。

「ハヘーン「シ[ʔPΦe:ɲʔʃi] (名)

地名。「フマ「カシマ[ʔΦumaʔkaʃima] (フマカ島) の近くにある干瀬。女性たちが蛸漁  
 に行くところ。

ヘー「フー「 ハリ「フー[he:ʔΦu:ʔ hariʔΦu:] (名)

葬式の晩に行われる悪霊祓いの民俗行事。葬式の晩の8時頃から親戚の者が7名で、ヘー  
 「フー「 ハリ「フー[he:ʔΦu:ʔ hariʔΦu:]と唱えながら死者の霊のお祓いを行った。式  
 の始めに、葬式のあった家の戸を締め切って板切れを打ち鳴らして、その家を7回まわり、  
 祓い清めて中道のボーン「キヤー[bo:ɲʔkja:] (地名) まで板切れを打ち鳴らしながら行く。  
 そこでブーブーを振り回して鳴らし、悪霊祓えをして、ヘー「フー「 ハリ「フーを唱え、  
 板切れや弓矢、ブーブーなどの葬具類をそこに打ち捨てて帰る。ヘー「フー「 ハリ「フーと  
 唱えると自然に笑が出るのが常であったという。ボーンキヤーへ行く道中、先頭の人弓  
 矢を番えて歩き、続く人々は板切れを打ち鳴らした。先頭の人ヘー「フーと唱えると、  
 続く人たちがハリ「フーと唱えた。一般の家庭ではこの行列に会うのを恐れて早くから戸  
 締りをした。

ホー「チャー[PΦo:ʔʃa:] (名)

ほうちょう (包丁)。ホー「チャー[ho:ʔʃa:] (包丁)、ハ「タナ[ha:ʔtana] (包丁。刀) と  
 もいう。ホー「チャー[PΦo:ʔʃa:]を多用する。「ヤマガタナ[ʔjamagatana] (山刀) は木  
 を切る際に用いるもの。ホー「チャーシャーマ イユ シジャシュ「ン[PΦo:ʔʃa:ʃa:ma  
 ʔiju ʃiʃaʃuʔɲ] (包丁で魚をさばく<捌く>)。「マラチャシャーマ イユ シジャシバ[ʔ  
 maraʃaʃa:ma ʔiju ʃiʃaʃiba] (俎板で魚を捌きなさい)。

「マーキー[ʔma:ki:] (名)

丸木船。松の木を削り貫いて作った舟。サバニが導入される以前の舟

「マーチ「 アイ「ピランミヤー[ʔma:ʃiʔ ʔaiʔbirammja:] (連)

お亡くなりになりましたねえ。人が死んだときに述べるお悔やみの文句。お悔やみを受け

た方は、アン「スアビークトゥ」[ʔanˈrabi:kutu]（そのようになってしまいました）と答えるのが常であった。

「マーミキグワー」[ˈma:mikigwa:]（名）

大漁祈願祭。旧暦10月中旬の「ミンニー」[ˈminni:]（干支の壬の日）に外間殿、久高殿において、スアムトゥ以上の神女（巫女）たちが参加して執り行われる祭祀（スイリガ「プー」[θi rigaˈpɸ:] 御願結び、感謝祭）。旧暦7月中旬に執り行われる「ウプフマーミキ」[ˈʔuːpɸuma:miki]（大漁祈願祭。＜御願立て＞）と対をなす祭祀である。「マーミキグワー」の前日、「ニーンスウキ」ヌ 「ウグワン」[ˈni:n θu kiˈnu ˈʔugwaŋ]（子の時の御願）が執り行われる。午後六時より外間ノロ家の「ウプフグイ」[ˈʔuːpɸuˈgui]（代々のノロを祀ってある香炉の前。「ヌルシン」[ˈnuruʃiŋ]＜代々のノロの守護神＞を祀ってある所）の前で祈願される。ノロのスォールイ賄いの行事である。ノロとスォールイのスウイケー（盃事）、シチョーザとスォールイのスウイケー（盃事）が執り行われて大漁祈願が行われるもの。

「俵の口開け」は、弟スォールイが5キロ入りの米袋を兄スォールイ宅へ持参し、兄スォールイも同じく米5キロを出し、その中から9合バナを両アムトゥへ捧げる。米3合は両スォールイのウブン用、2升は御神酒のウケーメー（お粥）用、米3合はフボー御嶽へ、1合はウミリヒャーミ（ウティギビャーシ＜祈願の際に新しく供物を添えるもの＞）用とし、残りは両スォールイ家で分ける。ウコー（線香）は両スォールイより6束出され、外間殿、久高殿で祈願される。外間殿の「スアムトゥミャー」[ˈramutumja:]（60歳以上の神女＜巫女＞がノロのお供をして座る所＜庭＞。外間殿の向かいにある）で神酒を頂く儀式が行われる。ウヤウンシャク（3名）がアシクム（朱塗りの脚付きの酒杯台）でウミキ（御神酒）を外間ノロ、久高ノロ、根神の順に捧げる。トーウンシャク（4名）はお膳に載せた神酒をノロに捧げた後、60歳以上のスアムトゥに捧げる。その後、男性神職者（スォールイとアカッチュミー）に神酒を捧げてフボー御嶽へ行き、パハナグミ（花米）とウユー（お粥。神酒の代用）で祈願する。マーミキグワーの晩にはスォールイの「サシプゲー」ル[ˈraʃipugeːˈru]（神職者交代）の儀式が旧暦11月頃に執り行われる。

「マイクスウー」ヌ 「ンギ」トゥー「ティ」[ˈmaiku θuːˈnu ŋgiˈtuːˈti]（句）

精液を垂らした者が。「精液と糞を同じように表現したもの」。子供が親に反抗するときに叱られる言葉。罵詈雑言。「ヤーシャクヌ ムン」ヌ 「マイクスウー」ヌ 「ンギ」トゥー「ティ」[ˈja:ʃaku:nu munˈnu ˈmaiku θuːˈnu ŋgiˈtuːˈti]（お前程度の者が、糞を垂れかけていて＜糞垂れ奴めが＞）。

「マジムン」[ˈmaʃimʊŋ]（名）

まじもの。魔物。化け物。「マジムンネー」 スイン「カッ」ティ 「ンジャン」[ˈmaʃimʊnneːˈ θi ŋˈkatˈti ˈnʃaŋ]（魔物＜まじもの＞に引張られて行った）。「マジムン」ヌ 「ンギ」タン[ˈmaʃimʊnˈnu ŋgiˈtaŋ]（魔物＜まじもの＞が出た）。「フマー」 ユー「マジムンヌ」 「ンギーン トゥ」クマ「ヤル」[ˈɸumaːˈ juː ˈmaʃimʊnnuˈ ŋgi:n tuˈkumaˈ jaru]（此処はよく魔物＜化け物＞が出るところだ。）。ヤナ「ムンネー マヤー

スアツ<sup>ㇿ</sup>ティ 「ピジャ<sup>ㇿ</sup>ティ 「スォー<sup>ㇿ</sup>ティ イ<sup>ㇿ</sup>カッタン[jana<sup>ㇿ</sup>munne: maja:rat<sup>ㇿ</sup>ti  
 「piɕa<sup>ㇿ</sup>ti 「so:<sup>ㇿ</sup>ti ʔi<sup>ㇿ</sup>kattag] (魔物に化かされて＜迷わされて＞ピジャ＜地名＞に連れ  
 て行かれた)。

「マティー[<sup>ㇿ</sup>mati:] (名)

祭祀。「祭り」の義。「マティー<sup>ㇿ</sup> チャン[<sup>ㇿ</sup>mati:<sup>ㇿ</sup> ɕʰag] (祭りをした)。「マティー  
 スアビタン[<sup>ㇿ</sup>mati: ɾabitag] (祭りをしました)。チュトゥ<sup>ㇿ</sup>「ジューヌ マティー[ɕʰutu<sup>ㇿ</sup>  
 ɕu:nu mati:] (1年間＜1年中＞の祭り＜祭祀＞)。チュトゥ<sup>ㇿ</sup>「カイ マティーヤ<sup>ㇿ</sup> イ  
 ク<sup>ㇿ</sup>「ケーン アガ[ɕʰutu<sup>ㇿ</sup>kai mati:ja<sup>ㇿ</sup> ʔiku<sup>ㇿ</sup>ke:ŋ ʔaga] (一年に祭祀は何回あるか)。  
 イク<sup>ㇿ</sup>「ター<sup>ㇿ</sup> アイ<sup>ㇿ</sup>「ガ[ʔiku<sup>ㇿ</sup>ta:<sup>ㇿ</sup> ʔai<sup>ㇿ</sup>ga] (いくつあるか)。「マティー<sup>ㇿ</sup> スアビタン[<sup>ㇿ</sup>  
 mati:<sup>ㇿ</sup> ɾabitag] (祭りをした)。

マブッチ<sup>ㇿ</sup>「マティー[mabutɕi<sup>ㇿ</sup>mati:] (名)

麦の穂祭り。ソー<sup>ㇿ</sup>ジ「マティー[so:ɕima<sup>ㇿ</sup>ti:] (精進祭り) ともいわれ、麦の成熟を祈願す  
 る祭祀。旧暦1月中旬の「ミーンニー[<sup>ㇿ</sup>mi:nni:] (壬) の日に執り行われる。ノロ、ニー  
 ガン、ウッチュガミ、ウヤウンシャクがヤグルガーで精進潔斎し、外間殿、久高殿で祈願  
 する。初日は「アサマティー[<sup>ㇿ</sup>ʔasamati:] (朝祭り) と「ユーマティー[<sup>ㇿ</sup>ju:mati:] (夕祭  
 り) が行われ、二日目は「ユーマティー[<sup>ㇿ</sup>ju:mati:] (夕祭り) だけ行われるが、現在はア  
 サマティーになっている。失業対策事業の作業との関係で朝祭りに変更された。初日のア  
 サマティー (朝祭り)、ユーマティー (夕祭り) は外間殿、久高殿で行われ、二日目のア  
 サマティー (朝祭り) も外間殿、久高殿で執り行われる。マ<sup>ㇿ</sup>「ブツ<sup>ㇿ</sup>「チ[ma<sup>ㇿ</sup>but<sup>ㇿ</sup>ɕi]は「麦  
 を炊いて作ったご飯」のこと。現在は米飯で代用だれている。

マブル<sup>ㇿ</sup>「メー[maburu<sup>ㇿ</sup>me:] (名)

葬式の晩にに死者を寝かせてあった所に置く米のご飯。

「マヤースァリン[<sup>ㇿ</sup>maja:rarig] (動)

ばかされる (化される。魅される)。惑わされる。「マヤースァッタン[<sup>ㇿ</sup>maja:ɾattag] (惑  
 わされた)。マヤー<sup>ㇿ</sup>「スァランタン[maja:<sup>ㇿ</sup>ɾarantag] (惑わされなかった)。マヤー<sup>ㇿ</sup>「スァ  
 リー<sup>ㇿ</sup>「ヤ デー<sup>ㇿ</sup>「ジ ヤル[maja:<sup>ㇿ</sup>ɾari:<sup>ㇿ</sup>ja de:<sup>ㇿ</sup>ɕi jaru] (惑わされたら大変だ)。マヤー<sup>ㇿ</sup>  
 「スァリヤッスァン[maja:<sup>ㇿ</sup>ɾarijaɾrag] (惑わされやすい)。

「マラチャ[<sup>ㇿ</sup>maratɕa] (名)

まないた (組板)。「マラチャカイ イ<sup>ㇿ</sup>ユ シジャ<sup>ㇿ</sup>「シバ[<sup>ㇿ</sup>maratɕakai ʔi<sup>ㇿ</sup>ju ɕiɕa<sup>ㇿ</sup>ɕiba]  
 (組板で魚を捌きなさい＜下ろしなさい＞)。

「マンスァン[<sup>ㇿ</sup>manrag] (名)

「満産」の義。おしちや (御七夜)。子供が生まれて7日目の祝い。マンスァン<sup>ㇿ</sup>「ウイエー  
 [manrag<sup>ㇿ</sup>ʔuije:] (満産祝い。御七夜)。ンギヤナ<sup>ㇿ</sup>「ルネー[ŋgjana<sup>ㇿ</sup>rune:] (苦菜を糸のよ  
 うに細く刻み下ろしたものを魚の刺身と和えたもの) を出して祝った。このンギヤナ<sup>ㇿ</sup>「ドゥ  
 ネー[ŋgjana<sup>ㇿ</sup>dune:] (苦菜と魚の刺身の和え物) は久高島の祝儀には欠く事のできない  
 御馳走である。満産の祝い歌には、御前風の曲にのせて次のようにうたった。イワユ ハ

イアキティ アカシャ ハイウガリ タマフガニ ナシグワ ハハユ ウガリ [ʔiwaju haiʔakiti ʔakaja haiʔugari tamaɸugani naʃigwa hahaju ʔugari] (岩を掻き開けて光明をおし拝み、玉黄金の子供は母親をおがむ)。ユビナチャル ナシグワ ナナチグル ナリバ ワーヤヌ スバナカイ ヌインマタティティ [jubinaɸaru naʃigwa nanaʃiguru nariba wa:janu subanakai nuimma taititi] (昨夜産んだ子供が七歳ごろになると、我が家の側に乗り馬をしたてる)。

「ミー」アムトゥ [ʔmi: ʔamutu] (名)

外間ノロ家、久高ノロ家、外間根家 (外間殿を含) も御三家の名称。島の祭祀の主祭場

「ミー」ウプフグイミンナカ [ʔmi: ʔupɸuguiminnaka] (名)

「ミー」アムトゥにある大庫裡の大香炉。外間殿の「ミー」ウプフグイミンナカは特に重要で、久高島のすべての神々が降臨される斎場といわれている。外間殿の大庫裡には、「オーレーヌ ハンジャナシ」[ʔo:re:nu hanɕanaʃi:] (太陽神)、「マチヌ シュラガナシー」[maɸi nu ʃuraganaʃi:] (月神)、「アマキヨヌ ハンジャナシー」[ʔamakjonu hanɕanaʃi:] (島造りの神、アマミキヨ神)、「ヒャクハタチマンヌ ハンガナシー」[ɕakuhataɸi mannu hanganaʃi:] (百畑地方照乃神。植物の神)、「ハリマンガナシー」[harimanganaʃi:] (健康の神) が祀られている。

ミー「ウティ」[mi: ʔuti] (名)

臨終。「身落ち」の義か。昔は赤子が臨終を迎える時、台所へ連れていったという。

「ミー」ク [ʔmi: ku] (副)

すぐ。間もなく。ただちに。じきに。即座に。「アラー」 ミー「ビキ スシトゥ」 ミーク  
パハラ「ルーツチスアー」[ʔara: ʔ mi: ʔbiki sufitu ʔ mi: ku ɸara ʔrutɕiɾa:] (あれは結婚すると、すぐ妊娠したそうだ)。

ミースウン「ダアカ」リー [mi: θu n ʔdaʔaka ʔri:] (名)

離婚。「夫婦別れ」の義。「アラ」ー ヒ「ティラッタツチスアー」[ʔara: ʔ ɕi ʔtirattatɕiɾa:] (あれ<彼女>は捨てられたそうだ。離婚されたそうだ)。昔は手紙一本で離婚させられたこともあるという。ヒ「ティラッタン」[ɕi ʔtirattag] (捨てられた) ともいう。

「ミー」ビ「キ」[mi: bi ʔki] (名)

結婚。普通は「ミー」ビ「キ」という。「ミー」ビ「キ シュ」ン [ʔmi: biki ʃu ʔŋ] (結婚する)。昔は親同士で子供の結婚を決めた。14、5歳になると親が、「ヤー」 スアーガ 「マシーガ」[ja: ʔ ɾa: ga ʔmaʃi: ga] (君は誰がいいか) と聞いて口約束をしておく。「フーイ」ガ 「ンジャン」[ɸu: i ʔga ʔnɕaŋ] (嫁を貰いに<乞いに>行った) といって、親か親戚の者が嫁を貰いに行き、先方が承諾した場合には、キ「ラッタン」[ki ʔrattag] (呉れられた。嫁に呉れられた) となり、いいなずけ (許婚) となった。兵役の関係もあり、20歳前後になると結婚式を挙げた。ミカ「シャー」 ジュー「シチハチカイ」 ミー「ビキ チャツチスアー」[mika ʔja: ʔ ɕu: ʔɕiɸihaɸikai ʔ mi: ʔbiki ɕatɕiɾa:] (昔は17、8歳で結婚したそうだ)。ミカ「シャー」 ピ「ヒー」タイヌ 「クワンケーン」 アクトゥ 「ニジューマングララ」

ミー「ビキ スンチュン グタツチスアー[mikaʼja:ʼ ʰΦi:ʼtainu kwaŋke:jʼ ʔakutu  
ʼniŋu:mangura:raʼ mi:ʼbiki sunʃuŋ gutatʃi:ra:] (昔は兵隊の関係もあるから二  
十歳ごろから結婚する人もいたそうだ)。

ミービキアン「ティキヤー[mi:bikiʔanʼtikja:] (名)

結婚祝いのために、結婚式の前日に親戚や本人及び友人達20人ほどの者が二艘のサバニに  
分乗して追い込み漁の網をおろして漁獲すること。これで漁獲した魚を花嫁、花婿の両家  
に分配し、「ンギャナドゥネー[ʼŋgjanadune:] (ニガナの和え物) を作って結婚式のご馳  
走にした。

ミー「ビキアンマー[mi:ʼbikiʔamma:] (名)

花嫁。アン「ター ヤー「チ ミー「ビキ アン「マーガ「 チャッチ「スアー[ʔanʼta: ja:  
ʼʃi mi:ʼbikiʼ ʔamʼma:gaʼ ʃatʃiʼra:] (あそこの家に花嫁が来たそうだ)。イッ「ター  
[ʔitʼta:] (君達)。ワッ「ター[watʼta:] (私たち)。「ナー[ʼna:] (あなた)。ナッ「ター[  
natʼta:] (あなた方)。「ヤー[ʼja:] (君。お前)。「ヤーシャク「ン 「ムンヌ[ʼja:ʃakuʼm  
ʼmunnu] (お前ごときものが〜)。

ミービキスウル「キヤー[mi:biki θu ruʼkja:] (名)

結婚衣裳。「結婚着物」の義。一種の結納返しとして花嫁側から花婿側に納められた。「  
グー[ʼgu:] (麻) で織った着物とウ「ビ[ʔuʼbi] (麻帯) の一揃いを花婿のために用意した。  
スル「キヤー[suruʼkja:] (麻糸で織った着物)。花嫁側のミー「ビキンチュ[mi:ʼbikinʃu]  
(花嫁側の女性の仲人) が結婚式の日花婿方へ持参した。ミー「ビキスウルキヤー「 スウ  
ルキ「タン[mi:ʼbiki θu rukja:ʼ θu rukiʼtag] (結婚式の衣装<着物>を届けた)。この  
風習も昭和10年頃まで続いていた。その後は途絶えてしまっている。

「ミービキ シュ「ン[ʼmi:biki ʃuʼŋ] (連)

結婚する。昔の結婚式は次のようになされていた。結婚式の二三日前になると花嫁になる  
人は実家から出て親戚や友人宅へ行き、そこに宿泊する。結婚式当日、花嫁が花婿の家へ  
行く時は、日没後に友人7名ほどで花嫁を中にして、宿泊先から実家へ帰る。実家へは台  
所から入る。実家では台所に臼を逆さまにして、その上に土を盛り、その中に松脂を含む  
松の欠片の「トゥブシ[ʼtubuʃi]を灯しておく。花嫁は芭蕉着を被って、友人らに伴われて  
入ってくる。昔は裸足のままで入ってきた。大正年間に青年団が改めて、アダン葉の草履  
を履くようになったという。父親死亡の場合、花嫁は「ワー アッティミーヨー[ʼwa:  
ʔattimijo:] (私のお父さんよ) といって、泣きながら入ってきた。親は盃の酒を少し花  
嫁が被っているスウル「キヤー[θu ruʼkja:] (麻布の着物) の上に垂らしてやる。花嫁は  
それを受けて後、二番座より出て花婿の家に行く。婿の家に入る際は「メージョー[ʼme:  
ʃo:] (二番座) より入り、「スイ「ミ[ʼθiʼmi] (裏座) へ友人と共に入る。それから婿が  
友人たちと一緒に一番座に入室し、ミービキスウルキヤーを着て東に向かって座る。フワー  
シ「ブン[Φa:ʃiʼbuŋ] (朱塗りの円形高膳) に水と「フガニマー「ス[ʼΦuganima:ʼsu] (黄  
金塩)、「ンバイ[ʼmbai] (大きなお握り) を二つに重ね、それに茅の7節あるものと5節



あるものを2本置いてある(箸)。そこで先ず水を飲み、箸でンバイを挟み、アネ「ヒャー」[ʔaneʔça:]と、三度声を上げる。三度声を上げると、一座の人々もそれに唱和し、アネヒャーの後に塩を頂く。ミービキの式のクライマックスとなる。その後、花婿は裏座に行き、フワーシブンの水は花嫁と頂く。アネヒャーの後に塩も頂く。これが済むと花嫁はメージョーから出て親戚の家に帰る。花婿の家では酒盛りとなる。そこで、ナカ「ダティンチュ」[nakaʔdatinʔʃu] (仲人) がユ「キガミーグワー」[juʔkigami:gwa:] (男の赤ちゃん) とユ「ナグミーグワー」[juʔnagumi:gwa:] (女の赤ちゃん) の謡を歌う。歌詞は次の通り。「御前風」の歌曲にのせて歌う。(1) ユ「キガミーグワー」 ナ「スイバ」 ウ「シュガナシー メデ」イ ユ「ナグミーグワー」 ナ「スイバ」 チ「ミヌ メデ」イ (男児が生まれたら国王さまへのご奉公、女兒が生まれたら聞得大君への年期奉公)。(2) 「クマヌ タトゥクルヤ」 カ「フヌッチュ」ル ヤユル 「ジン マラ」チ フサティ 「ナシグワー メーナ」チ (この二人は果報な人である。お金を束ねあげて腰当にし、子孫を前に揃えている)。(3) 「ウスイクガジマル」ヤ 「イシガキ」ル 「ムテール」 「ナシグワ ダチムテール」 クマヌ スウヌチヤ (ウスクガジマルの木は石垣を抱いて栄える。子孫を抱きかかえて繁昌するのは、この殿内である) と歌った。嫁の実家では次のように歌って結婚を祝した。これも「御前風」の曲にのせて歌う。(4) 「ウシタリータリー」 ナシ「グワ ウシタリティ」リ ヤンヌ 「ウンティキヤ」 ナシ「グワ」 ハンジョー (良きことが続けよ。子供をうみたてよ。来年のこの月は子供が繁昌するよ)。大正の中期ごろまでは、結婚したら花嫁は花婿の家の手伝いをして里へ帰ること4日間続け、その間花嫁は夜逃げ回わり、花婿がそれを探し回った。5日めに花嫁は親戚の子供を中にして花婿と寝る。6日目になって花嫁は花婿と同床する慣わしであった。昔、花嫁が逃げ回って、花婿は花嫁を探し出すことが出来ず、とうとうカツオ漁期で花婿は島を出てしまい、漁期の終わった半年後に花嫁を探し出したことがあるという。これも大正年間に改められた。ミービキスウルキヤーも昭和17年ごろより羽織袴に改められた。三々九度の男女の盃事を交わす儀式も昭和17年の糸数武吉、並里フジの結婚式より始まったという。明治の頃まで久高島から14歳~15歳の女の子が聞得大君御殿へ奉公に上がっていたという(『伊波普猷全集』)。奉公に上がった最後の人がエーグチヌ オーバーサン(昭和18年当時80歳余で、気品の高い人)だったという。

ミー「ビキヤカー」[mi:ʔbikijaka:] (名)

花婿。新郎。ミー「ビキヤカーガ」 チャン[mi:ʔbikijaka:gaʔ ʧaŋ] (花婿が来た)。ミー「ビキヤカーヤ ナマ」 フーン[mi:ʔbikijaka:ja namaʔ ʃu:n] (花婿はまだ来ない)。

ミー「ビキンチュ」[mi:ʔbikinʔʃu] (名)

花嫁側の女性の仲人。花嫁側が「ゲー」[ʔgu:] (麻) で作った、ミー「ビキスウルキヤー」[mi:ʔbiki ʃu rukja:] (結婚式の着物) と「ウビ」[ʔubi] (帯) の一揃いを花婿側へ届けた。「ハリー」[ʔhari:] (嘉例。長寿。幸運) をつけるため、子年生まれの人をミー「ビキンチュ」に依頼した。これには10歳内外の女の子が1名「スウム」[ʔʃu mu] (お供) としてついた。

「ミ」キ[ʔmiʔki] (名)

神酒。女性の「酌拝み」に用いる酒。ミキを作るには、まず所要の分量だけ米を洗って干した後、石臼で挽く。挽いた米粉に水を加えながら炊き、大べらでよく混ぜる。炊きあがると充分冷やし、味をよくするために麦粉を入れてよく混ぜる。一夜おいて水を加えると、「マーミキ」[*ma:miki*]の出来上がりである。ウヅフマーミキとマーミキ小の時の神饌である。正月元旦と三日の酌拝みには、女性はミキで酌拝みをする。神酒にはフミ「ミ」キ[*φumi mi ki*] (米の神酒)。ンム「ミ」キ[*mmu mi ki*] (芋神酒) の二種があった。「マーミキ」[*ma:miki*]は(「真神酒」の義か。)米神酒のこと。神前にはマーミキを供えた。「ミキウシャギー」ン[*miki ʔufagi:n*] (神酒を供える)。現在はお粥を代用している。

「ミツチャ」ンスウク[*mitʃa n θ yuku*] (名)

正月三日の日の酌拝み。ユナグ「シャク」[*junagu jaku*] (女酌) とも言う。この日はノロ、ニーガンから酌拝みをする。以下年齢順に行われる。ギン「スウ」シ[*gin θu si*] (同じ年) の場合は、テイキ「スイラ」[*tiki θi ra*] (月兄。生まれ月の早い人) から順に酌拝みをした。この日の行事が済まないと四つ足の動物は食べられないという。「ミツチャンスウクヌ バーイヤ」 シャコー ユナグ「シャクカラル」 ハハジマイ「ル」 シャクウガ「ミヌ」 スイリ「カラル」 ワーヌ 「シシャー カーリール」[*mitʃan θu kunu ba:ija:n jaku: junagu jakuraru ʔaʃimai ru jakuʔuga minu θi ri kararu wa:nu sija: ka: ri:ru*] (正月三日の酌の場合は、女酌から始まる。酌拝みが済んでからしか豚肉はたべられない<済んでからぞ豚の肉は食べられる>)。

「ミティムン」[*mitimuŋ*] (名)

竈神。「ウカマガナシー」[*ʔukamaganafi:*] (火の神さま) のこと。「ウミティ」ムン[*ʔumiti muŋ*] ともいう。石を三個鼎に立てて拝む。

ミリ「グラ」[*miri gura*] (名)

水タンク。「水倉」の義。

「ミリ スイキーン」[*miri θi ki:n*] (連)

水を供える。旧暦の七夕の日から祖霊を迎えて仏壇に水を供えることにいう。

「ミル」クグワティ[*miru kugwati*] (名)

太陽神を祀る祭祀の美称、尊称か。「ミ」は美称の接頭語。島では、王礼乃神(太陽の神)祭は旧暦6月16日に外間家と外間ノロ家が合同で、久高ノロ家は単独で執り行われる。参加者は外間家と外間ノロ家の関係する神職者と親戚関係の巫女が参加し、久高ノロ家でも同様の関係者が参加する。従って島全体の祭祀ではないと思われる。外間殿では35個のおにぎりトンギヤナスネー(ニガナの和え物)、「ウスドゥク」イ[*ʔusuduku i*] (刺身) を火の神、島全体を祈願するミウヅグイミンナカ(大香炉)、床の神に順次お供えして祈願される。終わったら外間ノロ家に移動する。外間ノロ家においても火の神、香炉、床の神に同様にお供えをして祈願する。直会にはアーサ汁(海草、ヒトエグサのお汁)も出る。外間ノロ家の振る舞いが終わると、さらに外間殿に移動して同様の直会が行われる。久高ノロ家においても同様な祈願が行われる。

「ミンニー[<sup>1</sup>minni:] (名)

十干の壬、癸にあたる日。祭祀を執り行うのに適した日として、「アラミンニー[<sup>1</sup>?araminni:] (その月の最初に回ってくる壬、癸の日和) が最良として尊ばれている。

「ミンニービョー<sup>1</sup>イ[<sup>1</sup>minni:bjo:<sup>1</sup>i] (名)

祭祀の日取りとして選定された十干の壬、癸の日。「アトゥミンニー[<sup>1</sup>?atuminni:] (その月の中で、後に回ってくる壬、癸の日)。

「ムシキ[<sup>1</sup>muʃiki] (名)

「蒸し器」の義。餅を造るのに用いる器具。

ムジ<sup>1</sup>ム<sup>1</sup>チ[<sup>1</sup>muʃi<sup>1</sup>mu<sup>1</sup>ʃi] (名)

麦餅。麦で造った餅。麦と芋を煮て造る。8月のハシャキーや12月8日の「ムチー[<sup>1</sup>muʃi:]の時に造った。芋を煮て捏ねたものに麦を入れたもの。「ンムムチ[<sup>1</sup>mmumuʃi] (芋餅)ともいう。ムジ<sup>1</sup>ムチャー<sup>1</sup> ンム<sup>1</sup>ムチチン<sup>1</sup> イータン<sup>1</sup> パハリ<sup>1</sup>ロー[<sup>1</sup>muʃi<sup>1</sup>muʃa:<sup>1</sup>mmu<sup>1</sup>muʃiʃiŋ ʔi:ta<sup>1</sup>m<sup>1</sup> pʰari<sup>1</sup>ro:] (麦餅は芋餅とも言ったはずだよ)。

「ムスビラ<sup>1</sup>キ[<sup>1</sup>musubira<sup>1</sup>ki]] (名)

結納。「結び酒」の義。男側の両親(両親がいない場合は、父母代わりの伯叔父母)が酒肴を用意して女の家に行く。女側も両親(両親がいない場合は伯叔父母)や親戚の者が迎えて対応する。盃を取り交わして婚約を決めた。当人達(新郎、新婦となる人)は、その儀式に関与しなかった。結婚式の日取りはニーガミ(根神)のところで米の籤で決めてもらった。結婚式の3日前、花婿側から花嫁方へ米1表(4斗入り)と酒3升を持参した。「ミービキ[<sup>1</sup>mi:biki] (結婚式)は出稼ぎとの関係上、霜月(旧暦11月)に執り行うのが多かった。

「ム<sup>1</sup>チ[<sup>1</sup>mu<sup>1</sup>ʃi] (名)

もち(餅)。白い餅。「ム<sup>1</sup>チ トウ<sup>1</sup>クイン[<sup>1</sup>mu<sup>1</sup>ʃi tu<sup>1</sup>kuin] (餅を作る)。「ム<sup>1</sup>チ ウ<sup>1</sup>シャギーン[<sup>1</sup>mu<sup>1</sup>ʃi ʔu<sup>1</sup>ʃagi:ŋ] (餅をお供えする)。

「ムチー[<sup>1</sup>muʃi:] (名)

旧暦12月8日に行われる祭祀行事。「サンシンガーサー[<sup>1</sup>səŋʃiŋga:sa:] (月桃の葉)で餅を包んで蒸し煮する。大きな餅はチ<sup>1</sup>カラムチー[<sup>1</sup>ʃi<sup>1</sup>karamuʃi:] (力餅)といい、子供が健康に育つことを祈願した。子供に「カミラシュ<sup>1</sup>ン[<sup>1</sup>kamirafu<sup>1</sup>ŋ] (頭上に捧げさせる)のであった。戦前は、サバニのある家では軒に2本の竿を立て、それにサバニの帆を掛けて、その下で子供達は食事をしたものである。

「ムチグー[<sup>1</sup>muʃigu:] (名)

餅粉。糯米を水に浸けてふやかし、それを臼で搗いて粉にしたもの。

「ムチムドゥイ[<sup>1</sup>muʃimudui] (名)

出戻り。一度「グトゥ[<sup>1</sup>gutū] (夫)をもって、嫁入りした女性が離縁されて生家に帰っている人。「持ち戻り」の義。

ムム<sup>1</sup>ハメー[<sup>1</sup>mumu<sup>1</sup>hame:] (名)

祭祀の名。「稼ぎ」の義。旧暦9月に行われる「ンナギー」[<sup>1</sup>nnagi:] (イラブー) 漁の感謝祭が久高殿で執り行われる。久高ノロと村頭の主催で国神達を招待してウブンを振舞う行事。久高ノロと村頭夫婦で実施していた。この日に新しい村頭の就任祈願(「ウグワンダ<sup>1</sup>ティ」[<sup>1</sup>ʔugwanda<sup>1</sup>ti] <新任村頭の就任祈願>)と退任村頭のウブ「クイ」[ʔubu<sup>1</sup>kui] (感謝祈願)が行われる。「ウグワンダ<sup>1</sup>ティ」[<sup>1</sup>ʔugwanda<sup>1</sup>ti] (就任祈願)には、「カンビン」[<sup>1</sup>kambig] (神酒を入れた爛瓶)と「ハ<sup>1</sup>ハナグ<sup>1</sup>ミ」[<sup>1</sup>ʔʰanagu<sup>1</sup>mi] (花米)が供えられ、ウブ「クイ」[ʔubu<sup>1</sup>kui] (退任祈願)には「ウユー」[ʔuju:] (お粥)だけ供えられる。

ムラウテー[<sup>1</sup>muraʔute:] (名)

村行事を村人に口頭で広報すること。これは部落における役目の一つを、昔は予め決めていたのである。「村・歌い<節をつけ、声をあげてとなえる>。その鼓臼に立てて歌ひつつ醸みけれかも『古事記歌謡』」の義か。ただし6月と7月のスクガラスの寄る時期にもムラウテーがあるが、それはスォールイの職務上からくるもので、部落の7箇所の四辻で新任のスォールイが、「ユイムン ティリンソーリー」[<sup>1</sup>juimun tirinso:ri:] (出漁しなさい)と謳う。出漁の知らせである。他にも役目上のムラウテーをするのがある。祭祀の際、「ハッシャ」[<sup>1</sup>haʃʃa] (村頭)が、「ミキ ハカラシミソーレー」[<sup>1</sup>miki hakaraʃimiso:re:] (神酒を量らせてください)と辻触れするのがそれである。

ム<sup>1</sup>ル[mu<sup>1</sup>ru] (名)

全部。「諸」の転訛したもの。ム<sup>1</sup>ロー[mu<sup>1</sup>ro:] (全部は)。ス<sup>1</sup>スァー<sup>1</sup> ス<sup>1</sup>シガ<sup>1</sup> ム<sup>1</sup>ロー スァンローヤー[su<sup>1</sup>ra: su<sup>1</sup>ʃiga<sup>1</sup> mu<sup>1</sup>ro: ʃanro:ja:] (することはするが、全部はしないよ)。

ムン<sup>1</sup>シラ<sup>1</sup>シ[muŋ<sup>1</sup>ʃira<sup>1</sup>ʃi] (名)

「もの知らせ」の義。神仏の啓示。人知をもって知ることの出来ないことを、自然現象や動物などの異常な行動によって神仏が人間に暗示させること。

ムンチュー[<sup>1</sup>munʃu:] (名)

門中。父系の血族集団。同族結合体。久高島でも四つの門中(「シム<sup>1</sup>ヌムンチュー、「イチャリムンチュー、「ミンダカリムンチュー、「ニシミムンチュー)がある。

ムンフー<sup>1</sup>ヤー[munʃu:<sup>1</sup>ja:] (名)

こじき(乞食)。「もの乞い者」の義。物乞いをする人。ムンフー<sup>1</sup>ヤーヌ<sup>1</sup> スァッ<sup>1</sup>チューン[muŋʃu:<sup>1</sup>ja:nu<sup>1</sup> ʃaʃ<sup>1</sup>ʃu:ŋ] (乞食が立っている)。ジョー<sup>1</sup>グチ<sup>1</sup>カイ ムンフー<sup>1</sup>ヤーガ<sup>1</sup> スァッ<sup>1</sup>チューン<sup>1</sup>[ʃo:<sup>1</sup>guʃi<sup>1</sup>kai muŋʃu:<sup>1</sup>ja:ga<sup>1</sup> ʃaʃ<sup>1</sup>ʃu:<sup>1</sup>ŋ] (門口に乞食が立っている)。

ムンナレー[<sup>1</sup>munna:re:] (名)

スォールイガナシーの妻が外間、久高両ノロ家に行き、相談の上、「ビ<sup>1</sup>ヒーサチ」[<sup>1</sup>ʔʰi:saʃi] (旧暦1月下旬に行われる大漁祈願祭)などの祭祀の日取りをすること。「ビ<sup>1</sup>ヒーサチヌ ビ<sup>1</sup>ヒルヤー<sup>1</sup> スォー<sup>1</sup>ルイ<sup>1</sup>ヌ 「スウジンシャー<sup>1</sup>ガ ヌン<sup>1</sup>ドゥ<sup>1</sup>チ 「ビ<sup>1</sup>ヒルイヌ<sup>1</sup> ワーン<sup>1</sup>ネー ッチル キミラリー<sup>1</sup>ル」[<sup>1</sup>ʔʰi:saʃinu ʔʰiru:ja:<sup>1</sup> ʃo<sup>1</sup> rui<sup>1</sup>nu<sup>1</sup> ʃu ʃiŋʃa

:ga nun<sup>du</sup>ʔi<sup>ʔ</sup> ʔ<sup>ʔ</sup>ʔiruinu<sup>ʔ</sup> wa:n<sup>ne</sup>: tʃiru kimirari:ru] (ヒーサチの日取りは、スォールイの妻達がヌン<sup>du</sup>ʔ<sup>ʔ</sup>チ<外間ノロ家、久高ノロ家>へ、日取りのご案内をして決められる)。

「メーギ」[<sup>me</sup>:gi] (名)

(地)、スウ<sup>ʔ</sup>クリン[<sup>θ</sup>u<sup>ʔ</sup>kurig] (徳仁港) に入る手前の地名。

「モーイン」[<sup>mo</sup>:iŋ] (動)

踊る。「舞う」の義。「モーラン」[<sup>mo</sup>:raŋ] (踊らない)。「モータン」[<sup>mo</sup>:taŋ] (踊った)。「モーイブシャン」[<sup>mo</sup>:ibuʃaŋ] (踊りたい)。モー<sup>ʔ</sup>ヤーガ<sup>ʔ</sup> グラン[<sup>mo</sup>:ʔja:ga<sup>ʔ</sup> guraŋ] (踊り手がない)。「モーイースァー<sup>ʔ</sup> ナ<sup>ʔ</sup>ラン」[<sup>mo</sup>:iɾa:<sup>ʔ</sup> na<sup>ʔ</sup>raŋ] (踊るのは出来ない)。「ヤーガー モーインシャコー<sup>ʔ</sup> ワヌン<sup>ʔ</sup> 「モーイースァー」[<sup>ja</sup>:ga mo:iŋʃako:<sup>ʔ</sup> wanum<sup>ʔ</sup> ʔ<sup>mo</sup>:iɾa:] (君が踊るなら私も踊るよ)。「ハ<sup>ʔ</sup>ー 「モーリバ」[<sup>ha</sup>: ʔ<sup>mo</sup>:riba] (早く踊りなさい)。「ナ<sup>ʔ</sup>マ 「モートゥーン」[<sup>na</sup>ʔma<sup>ʔ</sup> ʔ<sup>mo</sup>:tu:ŋ] (今踊っている)。「モーター<sup>ʔ</sup> グ<sup>ʔ</sup>ラン」[<sup>mo</sup>:ta:<sup>ʔ</sup> gu<sup>ʔ</sup>raŋ] (踊ってはいない)。「モーティ ウワッタァー」[<sup>mo</sup>:ti ʔuwattara:] (踊ってしまった。舞って終わったよ)。「モーター<sup>ʔ</sup> ユクイ 「マ<sup>ʔ</sup>タ 「モーイン」[<sup>mo</sup>:ta:<sup>ʔ</sup> jukui<sup>ʔ</sup> ma<sup>ʔ</sup>ta<sup>ʔ</sup> ʔ<sup>mo</sup>:iŋ] (踊っては休んで、また踊る)。

「モーカシ」[<sup>mo</sup>:kaʃi] (名)

豊年祈願の神事。正月の早朝、ノロ、ニーガンがイモを輪切りにし、煮て二つずつお碗に入れ、「タカウジ<sup>ʔ</sup>ン」[<sup>taka</sup>ʔuʃi<sup>ʔ</sup>ŋ] (高膳)に載せて「アムトゥジン」[<sup>ʔ</sup>amutuʃiŋ] (竈の神様)と天神地祇を祀ってある外間殿の「ウ<sup>ʔ</sup>フ<sup>ʔ</sup>グイ」[<sup>ʔ</sup>upʔu<sup>ʔ</sup>gui] (大庫裡)にある大香炉に供えて豊年祈願を行う。

「ヤー」[<sup>ja</sup>:] (代)

君。お前。「ヌー<sup>ʔ</sup>チ 「ヤーヤ<sup>ʔ</sup> キヌーヤ フーン<sup>ʔ</sup>タガ」[<sup>nu</sup>:ʔʃi<sup>ʔ</sup> ʔ<sup>ja</sup>:ja<sup>ʔ</sup> kinu:ja ʔu:n<sup>ʔ</sup>taga] (何故君は、昨日は来なかったか)。

「ヤカー」[<sup>ja</sup>ka:] (名)

兄。兄さん。ウ<sup>ʔ</sup>フ<sup>ʔ</sup>ヤカー[<sup>ʔ</sup>upʔu<sup>ʔ</sup>ʔ<sup>ja</sup>ka:] (長兄)。次兄、三兄は「ヤカー」[<sup>ja</sup>ka:]という。ナシ<sup>ʔ</sup>キラ<sup>ʔ</sup>ー[<sup>nafi</sup>ʔkira:] (末子。末っ子)。

「ヤク」[<sup>ja</sup>ku] (名)

やく (厄)。災い。災難が身にふりかかること。ヤク<sup>ʔ</sup>ドゥ<sup>ʔ</sup>シ[<sup>ja</sup>ku<sup>ʔ</sup>du<sup>ʔ</sup>ʃi] (厄年)は、ハ<sup>ʔ</sup>ハレー<sup>ʔ</sup>「ヤ<sup>ʔ</sup>ク」[<sup>ʔ</sup>ʔare:<sup>ʔ</sup>ja<sup>ʔ</sup>ku]といい、生まれ年の「ナーヤ」[<sup>na</sup>:ja] (翌年)のことをいう。フタ<sup>ʔ</sup>ビヤ<sup>ʔ</sup>ー<sup>ʔ</sup> ハ<sup>ʔ</sup>ハレー<sup>ʔ</sup>「ヤ<sup>ʔ</sup>ク 「ヤク<sup>ʔ</sup>トゥ<sup>ʔ</sup> ドゥーヤ<sup>ʔ</sup> ヲ<sup>ʔ</sup>ー<sup>ʔ</sup> ハネー<sup>ʔ</sup>ランバ」[<sup>ʔ</sup>ʔare:<sup>ʔ</sup>ja<sup>ʔ</sup>ku<sup>ʔ</sup> ʔ<sup>ja</sup>ku<sup>ʔ</sup> du:ja<sup>ʔ</sup> ʔ<sup>ju</sup>: hane:<sup>ʔ</sup>ramba] (今年は晴れ厄の年であるから、よく体には気をつけなさい)。「ユ<sup>ʔ</sup>ー 「ハネーティ<sup>ʔ</sup> アッカ<sup>ʔ</sup>ンバ」[<sup>ju</sup>: ʔ<sup>hane</sup>:ti ʔakkamba] (よく気をつけて歩きなさい)。

「ヤグスァミムン」[<sup>ja</sup>gusamimun] (名)

独身者。結婚適齢期を過ぎても独身でいる者。未亡人。やもめ (鰥夫、寡婦)。「ユナグヤグスァ<sup>ʔ</sup>ミ」[<sup>junagu</sup>ʔ<sup>ja</sup>gura<sup>ʔ</sup>mi] (寡婦。後家)。ユキガ<sup>ʔ</sup>ヤグサミ[<sup>jukiga</sup>ʔ<sup>ja</sup>gusami] (鰥

夫。男の独身者)。「アラー ヤグスァミムン」 ヤル[ʔara: jaguramimup jaru]  
(あれは独身者だ)。

「ヤグルガー」[jaguruga:] (名)

イザイホーの祭りに沐浴する井戸。ヤグルガーで精進した後、五穀の入った壺を拾うことができたという伝説のある聖なる井戸。1月の麦の穂祭り、2月の粟の穂祭りには、ノロはこの井戸で精進潔斎する。

ヤシキ「グーン」[jaʃiki gu:n] (名)

「屋敷御恩」の義。屋敷神の守護に対する恩義。

ヤシキヌ「ウグワン」[jaʃikinu ʔugwaŋ] (名)

屋敷の祈願<御願>。旧暦の2月と8月の彼岸の入りの後に執り行われる。

ヤシ「キヌウサンミ」[jaʃi kinuʔusammi] (名)

屋敷の祈願。春と秋の彼岸(旧暦2月と8月の彼岸の入り)の後に執り行われた。2月はウグワン「ダティ」[ʔugwaŋ dati] (願立て)、または「ウタティグワーン」[ʔutatigwa:n]ともいい、8月はスイリガ「プフー」[θi riga pɸu:] (感謝祭。願解き)である。室内では、ウカマガナシー(火の神)とトゥハハシラ(イザイホーを祈願した人の守り神を祀っている聖域で祖母から神霊を受け継ぐという)、スウ「クヌハン」[θu kunuhag] (床の神)に祈願する。室外では、屋敷の四隅で祈願する。まず北西の角、次に北東の角、東南の角、南西の角の順で祈願をし、最後にフル(便所)の神に祈願した。高膳にハナグミ(花米)とハララカナ(肴)、コップに酒を入れて供え、スイーンユタが祈願した。

「ヤジク」[jaʃiku] (名)

イザイホーを経て、ノロを頂点とする祭祀集団の成員となった42歳から53歳までの巫女。祭祀の雑役を担当する

「ユーキ」[ju:ki] (名)

通夜。「夜起き」の義。親戚が集まって夜通し泣きながら死者との離別を悲しみ弔った。

「ユースイリーヤビタン」[ju: θi ri:jabitag] (連)

逝去しました。「世を去りました」の義。死者が出て葬式を出すとき、ボーンキヤー道で柩を止め、付き添った7名が東方に向かって、ヌー「リーヌ」 ナニ「ガシ」ヌ 「ユースイリーヤビタン」[nu: ri:nu nani gafi nu ju: ʃirijabitag] (～年生まれの～が世を去りました)と唱えて墓へ行き葬った。

「ユーマ」ティー「[ju:ma ti:] (名)

祭祀の名称。「夕祭り」の義。夕方に執り行われる神行事。麦と粟の初穂儀礼、麦粟の収穫儀礼には第一日はアサマティーとユーマティーが行われ、第二日目は失業対策事業があった時期に、アサマティーに変わり、現在はアサマティーで祭りを施行している。それに8月10日のハハティ「グワティマッティー」[pɸati gwatimatti:]と11日の「ヨーカビー」[jo:ka bi:]の祭りにもユーマティーは行われる。8月10日のユーマティーは外間殿と久高殿庭で行われる。しかし、麦粟のマティーのように庭に神饌を供えてノロが礼拝することは省か

れて、すぐウンサク[ʔunsaku] (54歳～60歳の巫女) らによるお神酒捧げだけである。外間殿での祭事が済むと久高御殿庭に祭場を移して同じ祭事を執り行う。それが8月10日のアサマティーである。ユーマティーも祭事の内容はアサマティーと同じで、外間殿と久高御殿庭で執り行われる。御殿庭でのユーマティーが済むと、同じ場所で、ノロとウメーギ、スアムトゥ、ウンサク以上の巫女による「ビンヌースウンヌー」[ˈbinnu: θu nnu:] (スィルル。神謡) を歌いながら円舞をする行事が行われる。ビンヌースウンヌーが済むと、待機していたヤジク (42歳～53歳の巫女)、ナンツー (30歳～41歳の巫女) ら全巫女が出演して歌い、「グル」イ[ˈguru ˈi] (踊り) がなされる。八月グルイは沖縄本島でいう、ウシデークのことである。御殿庭一杯に円陣を作り、歌いながら円舞するのである。

「ユキガジャ」ク[ˈjukigaɟa ˈku] (名)

「男酌」の義。正月元旦に酌を頂く儀式。男性から先に酌を頂くこと。

「ユナグジャ」ク[ˈjunaguɟa ˈku] (名)

「女酌」の義。正月三日に酌を頂く儀式。この日は女性から先に酌を頂く。この酌を頂いて後に、はじめて豚肉を食べることができるという。「ウグワンダティ」[ˈʔugwandati] (お願立て) は原則として、パハナ「グミ」[pana ˈgumi] (花米) で、ウブ「クイ」[ˈʔubu ˈkui] (感謝祭) は、「ウブン」[ˈʔubun] (盛りご飯) を供えて祈願するのが普通である。

「ユナグミーグワー」[ˈjunagumi:gwa:] (名)

女の子。女の新生児。

ユナグン「ウヤ」[junaguŋ ˈʔuja] (名)

母親。「女の親」の義。

「ヨーカビー」[ˈjo:kabi:] (名)

旧暦8月11日のスア「キンブ」イ[ra ˈkinubu ˈi] (フボー御嶽回り) によるお祓いの神行事。スォージヤクが神酒を集め、外間ノロ家、久高ノロ家に届ける。午前9時ごろ全巫女外間殿に参集する。全員揃ったところで外間ノロウメーギが太鼓を3回打つ。10時ごろに、外間殿を拝してからフボー御嶽へ出発する。「ウプフウガ」ミ[ˈʔupɸuɸuga ˈmi] (フボー御嶽) へ行き、まず「クバリカ」スア[ˈkubarika ˈra] (クバヅカサ) でお神酒を供えて外間ノロが司祭する。祈願が済むと円陣を組んで「イリチョーハリチョー」[ˈʔiriɕo:haritɕo:] (神謡。スィルル) を歌い、円舞が行われる。歌う形式はノロ、ウメーギが先ず一節ずつ歌い、巫女が「ウイレ」[ˈʔuire:] (復誦) するのである。従前は5,6歳から12,3歳までの娘達は赤い「ルジン」[ruɕiŋ] (胴衣)、「ハカン」[ˈhakaŋ] (下袴) を着て円陣の中に入れたものである。昭和60年にも幼児が祖母と来て円陣の中にいた。ルジン、ハカマを着せた幼い娘達を入れて神謡を謡い、幼少時より神行事に参加させ、巫女になるための信仰の体験と訓練を受けさせた。イリチョーハイチョーの円舞が済むとワカリカサ、ティリリカサ、それからウガミグワーを拜んで部落に帰る。帰りにナンチュ達はイモカズラ (蔓) を頭に巻きつける。部落の入り口のボーンキヤーで男達が太鼓と三線で出迎える。そこでノロ以下巫女がカチャーシーを踊り、近くの外間殿の前庭に移動して、そこでもカチャーシーを

踊らせる。続いてグルイも奉納する。

「リュウグーヌ ハンジャナシー」[ʀju:gu:nu hanɕanaʃi:] (連)

竜宮の神様。「ハビヤーンヌ ハンジャナシー」[habja:nnu hanɕanaʃi:] (カベールの神様) ともいう。竜宮の神様を祭るのはスォールイガナシーである。「シージャスォールイガナシー」[ʃi:ɕa θo :ruiganafi:] (兄スォールイガナシー) と「ウットウスォールイガナシー」[ʔuttu θo :ruiganafi:] (弟スォールイガナシー) の二人の神職者がそれぞれである。スォールイガナ「シーヤ」 ティブ「ロー」 サギラン[θo :ruigana ʃi:ja ʔibu ʀo: ʔ sagiraŋ] (スォールイガナシーは、在任中は決して頭を下げない。合掌して挨拶する)。

リュウグー「マティー」[ʀju:gu:mati:] (名)

「竜宮祭り」の義。海で遭難して死んだ人の霊を慰める祭祀。家族の者が「ユランマ」[ju ramma]の浜に出て祈願した。「スィーンユタ」[θi :ɲjuta] (一族で決まっている、各家庭の祭祀を執り行う神職者) を頼んで、酒や菓子などを供えて祈願する。サングワティ「ディナ」[ɾaŋgwati ʔdina] (旧暦3月3日に行われる大漁祈願。15歳の若者が大人と一緒に追い込み漁に行く) が徳仁港で行われている頃にユランマの浜で「スゥムスイラー」[θu mu θi ra:] (竜宮祭り。リュウグー「マティー」[ʀju:gu:mati:]) が執り行われる。

ルクグワティ「マティー」[rukugwati ʔmati:] (名詞)

粟の収穫感謝祭。ウブン「マティー」[ʔubum ʔmati:] (収穫感謝祭) ともいう。「六月祭り」の義。「マブッチ」マティー[ʔmabutʃi ʔmati:] (粟の穂祭り) は5月中旬にあり、粟の収穫を祝って神に感謝する祭り。3月の麦の収穫祭と対をなす祭祀。外間殿と久高殿で麦の収穫祭と同様に執り行われる。ウヤウンシャクと外間ノロ、根神が外間殿、久高殿の両方で供食を行う神事。供食の後、クボー御嶽へ参詣する。豊年豊作祈願に対するお礼の祈願をする。初日はアサマティー、ユーマティー、二日目はユーマティーであるが、失対事業との関係上、現在はアサマティーに変更してある。計3回の祈願を行う。ユーマティーで、「ンナグラ」[nnagura:] (15歳の少年) が「クカーワウ」[kuka:wu:] (魚を棒に吊るして担ぎ、東方に向かってクカーワウと唱えること) を唱える儀式がある。外間殿、久高殿の両方で同じ祈願を行う。

ワー「アン」ラ[wa: ʔan ʔra] (名)

豚の脂。ラード。

ワーン「ネー」[wa:n ʔne:] (名)

ご案内。外間殿と両ノロ家に対する祭祀のご案内、神職者に対するご案内、一般の人に対するご案内などがある。カツオ漁船の「ウグワンダ」ティ[ʔugwanda ʔti] (御願立て)、「ウブクイ」[ʔubu ʔkui] (願解きの祈願。感謝祭) のご案内など、祭祀行事へのご案内にもいう。祭祀へのご案内役は、イザイホーに参加した巫女で、一定の年齢の人が務めた。61歳、73歳の生年祝いは村全体で祝うので招待<御案内>はない。

「ワカリカサ」[wakarikasa] (名)

フボー御嶽の聖域(拝所)の一つ。南山へのお通し<遥拝>の拝所。ワカヅカサと記録さ



れている。

ンギャナ「ドゥネー」[ŋgjanaˈdune:] (名)

ニガナ（苦菜）と魚の刺身を酢で和えたもの。苦菜を糸のように細く刻み卸して魚の刺身と酢で和えて出された結婚式定番のご馳走。結婚式で来客に出す祝いの膳はンギャナドゥネーであった。結婚式の前日、親戚の者と友人達約20人がアン「ティキヤー」[ʔanˈtikja:]（追い込み漁。「網使い」の義か）をして漁獲し、花嫁の家と花婿の家で折半して刺身を作った。その追い込み漁を、ミービキアンティキヤーという。結婚式のまえには親戚の者が海岸べりより野生のンギャナをバーキーの2～3杯も摘んできた。

ンダ「ルーツチュー」[ndaˈru:tʃu:] (連)

人名。ンダルーという人。ヒジムンに化かされたという伝説上の人物。サブ「シーヌ アッティミーガ」 スウメーティ 「スォーティ」 チャン ンダ「ルーメーヤ」 ンチャ「ンバイン」 スウバカイ ウカッ「トゥータツチン」[ɾapuˈʃi:nu ʔattimi:ga ʔu me:ti ˈθo:ti ˈʃaŋ ndaˈru:me:ja ɳʃambain ʔu bakai ʔukatˈtu:tatʃiŋ]（サブシーのお父さんが捜して連れてきた。ンダルーの前には、土の団子＜お握り＞も側に置かれてあったそうだ）。

ンチャティウグワン「[ɳʃatiʔugwaŋ] (名)

旧暦8月9日、マティーの前日にフボー御嶽に参拝して、パハティグワティを開始する旨の報告を行う祭祀行事。ンチャ「メーヌ フェー」[ɳʃaˈme:nu ʔe:]ともいう。

ンチャティオージ「[ɳʃatiʔo:ʃi] (名)

表に太陽と鳳凰、裏に月と牡丹が描かれた大きな扇。首里王府の聞得大君より拝領したものといわれている。

ンチャ「メーヌ フェー」[ɳʃaˈme:nu ʔe:] (連)

八月祭りの報告祈願。ンチャ「メーヌ ウグワン」[ɳʃaˈme:nu ʔugwaŋ]ともいう。マティーの前日にフボー御嶽に参拝して、パハティグワティを開始する旨の報告を行う祭祀行事。マティーの前日、各家より村頭（兄）の家に麦を盃の一杯（現在は米）とウコー（線香）2枚持参する。これを「ンチャメー」ヌ パハナ「イリ」[ɳʃame:ˈnu ʔʰanaˈʔiri]という。村頭はこれをミームトゥに三分して持参する。ミームトゥではこれで祈願を行う。旧暦8月9日の午後5時ごろ、外間ノロ、外間ノロウメーギ、スアムトゥ、ウンサクラが参集し、外間殿の火の神、ウプフグイミンナカ、床の神の三箇所へ花米（3合花）とウコウ12本を供えて祈願する。祈願が終わると外間ノロを先頭にフボー御嶽へ向かい、ワカリカサ、ティリリカサ、ウガミグワの順に祈願を行う。その日の夕方（日没後）にニーン「スウキヌ ウグワン」[ni:nˈ ʔu kinu ʔugwaŋ]（子の刻の祈願）が執り行われてンチャ「メーヌ ウグワン」は終了する。

ンチャメー「ヌ パハナ」イリ「[ɳʃame:ˈnu ʔʰanaˈʔiri] (連)

旧暦8月9日の「ンチャメーヌ フェー」の前日に各家庭より、パハナ「グミ」[ʔʰanaˈgumi]（花米、線香）を外間ノロ家、久高ノロ家へ納めること。従前はカツオ漁船の船主の家か

らハハナ「グミを届けていたが、現在は各家庭から届けるようになっている。

「ンドースァン[<sup>ˈ</sup>ndo:ɾaŋ] (形)

気の毒である。可哀相である。不憫である。「ンドースァタン[<sup>ˈ</sup>ndo:ɾataŋ] (気の毒だった)。「ンドースァー<sup>ˈ</sup> ナー<sup>ˈ</sup>ン[<sup>ˈ</sup>ndo:ɾa:ˈ na:ˈŋ] (気の毒ではない)。「ンドースァ ナイン[<sup>ˈ</sup>ndo:ɾa naɪŋ] (気の毒になる)。「ンドースァン<sup>ˈ</sup> チュ[<sup>ˈ</sup>ndo:ɾanˈ ɕu] (気の毒な人)。「ンドースァスイガ<sup>ˈ</sup> シカ<sup>ˈ</sup>ター<sup>ˈ</sup> ナー<sup>ˈ</sup>ン[<sup>ˈ</sup>ndo:ɾa θi gaˈ ʃikaˈta:ˈ na:ˈŋ] (気の毒だが仕方が無い)。

「ンバギー[<sup>ˈ</sup>?mbagi:] (名)

米飯。子供が誕生したときに「ンバギー[<sup>ˈ</sup>?mbagi:] (サンニンの葉で包んだ米飯。「御萩餅」の義か)を作って「ミー<sup>ˈ</sup>アムトゥ[<sup>ˈ</sup>mi:ˈ?amutu] (外間ノロ家、久高ノロ家、外間根家)に供えた。人が死んだ時にも同様に「ミー<sup>ˈ</sup>アムトゥに供えた。

「ンプリキン[<sup>ˈ</sup>?mpurikiŋ] (名)

うぶぎ (産衣)。昔は子供が生まれて7日目の満産の日に産衣を着せたという。「ンプリキン<sup>ˈ</sup> フ<sup>ˈ</sup>スィーン[<sup>ˈ</sup>?mpurikiŋˈ ɸuˈ θi:ŋ] (産衣を着せる)。

「ンブキーン[<sup>ˈ</sup>?mbuki:ŋ] (動)

溺れる。ウミ<sup>ˈ</sup>カイ<sup>ˈ</sup> ンブキタン[<sup>ˈ</sup>?umiˈkai ?mbukitaŋ] (海に溺れた)。「ンブキラン[<sup>ˈ</sup>?mbukiraŋ] (溺れない)。「ンブキトゥーン[<sup>ˈ</sup>?mbukitu:ŋ] (溺れている)。「ワナー<sup>ˈ</sup> ンブキラン[<sup>ˈ</sup>wana:ˈ ?mbukiraŋ] (私は溺れない)。「ンブキラ<sup>ˈ</sup>ンカン<sup>ˈ</sup>バ[<sup>ˈ</sup>?mbukiraˈŋ kamˈba] (溺れるなよ)。デー<sup>ˈ</sup>ジロー<sup>ˈ</sup> ンブキヤー[<sup>ˈ</sup>de:ˈɕiro: ?mbuki:ja] (大変だぞ、溺れたら)。

ンマ<sup>ˈ</sup>リー<sup>ˈ</sup>ン[<sup>ˈ</sup>?mmaˈri:ŋ] (動)

生まれる。「ンマリタン[<sup>ˈ</sup>?mmaritaŋ] (生まれた)。「ナマ<sup>ˈ</sup> ンマリラン[<sup>ˈ</sup>nama ?mmariraŋ] (まだ生まれない)。「ンマリギスァー ヤッ<sup>ˈ</sup>チ<sup>ˈ</sup>スァー[<sup>ˈ</sup>?mmarigiɾa:ˈ jatˈ ɕiˈra:] (生まれそうだってさ)。「クワヌ<sup>ˈ</sup> ンマッティカラ<sup>ˈ</sup> ウイ<sup>ˈ</sup>エー シュン[<sup>ˈ</sup>kwanu ?mmattikaraˈ ?uiˈje: ʃuŋ] (子供が生まれてからお祝いをする)。「クワヌ<sup>ˈ</sup> ンマ<sup>ˈ</sup>リー<sup>ˈ</sup>ン[<sup>ˈ</sup>kwanuˈ ?mmaˈri:ŋ] (子供が生まれる)。「ナマ<sup>ˈ</sup> ンマ<sup>ˈ</sup>リーヌ<sup>ˈ</sup> ックワ[<sup>ˈ</sup>namaˈ ?mmaˈri:nuˈ kkwa] (今度生まれる子供)。ユキ<sup>ˈ</sup>ガングワヌ<sup>ˈ</sup> ンマ<sup>ˈ</sup>リーヤ<sup>ˈ</sup> ウイ<sup>ˈ</sup>エー スァナ[<sup>ˈ</sup>jukiˈganguwanuˈ ?mmaˈri:jaˈ ?uiˈje: ɾana] (男の子が生まれたらお祝いをしよう)。

「ンマリカシ[<sup>ˈ</sup>?mmarikafi] (名)

健康祈願の祭祀。年に2回(旧暦6月24日、12月30日)「スップシ[<sup>ˈ</sup>θu buʃi] (点し。松の根の木片)を点して祈願する。旧暦12月30日の大晦日の晩に「ンマリカシヌ ウグワ<sup>ˈ</sup>ン[<sup>ˈ</sup>?mmarikafinu ?ugwaˈŋ] (健康祈願)が執り行われる。旧暦6月には、「タティウグワ<sup>ˈ</sup>ン[<sup>ˈ</sup>tati?ugwaˈŋ] (健康祈願の願立て)が行われ、「スップシ[<sup>ˈ</sup>θu buʃi] (松の根を鉛筆の大きさに削って作った灯火用の木片。「とぼし<点し>」の義)を「イティ<sup>ˈ</sup>カキ[<sup>ˈ</sup>?itiˈkaki] (5片)点し、12月の祈願には「ナナ<sup>ˈ</sup>カキ[<sup>ˈ</sup>nanaˈkaki] (7片)をともし(点

し)で祈願される。「ンマリカシャー」ハシャ「キーヌ バーイヌ」ルク「グワティ  
ニンジューユッカトゥ」スウシン「ユルンピーヌ」ニクワイ「スイーンユタ スアル  
ディ」ヤーニン「ジュ」ヌ「ケンコーヌ グワンダティトゥ」スイリガ「フフーヌ ウ  
グワンドゥ」ナトゥール スイリガ「フフー」ン「バーイヤー」スウブ「シャー」ナナ「  
キリ グワンダター」イティ「キ」リ「ミティムンヌ ネー」カイ「ティキティー」ウ  
グワ「ノー」スル「ミティムンカイ」ニガ「ティヌ アトー」トゥハ「シリ スウク  
ン」ウガ「ミスアー」[「ʔmmarikaʃi:ja haʃa ki:nu ba:inu ruku gwati ninɕ  
u:jukkatu θu ʃip jurumpi:nu nikwai θi:njuta ɾarudi ja:ninɕu:nu keɕ  
ko:nu gwandatitu θi riga<sup>p</sup>ɸu:nu ʔugwandu natu:ru θi riga<sup>p</sup>ɸu: m ba:  
ija: θu buʃa: nana kiri gwandata: ʔiti ki ri mitimunnu ne:kai tikiti:  
ʔugwa no: suru mitimuɕkai niga tinu ʔato: tu<sup>p</sup>ɸa ʃiri θu kuɕ ʔuga  
miɾa:] (健康祈願の祭祀はハシャキーの時の6月24日と大晦日の日の2回、スイーンユ  
タを頼んで家族の健康の祈願と感謝の祈願となっている。感謝祭の時は松のスウブシ<点  
し>は7片、願立ての時にはスウブシを5片を火の神の前に点して祈願をする。火の神に  
祈願して後は、トゥパシラの神も床の神も拝むよ)。

「ンケーハリ」[「ɲke:hari」] (名)

「迎え風」の義。道で悪霊に遭遇すること。急に発熱したり、頭痛を起こしたりする。こ  
れには「ハチーピチャイ」[「haʃi:piɕai」] (嘔吐や下痢)の症状もみられた。ウミ「ラヌ ヘー  
イ ピジャカイ」ティ「ブン」ヌ「ヤリ」「キヤー」チガ ヤー「チャー」チャラ ワカ「  
ラン」デージヌ「ニティヌ」ンギ「トゥータン アンマーガ スイーンユタ ユリ マ  
ンナーチャクトゥ」ンケー「ハリ」ナティ シレーニ「ニター」「ピチ」ンジ ノータ「スアー  
[ʔumi ranu he:i piɕakai ti bun nu ʔari kja: ʃiga ja: ʃa: ʃara waka  
ran de:ɕinu nitinu ŋgi tu:tag ʔamma:ga θi:njuta juri manna:ɕakutu ɲ  
ke:hari nati ʃire:ni nita: piɕi nɕi no: taɾa:] (海からの帰りにピジャで頭が痛  
くなって、どうやって家に来たのか分からない。大変な熱が出ていた。お母さんがスイー  
ンユタを呼んで間直し<験直し。縁起直し>の祈願をしたので、「迎え風」になって、次第  
に熱は引いていって治ったよ)。

「ンモーカシーヌ フェー」[「ʔmmo:kafi:nu ɸe:」] (連)

芋の豊作祈願。「ンモーカシー」[「ʔmmo:kafi:」] (甘藷を蒸かしたもの)を供えてする祈願。  
外間殿では外間ノロによって祈願が行われる。ウカマガナシー (火の神) と「ミー」ウプフ  
グイミンナカ「mi: ʔup ɸ uguiminna】 (外間殿の大庫裡にある大香炉。島全体の守護  
神を祀る。昔は外間根人家の一番座に当たるところにあった。現在は外間殿となっている。  
「ふるさと創生資金」で外間殿というお宮に造営された)にンモーカシーを供えて祈願する

## 補遺 スォールイガナシーの祭祀の事例

【祭りへの参加】スォールイ神職就任後最初に参加するのが十月の下旬に行われる「ジューマティー」[ʔɕu:mati:]（神職者や島人に対する健康祈願の祭り）である。スォールイは神職であるので案内を受ける。当日は11時に村頭の妻から案内があり、先任宅へ行き、先任を先にして外間殿へ行く。それゆえスォールイ棚への昼のお茶は妻が代わって供える。外間殿では60歳以上の巫女が座る「スァムトゥナー」[ʔamutuna:]（タムトゥ庭）での男性神職者達の次に座る。最初に昨年10月から今年10月までの感謝の祈願があり、直会の後、来年10月までの健康祈願の願立てが行われ、1時ごろ終わって帰宅。その後、「ウブン」[ʔubuŋ]（供物の料理。「ンバイ」[ʔmbai]＜米飯＞と「ンナギのナナンキリ料理）届けられるたので高膳に移し、神棚に供えて12本の香を焚き、拝する。

【「アミル」シ[ʔamiruʔi]＜10月13日に行われる豊漁祈願祭＞】7時45分先任宅へ、供に外間、久高の両ノロ家、外間殿と島づくりの神アマミヤ神加那志を祀るイヤリ小を屋外より拝んでアミルシの行事のワーン「ネー」[wa:nʔne:]（ご案内）をする。帰宅して神棚に香12本を焚いて拝み、海支度をして先任宅へ。先任を先に共に徳仁へ。棹立石を左回りしてバケツに海水を汲んできて3回左回りで洗い流し、マラチャ石（組板石）も同じ3回流してから帰宅する。出漁準備をして、網とサシカは棹の前に下げて担ぎ、先任宅へ。先任も網とサシカを棹の前に下げて担ぎ、先任を先にして徳仁へ、左回りで棹立てに先任の棹を左、新任のは右に立てる。追い込み漁に参加する各ヤドゥイからの出漁者がスォールイの乗るサバニと他の2隻のサバニに分乗して出漁し、ペーンシ（平瀬。「南の瀬」の義か）で大漁して帰港した。徳仁で待機していた先任が出迎え、先任がウタカムン（御捧物。献上物）5尾ずつの3組をアダナシの紐で結わえてマラチャ（組板）に並べておく。なお、ナナヤドゥイに配る7尾もマラチャ石の横に並べる。新任は急いで帰宅して身を清め、正装して徳仁へ行く。先任がノロをワーン「ネー」してから徳仁に帰る。神職らが揃うと徳仁の「スーグチ」[su:guʔi]（潮口、渚）で男女の神職者が並び、ニライ・カナイと次に竜宮神へと2回大漁祈願がなされる。そして各ヤルイから出されたお神酒を各自3回ずつ長箸で3回ずつ掻き回して祭祀は終了する。女神職者は帰宅し、男神職者及びスォールイは各自のヤルイに戻り、ンバイを会食し、時間を見計らってマラチャ石に準備してあったウタカムン（御捧物）を、網、サシカと棹の前に掛けて担ぎ、外間スォールイは外間ノロ家と外間殿へ、久高スォールイは久高ノロ家にそれぞれお届けして帰宅する。

【昭和五十八年におけるスォールイの祭祀への参加実例】1月7日（旧暦11月24日）「フバヤ」ク[ʔubajaʔku]（御嶽の掃除、お祓い。健康祈願）。11月に2日に亘って行われる。ノロと巫女達が御嶽の木の枝を切って清掃してから祈願をする。神様から木を切る許可を頂く祭祀。70歳の「スァムトゥ」[ʔamutu]（巫女）は、この祭祀で満期退役となる。フバヤクが済まないと各自の屋敷の樹木は伐採できない。新任スォールイは祭りの前にウブン用

のサバを10尾買って準備する。従前は自分で調達した。祭りの前日、シナグラ（15歳の男子）は祭りに、外間区、久高区の各戸を回り野菜を調達する。野菜担ぎの役があるので、翌日の午後休暇を許可してくれるよう校長に要請する。スォールイの役目で、ウタキ（御嶽）の木の新伐採に使用する鎌を3尋の竿の先に結わえて準備する。夕方前任が来て、明日7時半、ミキ（神酒）量りすることを告げられる。ミキは畑10組の各組の当番の家で作る。翌日7時10分、枡と柄杓を持参して先任宅へ同行し、外間ノロ家へ。最初メーンシム組のミキアタイ（神酒当り、担当）が持参する。初め枡一杯量り、後は7、8分目にして7回量る。久高ノロ家でも同様の回数量る。正午ごろから野菜集めのシナグラと一緒にスォールイサカティ（スォールイ酒手）100円を各戸から徴収する。野菜集めは外間スォールイ側は外間家より左回り、久高スォールイ側は両ノロ家より始めて同じく左回りで集める。シナグラが集めた野菜は新任宅で一緒にして、両スォールイの妻がそれを刻み、徳仁港の西側で洗って帰ってきたら、2番座で先に準備したサバの頭を切り、9尾を夫々二枚に下ろし、骨のつかない「ミピヤ」[mipija]（身平）を二つ切りに、骨ピヤを三切りにして、残りの一尾を両ピヤ三切りにして51切りを作り、頭は二つ割りにして蒸させる。冷やしてから7切れ3個、5切れ6個に分けて分配先の名札をつける。フバヤク二日目、午前7時、枡と柄杓を持って先任宅へ同行してウドンミヤ（御殿庭）へ。各組からのお神酒を外間ノロ家で量ったと同様の量を量り、桶はクバの葉で周りや上からかぶせてから帰宅する。10時ごろ、巫女らがウタキ（御嶽）から帰ってきたので先任宅へ行き、共に御殿庭へ行く。ノロ始め、神職者や巫女が集まる。先ずお神酒拝受があり、3度拝受する。6月と7月にスォールイに献納されて先任宅で保管されていたスクと、昨日スォールイ妻二人が徳仁で洗ってきた菜っ葉をヤジクの巫女が持参したビントウ（クバの葉で作ったもの）に参会者全員に配る。その後、昨日準備したサバを魚ウブンとして両ノロと根神は7切れ、その他の神職とスォールイは各5切れを出されるので、それを拝して祭りは終了する。ウブンはヤジクによって届けられる。ウブンが届けられると、高膳に供え、スォールイ棚に12本香を焚いて奉拝する。11時半前任夫妻お酒を持参して来宅。「スウイケー」[θu ike:]（トゥイケー。取り交わし）が行われる。新任より前任へ3回、その時新任妻、昨日蒸したサバの頭を3切れ自分の皿に取る。新任より前任へ3回、妻同じく3切れ皿に取る。新任妻と前任、新任妻と前任妻各3回、その都度新任妻皿にサバの頭を取る。前任より新任へ3回、新任妻へ3回、前任妻より前任へ3回、妻へ3回、今度前任妻が皿に取る。スウイケー（トゥイケー）が済むとスォールイスアカティより酒2合と菓子を買わせ、スォールイ棚に向け高膳に供えて香を焚き、礼拝する。集金したスアカティよりサバ代、バス賃を差し引いて二人で三千五百円ずつ分けてスォールイ棚に保管する。

【火祭りのウブクイ<一月二十五日。旧暦十二月十二日>】一年中火事がなく、無事であったことを神様に感謝をする祭祀。祭りの際には、ヤジクである巫女よりワーン「ネー（ご案内）がある。それはスォールイも在任中は神職であるからである。8時半に家を出て先任宅へ行く。前任と同行して外間ノロ家、外間殿の順で祈願して帰宅する。祭りで出かける

時は、その都度スォールイ神棚に12本の香を焚く。

【大主加那志祭り<二月三日。旧暦十二月二十一日>】ニラー大主の神に、今年中、海上平安、無事にしてくださったことへの感謝の祭り。9時に着替え、香を焚き、礼拝してから先任宅へ。外間ノロ家、久高ノロ家、外間殿、イチヤリ小、大里家、シラタル殿の順で祈願する。丁度昼時に帰宅して昼のお茶を献じてからインヌヤーへ。そこからアカナ森に折り返し、イシキ浜へ。イシキでは入り口左側のイビへ。五穀の種子の入った壺を開けて見た場所で、此处での祈願があり、浜に下りてニライカナイの鎮座まします東方への祈願をして帰るが、両スォールイは外間殿、イチヤリ小、外間ノロ、久高ノロの両家を礼拝してから帰宅する。二月の祈願祭で15歳から70歳までの男子の健康祈願をして各自家で保管した小石（一人三個宛ての小石）を返納した。

【元旦<2月13日。旧暦1月1日>】12本の香を焚き、9時に先任宅へ。共に外間殿へ参る。男酌は、男神職者の次にスォールイがが拝む。60歳以上の男の酌拝みが済むと、男神職者と久高ノロ家へ。ノロから酌を拝して外間殿へ戻り、女酌が済んだので帰宅してスォールイ棚に昼のお茶湯をする。旧正月三日。9時、先任宅へ行き、外間殿に同行する。今日は女酌から始まる。10時半頃、久高ノロ家へ。ノロの酌を拝して外間殿へ戻る。男酌の終了後直会があり、帰りはイチヤリ小、外間、久高両ノロ家を庭先より礼拝して帰宅した。

【「ピーマティー[「pi:mati:]<火の祭り>。2月21日。旧暦1月8日】一年中火事がないようにと祈願する祭り。8時5分、先任宅へ同行して外間ノロ家へ。祈願後、久高ノロ家、外間殿でも同様の祈願をする。それが済むとノロ以下巫女らはフボー御嶽へ。先任とイチヤリ小、外間、久高両ノロ家を礼拝して9時45分帰宅。

【マ「ブッチ」マティー[ma「butʃi」mati:]<正月祭り> 3月6日。旧暦1月22日】前日、フカラクの魚5尾の2組を作る。午後3時、先任が竿にサシカと綱を下げて来宅。各自1組を担ぎ、先任は外間ノロ家へ、新任は久高ノロ家へ届ける。当日は8時半に先任宅へ同行して外間殿へ。デイゴの下で蓆を敷き、先任右、新任左で座る。しばらくして先任のハッサ（村頭）が「ウトゥチン ナイビタン ウナーチ ウンティケーサビラ サーレー」とふれる。しかし、既に神職や巫女らは集まっている。やがてヤグルガーに禊に行ったノロとウヤウンサクが外間殿に着いて祭りが始まる。両ノロは、畑の各組から出されたマブッチ（麦を粥状にしたもの。現在は米の粥）が東方に向かって配列されている、そのマブッチの上をアディカの束で4回お祓いをする。それが済むとお神酒捧げで拝し終わると、久高殿でも同様な祭りが行われる。終了後、先任と外間殿、イチヤリ小、両ノロ家を庭先より礼拝してから帰宅し、スォールイ棚にも礼拝する。その日のユーマティー。午後4時に先任宅へ同行して外間殿へ。お神酒捧げでそれを拝し、ウドウンミャー（お殿庭）でも同様に行く。終わって外間殿、イチヤリ小、両ノロ家を礼拝して帰宅し、スォールイ棚を礼拝する。

【「ユーマティー[「ju:mati:]<夕祭り>。3月7日。旧暦1月23日】現在は失対事業等の関係で朝に変更されている。6時40分、12本の香を焚き、朝の御茶湯を捧げ、祭りへの報告を

し、先任宅へ昨日同様のお神酒捧げで終わる。男神職者スォールイ、村頭共々外間殿のスムトゥ庭（タムト庭）に並び、礼拝する。両スォールイは、イチャリ小、両ノロ家を拝礼して7時15分帰宅する。

【「ヒースァチ」[<sup>p</sup>Φi:raʃi]＜ヒースチ。3月25日。旧暦2月11日＞】1月下旬か2月上旬の壬（みずのえ）の日に行く。「ハビヤーン」[<sup>p</sup>habja:ŋ]（カベール）と「フボー」[<sup>p</sup>Φubo:]（クボー御嶽）で1年中の大漁祈願をする。その数日前、両スォールイは両ノロ家に捧げる魚の調達をする。当日の朝、妻らは白米一升ずつにもち米五合ずつを準備して魚と一緒にそれぞれのノロ家に届ける。それは大漁祈願を依頼する趣旨からだと思われる。それはスォールイがカベールとクボー御嶽に行かないことから伺える。スォールイは、それぞれのノロ家からウブン（ンバイ、煮魚、刺身）が届けられる。正装して12本の香を焚き、高膳に供え、香を焚いて礼拝する。

【「ウプフヌシガナシマティー」[<sup>p</sup>ʔu<sup>p</sup>Φ unuʃiganaʃimati:]＜大主加那志祭＞ 3月27日。旧暦2月13日】ニライカナイの神様に海上平安無事と男子の健康無病息災の祈願祭。拝所は、師走の感謝祭と同じコースで拝む。15歳から70歳までの男子の健康祈願として小石を3個ずつ拾う。それは各自の床の間に安置し、師走の感謝祭にはそれを返納する。

【「スァングワティ」<sup>p</sup>「ディナ」[raggwati<sup>p</sup>dina]＜3月綱＞ 4月15日。旧暦3月3日】前日にンナグラ（15歳）と13歳の男子に、明日の出漁を告げる。午前5時30分起床。正装して先任宅へ同行して両ノロ家、外間殿の各庭先から3月綱のワーンネー（御案内）を言上して礼拝し、帰宅する。着替えて字の中央のバンルクマ（番所）で島人と出漁の話し合いをして出漁者の割り当てなどを決める。海支度をしてスォールイ棹の前に綱、サシカ、ワーク（櫂）を担ぎ、先任宅へ。先任も同様に担ぎ、徳仁へ。棹立て岩を左から回って棹を立てる。出漁はスォールイ船ともう1隻のサバニが出る。その日の出漁者は新任スォールイ以下9名で、天候不順のため、車に船を載せ、カベールに行く。出漁前、浜小で礼拝して出漁する。ガマクで2パック、イノーで1パック、浜小前で2パック（パックは綱を入れる回数）、場所を変えて5回綱を入れたことになる。30斤くらいの漁獲高で徳仁に帰る。帰りを待っていた先任がその中からウタカムン（御捧物）として3尾の2組を作る。新任は帰宅して着替えてくる。そしてそれぞれのノロ家に届ける。4時ごろノロ家からウブンが来たので、高膳に供えてスォールイ棚に香を焚いて礼拝する。ウブンはイラキニンザラとウタカムン（御捧物）の魚の煮魚と刺身である。イラキニンザラとは、煮芋をこねてそれに麦焦がしを混ぜて捏ねた大きな饅頭のようなものである。4時45分に徳仁へ同行する。男神職のハナマンとアカツミーは既に来ていた。祈願は根人不在で、フシマ（小島。徳仁港の向かいにある）に向かい、左からハナマン、アカツミー、両スォールイ、村頭の順でスーグチ（潮口、渚）に並んでフシマの龍宮神を拝み、それが済むと向きを東南に変えてニラーハナーへ祈願する。終わって、マラチャ石後方で車座を作り、東側より新任、先任、アカツミー、ハナマン、ウプスー連（51歳以上）の順で座し、直会をする。その準備は村頭2名とンナグラがする。4月24日（旧暦3月12日）、ミーアムトゥ（外間殿、両ノロ

家)の初ウガミがあり、午後一番早生まれンナグラの家に行き、親に明日の夕祭りにクカーウー魚担ぎに出るよう伝える。4月25日(旧暦3月10日)、三月祭(ウブンマティー)当日はウブンガが出るので、サカナウブンとウスドゥクイ(刺身)を家内が準備して外間殿に持参する。メーウブンは、地ンバイが配られてから地ンバイで盛る。午前7時15分、正装して12本の香を焚き、神棚(スォールイ棚)に拝礼し、蓆(新任は祭りの度に持参)を持って先任宅へ。同行して外間殿のデイゴの下で蓆を敷き、先任右、新任は左に座る。暫くしてノロや巫女らが集まり、祭りが始まる。初め、ノロが地ンバイの祈願をし、その配分等をしてから、お神酒捧げがある。それを拝してから各自のウブンが配られる。ウブンを形式的に拝食し、外間殿を終え、御殿庭へ。そこでも外間殿と同様な式順で行われた。9時10分に終わる。帰宅後、12本の香を焚き、ウブンを供えて神棚を礼拝する。11時20分、御嶽から妻帰宅する。正装して12本の香を焚き、拝礼して祭ダカテの徴収で先任宅に行き、屋号台湾外間の東道で別れて旧久高村を回り、12時25分に終わり、帰宅して神棚を拝し、昼のお茶を供えてから着替える。午後3時からクカーウー魚を束ねて棒に通して準備する。午後4時半、ンナグラへ電話。同40分、2本の香を焚く。ンナグラ正幸君来宅。先任来宅。正幸にクカーウー魚を担がせ、外間殿へ。5時5分からタマティー始まる。お神酒捧げが済んでから男神職者全員と村頭2名の中央に東向きに立つ。ンナグラは両スォールイの前に立たせ、全員東方に合掌してからンナグラに「クカーウー」と大声で叫ばせる。御殿庭でも同様に行われた。帰宅後神棚を拝し、着替えてクカーウー魚は明日の祭りでの肴ウブンになるので捌いて煮る。先任来宅。煮魚を冷やしてから、外間、久高の両ノロ、根神各7切れの各2組ずつ。外間殿3切れの3組、イチャリ小、3切れ、ハナマン、アカツミー各5切れ、スォールイ5切れ、2組に分配し、名札を付けて準備する。翌日タマティ(当時失業対策事業があり、朝実施した)。5時20分、先任妻ウブン用の高膳集めを知らせに来宅。新任妻高膳集めに出かける。先任妻ウブン用の、昨日準備した煮魚と新任の膳を持って外間殿へ。5時25分正装して12本の香を焚き、朝のウチャトウ(御茶湯)をして祭りへの報告をする。5時35分、先任宅へ同行して外間殿のいつもの場所に座る。6時5分、祭り始まる。お神酒の捧げが済んでからウンサク達が昨日新任スォールイ宅で準備した魚ウブンの配膳をする。ウブンの形ばかりの拝食が終わったら担当のウンシャクが各家に届ける。スォールイのウブンは、外間殿のは外間スォールイ宅へ、その妻が持参する。ハナマンとアカツミーは、各1組しかないので届けないで、それを御殿庭でのウブンにする。終了したらウンシャクが各家庭へ届ける。久高殿での祭り終了後、男神職者と村頭は外間殿のスァムトゥ庭(スァムトゥが座るところ。スァムトゥは60歳以上の巫女)に、殿に向かって並列して合掌礼拝する。両スォールイは、次にイチャリ小と両ノロ家も礼拝して帰宅し、香12本を焚き、ウブンを供えて祭りの終了を報告する。7時15分、先任夫妻来宅。新任より先任と同妻へ、新任妻より先任と同妻へ、先任より新任と同妻へ、先任妻より新任と同妻へ、各3回宛てのスウィケーをする。それが済むと祭りダカティより酒2合、菓子を買わせ、神棚へ捧げてから徴収金よりサバ代、1,650円、バス賃



540円、菓子と酒代410円を差し引き、残金を分配する。7時半、村頭の妻が村の初拝みのワーンネー（ご案内）がある。先任宅へ。外間殿へ同行する。スアムトゥ庭に、西側よりアカツミー、ハナマン、先任、新任の順で座る。外間ノロ、掟神と女神職者の初拝みが始まる。ウブンを拝して帰宅。外間殿よりウブンが来るので正装のまま待って、ウブンが来て香12本を焚き、神棚に供えて拝礼する。

【「ピシクミ」[ˈpiʃikumi]＜追い込み漁＞ 4月27日。旧暦3月15日】午前7時15分、着替えて先任宅へ同行し、ミーアムトゥ（外間、久高両ノロ家、外間殿）を庭先から拝んで、ピシクミをする旨のワーンネー（ご案内）をして帰宅。海支度をして先任宅へ同行して徳仁へ。棹、サシカを船の先方に、先任のは左舷、新任のは右舷に積み、サシカは前サシカの上に置く。出港8時、カベール崎東側でアンカーを下ろして浜小へ向かい、拝礼して各自棹で海底を突く。アンカーを揚げ、「スアーキ」[ˈɾaːki]（ターキ）へ。小島東側にてアンカーを入れ、小島へ拝礼して海底を3回棹で突いてから漁をする。帰りも操船しながら小島を望拝する。刺身を切って浜小でアンカーを下ろし、刺身9切れを2つに盛って浜小下り口、下より向かって右側の岩の下に置き、拝礼してから拝食し、帰る。漁をして獲れたウタカムン（御捧物）を外間スォールイは外間殿、外間ノロ家2組、同掟神、根神、根神掟神、外間ノロ掟神、インナヤ、イチャリ小、ハナマン、アカツミーの13組作る。久高スォールイは久高ノロ家と自分のを持って帰り、身を清めて正装し、久高ノロ家に届けてから自分ののを配る。香12本を焚き、捧拝する。

【ハシャ「キー」[hafaˈki:]。5月25日。旧暦4月13日】午後1時、村頭の妻よりワーンネー（ご案内）があり、先任宅へ行き、共に外間殿スアムトゥ庭に右よりアカツミー、先任、新任、の順に座る。殿の中では外間ノロによる健康祈願が行われ、直会が済むと村頭がウスルクイ3皿に酒カンビン2本、フワーシブン（円高膳）に載せ、ウブン9碗を平膳に載せてウッチ小に行き、ソーチキ石の前でアカツミーが祈願し、そこでも直会があつて外間殿へ戻る。外間殿では、ハシャキーのお握りを貰って帰宅し、12本の香を焚いて拝礼する。

【「ハンジャナシー」[ˈhanʃanaʃi:]＜ニライカナイ神の来訪＞。5月26日。旧暦4月14日】午前5時起床。未明のウチャトー（御茶湯）と共に12本の香を焚き、ハンザナシーへの報告をして5時45分、先任宅へ。共に外間殿へ同行。大西銘の石垣の前で東より、ハナマン、アカツミー、カニーの神、先任、新任、村頭、の順で座す。六時30分に終わって帰宅。

【「ムリバー」[ˈmuriba:]。5月27日。旧暦4月15日】午後1時半、妻ウブンを外間殿より取ってくる。正装して12本の香を焚き、先任宅へ。外間殿へ同行してスアムトゥ庭で、東より新任、先任、ハナマン、アカツミー、ハニー神、兄村頭、弟村頭、の順で座し、巫女達がウプグイ（大庫裡）の前で祭り終了の拝礼をして所定の座に戻る。ウブンで作ったお握り、刺身、揚げ魚で直会がある。5時35分頃終わり、先任とイチャリ小、両ノロ家を拝礼して帰宅。12本の香を焚き、神棚を拝礼する。6月19日（旧暦5月9日）、先任来宅。5月祭のフカラク魚10尾貰っておくようにとのこと。6月20日（旧暦5月10日）、福治友行君にお願いし、21日、久高丸組よりガツン10尾、友行君が届けてくれる。5尾ずつ組作り、冷蔵

庫に保管する。

【グン「グワティ-マブッチマティー」[gʊŋˈgwati-mabutʃimati:]。6月24日。旧暦5月14日】  
7時、フーグーンバイ供えして拝礼する。7時40分、正装して12本の香を焚き、拝礼する。  
先任宅へ同行して外間殿の所定の場所に座す。8時、外間ノロ、ウヤウンシャク、新スアムトゥになる西銘恵美ら車でヤグルより帰る。しばらくして祭り始まり、1月祭り同様ウブンの配膳があり、祭りが終了してからスアムトゥ庭の前に新スアムトゥ外6名の巫女と男神のハナマンアカツミー、カニー、ニブスウイ、両スォールイ、スウシノーイ巳の人1名、横一列に並んで合掌してから4回のウヌ拝（立って合掌すること）をする。それからウドウン庭でも同様の祭事が行われ、終わって外間殿へ戻り、マブッチを拝して帰宅する。  
9時15分。

【ユーマティー「[ju:mati:] 6月24日。旧暦5月14日】午後4時30分、12本の香を焚いてから先任宅へ同行して外間所定の場所に座る。お神酒の拝食を済ませて御殿庭へ外間殿のと同様に済まして外間殿、イチャリ小、両ノロ家を拝礼して帰宅。

【ユーマティー「[ju:mati:] 6月25日。旧暦5月16日＜早朝実施＞】午前5時起床。朝のウチャトー（御茶湯）を捧げ、祭りの報告をして礼拝する。5時50分、先任宅へ同行して外間殿へお神酒の拝食をしてから御殿庭でも同様に行われる。終了後、男神職者と外間殿へ。スアムトゥ庭で並び拝礼する。両スォールイはイチャリ小と両ノロ家も拝礼して帰宅。

【ミンニーソージー（壬の清掃）。7月3日。旧暦5月23日】5時30分、ミンニーソージーへ。掃除終わってから、徳仁へ行き、棹立て岩に拝礼して左回りで棹立て岩とマラチャ石を3回ずつ海水で洗う。

【「キシクミグ「イ」[kiʃikumiɡuˈi]。7月10日。旧暦6月朔日】6時15分、先任妻が米を持って来宅。両方より1升5合ずつ出して混ぜ、1升ずつを3つ量り、1合ずつ取って9合バナにし、3アムトゥへ捧げる。6時30分、正装して12本の香を焚き、礼拝してワーンネー（ご案内）へ先任と外間、久高両ノロ家と外間殿を拝礼し、宮平角、吉次郎屋角、中ん屋角、サブシ角、金城角の5箇所「ユイムン ティリンソーリ」（寄ってくるものを獲って下さい）と唱える。7時20分、12本の香を焚き、海支度をし、棹、網、サシカ、櫓を担ぎ先任宅へ同行してユランマの浜へ。7時45分頃、船を下ろし、カベールへ。浜小で停止し、両名浜小を拝してからウパーマワタジまで行き、暫くアンカーを下ろす。30分程停止してアンカーを揚げ、ラパチャ口まで行き、引き返して浜へ戻り、船を揚げて登口左側にテント（天幕）を張り、帰宅して着替え、天幕の下で出漁した船の帰港を待つ。外間ヌンルチ組より1升5合くらい、未義組より1升くらいのウタカムン（捧物）あり。3時20分頃、先任妻来宅。ウタカムン（捧物）配りへ出かける。両スォールイ汁椀1杯ずつを配られ、正装して12本の香を焚き捧げて拝礼する。妻達は3アムトゥと根神家、それに神職者の屋号メーンラカリ、メーンシム、ミーヤー小、以上中椀1杯ずつ。インナヤ、ゲンゾーヤー、ヘイゴローヤー、イサムヤー、東チマラー、イチャリ小、シルサーヤ、メーンシム小、ウッチ、後グイク、ウブンシン、小碗1杯を配る。なおフバヤク用として3升、新任

宅で保管する。

【二日目「ミグイ」[「miguï」<海回り>。7月11日。旧暦6月2日】午前7時20分、12本の香を焚き、海への支度をし、棹を担いで先任宅へ。2日目からは、棹は持たないとのことで帰宅して棹を戻し、昨日のコースを回る。1日と同様出漁船を待ったが各船ともパライ（漁獲なし）だった。

【「ミグイ」[「miguï」<海めぐり>。7月12日。旧暦6月3日】前日同様の行動をしたがパライ（漁獲なし）。

【アムトゥ初ウガミ。7月14日。旧暦6月5日】明日のクカーウーの魚購入に与那原へ行き、4時の船で帰る。2番目生まれのシナグラに明日の祭りでの出場を告げる。

【ルクグワティマティー[rukugwati「mati:」]。7月15日。旧暦6月6日】3月祭り同様ウブンの準備をする。午前5時45分起床。6時20分、12本の香を焚き、拝礼して先任宅へ。途次村頭の糸数清太郎が「ミキ ハカラシソーレー」を謳っていた先任と同行して外間殿へ。所定の所に座る。暫くして村頭の先任が「ウトゥチン ナイビタン ウナーチ ウンティ ケーサビラ サーレー」とふれる。10分ほどしてノロ以下巫女ら集まる。7時10分より祭り始まり、3月祭り同様、地ンバイ、お神酒、ウブンの順で外間殿を終わり、御殿庭へ。そこでも同様に行い、8時20分終了。帰宅、12本の香を焚き、神棚にウブンを供えて拝礼する。10時45分、妻ウタキ（御嶽）より帰宅する。12本の香を焚き、祭ダカディ徴収へと先任宅へ。すぐ徴収へと出発し、台湾屋（屋号）東道にて別れ、12時30分終えて帰宅。昼のウチャトー（お茶湯）を捧げて拝礼する。

【「ユーマティー」[「ju:mati:」<夕祭り>。7月15日。旧暦6月6日】午後3時30分、クカーウー魚束ねて準備する。4時30分先任宅。今日のシナグラ信夫君へ5時15分前に来るよう電話する。4時45分（ミキ ハカラシソーレー）が謳われていた。すぐ信夫を呼ばせ、魚を担がせ、外間殿へ。所定の位置に座る。お神酒を拝飲、配膳を終えて後、シナグラに魚を担がせ、東向きに3月祭り同様に並び、シナグラは両スオールイの前に立たせ、全員東方に合掌してからシナグラに「クカーウー」と大声で叫ぶ。外間殿を終え、御殿庭へ5時50分、御殿庭を終えて帰宅。神棚を拝礼し、暫く休んでから魚切り始める準備をする。煮魚が冷えてから3月祭同様配分し、名札を付して終わる。

【「ユーマティー」[「ju:mati:」<早朝>。7月16日。旧暦6月7日】午前4時45分起床。5時10分正装して12本の香を炊き、ウチャトー（お茶湯）を捧げ、祭りの報告をする。5時40分「ミキ ハカラシソーレー」の「サーレー」を聞く。5時45分先任宅へ。外間殿へ行き、所定の場所に座る。6時5分、祭り始まり、3月祭りの2日目の祭りと同様な儀式が行われる。6時50分御殿庭での同様な儀式も終わり、神職者らと外間殿へ戻り、外間殿に拝礼し、両スオールイはイチャリ小、両ノロ家を拝礼して帰宅し、7時香12本を焚き、ウブンを拝して祭りの終了を告げる。7時24分、先任夫妻来宅。3月祭り同様のスウィケーをする。それから徴収した祭りダカティの決算を終わり、先任夫妻帰宅する。10時55分村のウガミへのワーンネーが村頭の妻よりあり。先任宅へ、先任と同行して外間殿スアムトゥ庭

にて西よりアカツミー、前任スォールイの順で座す。殿では外間ノロ、掟神と女神職者による初拝みが3月祭りの2日目の村の初ウガミ同様の儀式がある。終わって帰宅し、ウブンの来るのを待つ。12時7分ウブンが来たので香12本を焚き、ウブンを拝する。

【「キシクミグ」イ[<sup>h</sup>kiʃikumiɡu<sup>h</sup>i]＜キシク回り＞。8月9日。旧暦7月1日】6時5分、12本の香を焚き、朝のウチャトー（御茶湯）を捧げ、ワーンネーへの報告。6時25分、正装して神棚を拝し、ワーンネーへ。前任来宅。共に外間、久高両ノロ家、外間殿に拝礼し、旧6月1日同様、前回の角で「ユイムン ティリーンスーリ」を謳い、帰宅。6時45分、神棚に拝礼し、7時20分海への支度をして棹、サシカ、網を担ぎ先任宅へ。共に浜へ。船を下ろしカベールへ。浜小を拝し、ウパーマワタジまで行き、引き返して来て船を揚げ、天幕を張って出漁船を待ったがパライ（漁獲なし）。台風接近で午後波高くなる。

【8月10日。旧暦7月2日】天候不良。7時、先任宅へ行ったら、早速東海岸のピザへ。ピザよりカベールにスァンカー（真正面の方向）をとって遥拝する。出漁船なし。

【8月11日。旧暦7月3日】前日同様、ピザよりカベールにスァンカーとって遥拝す。

【「ウプフシュズリー」[<sup>h</sup>ʔu<sup>p</sup>ʔuʃuʒuri:]＜大主集まり＞。8月24日。旧暦7月16日】

ここでは、「ウプフシュ」[<sup>h</sup>ʔu<sup>p</sup>ʔuʃu]は数え51歳から70歳までの男子の称。午後5時半、公民館に集まり、7月綱（ディナ）の出漁の話し合い。ウプマーミキの前にも出漁できないかとのことで、アムトゥ（ノロ家）へ、ムンナレー（ご教示いただくこと）に行き、翌日17日にも出漁。ウタカムン（御捧物）を捧げられるとのことで、17日出漁することに決定した。

【シティグワティ「ディナ」[ʃitigwati<sup>h</sup>dina]＜7月綱＞。8月25日。旧暦7月17日】午前8時、公民館へ集まり、出漁できるかどうか話し合い、出漁できるとのことで帰宅し正装して両ノロ家、外間殿へ7月綱出漁のワーンネー（ご案内）の拝礼をして帰り、出漁準備し、棹を担いで先任宅へ。棹を船に置き、網の準備をして10時ごろ出漁。カベールを拝し、サーキ小島も拝す。グルクンリガマより南へ3網を入れ、約100斤位をスォールイ船に乗せてカベールへ。網船は残って、後2回位網を入れて帰る。スォールイ船はカベール東側ワリ小に於いて船を繋ぎ、刺身を切って浜小で礼拝して東側岩下で昼食をとって浜に帰り、船揚場に天幕を張り、魚を下ろす準備をする。網船も帰港したので魚をスォールイ船に移し、スォールイ船を天幕の中に揚げ、魚を下ろしてウタカムン（捧物）13を作り、外間スォールイ11組、久高スォールイ2組を作る。自分の分、2組のウタカムン（捧物）を持参して帰宅。水浴し、正装してウタカムンを棹で担ぎ、久高ノロ家へ捧げて帰り、スォールイのを高膳に載せ、神棚に供えて香12本を焚き、奉拝する。外間スォールイの11個は、外間ノロ、外間殿のほか神職者のも含まれる。妻と車で配っていく。

【スァーラヌ「クチアキ」[ra:ranu<sup>h</sup>kuʃiaki]＜俵の口開け＞9月1日。旧暦7月24日】午前6時15分、前任妻米10キロ入り袋持参して来宅。弟妻も10キロ袋出し、9合花を両ノロ家へ奉納。3合は両スォールイのウブン用、お神酒用。8升5合はウタキ（御嶽）へ、3合はウチャギヒヤーシ。1合位。ウコウ（御香）、両スォールイより6束。昼食用米5合を取

り、残りは両家で分ける。

【「ウプフマーミ」キ[ʔupΦuma:miʔki] (大マーミキ祭)。9月2日。旧暦7月25日】午前6時10分、前任妻来宅。6時20分、両妻マーミキを持って3アムトゥ、イチャリ小、根神にはお碗2杯宛て。ノロ、根神の掟神にはお碗1杯を捧げる。バケツ3杯のお神酒のうち、ウタキ（御嶽）への分（バケツ1杯）は新任宅に置き、祭り用として前任妻が外間殿へ、新任妻がウドゥンミヤー（御殿庭）へ、各バケツ1杯ずつを届けておく。午前7時30分、外間ノロの掟神西銘シズさん来宅。祭りに出るよう謳いに行かれるとのことで、正装して12本の香を焚き、前任宅へ。共に外間殿へ。所定の所に座る。いつもの祭り同様、お神酒捧げがあり、終わって御庭へ。そこも終わり、イチャリ小、両ノロ家を拝礼して帰宅する。正午よりスォールイダカテ徴収へ。ショーニン（正人）、ウプフスー（大主）組を除き、1人50円を徴収する。夕方、前任来宅。徴収金は10,650円から酒、菓子代410円、米代5,890円、車賃2,000円を差し引き、4,350円を1人2,175円宛て配分する。

【ニーン「スウキヌ ウグワン[ni:nʔθu kinu ʔugwan]〈スォールイの健康祈願祭〉。9月15日。旧暦8月9日】午後6時30分、前任来宅。本来ならアムトゥよりワーンネーがあり、新任が前任宅へ出向いて行くのだが、掟神の西銘シズさんが前任へ連絡があったそうで、前任が来宅したのである。夕方のお酒をお供えして拝礼し、外間ヌンドゥチ（外間ノロ家）へ。室内では前任右、新任左に座る。ノロ掟神相対してスウイケーを各3回して、「ウユー」を拝食して庭に出て東方のカベールを遥拝し、又相対してスウイケーし、「ウユー」を拝食してから久高ヌンドゥチへ。此处では新任が久高スォールイであるので新任が右側になる。久高ノロ家とも同様な行事で終わる。

【スォールイ「マカネー[θo:ruɪʔmakane:]（八月祀り スォールイマカネー）〈スォールイおもてなし〉。9月12日。旧暦8月10日】午前7時30分、シナグラ来宅。桶を担がせ前任宅へ。7時50分、スォールイマカネー。外間より始まり、前外間、宮平、仲西銘、4軒分のお神酒を外間殿備え付けの桶に移させる。続いて前西銘小、竹秀屋、東り門、海軍屋の4軒分を御殿庭備え付けの桶に移させる。帰宅してからアサマティー（朝祭り）で前任宅へ同行して外間殿へ。祭り始まり、お神酒捧げを終え、御殿庭。終了後帰宅して昼のお茶を捧げる。午後1時、シナグラ来宅。桶を担がせ、前任宅へ同行して前西銘より始まり、三男イリーチャリにらい荘、新外間の4軒を量り、外間殿の桶へ移させる。江口、シューマイ、前ゾーチマ、イビンミー、4軒を回り、御殿庭の桶に移させる。午後4時、前任と同行してタマティーへ。外間殿を終え、御殿庭へ。祭りを終え、ピンヌースンヌーのティールルが始まる。続いてウスデークがあるが、今回それがなかった。

【「ヨーカビー[ʔjo:kabi:]。9月17日。旧暦8月11日】午前7時、シナグラ来宅。桶を担がせ前任宅へ同行して東内間より始まり、大福治、前ミーヤ小、大里小、4軒を量り、外間ヌンドゥチへ行き、はじめ枡1杯を量り、後6杯は少しずつ、計7杯とする。久高ヌンドゥチでも同様量るとのことだった。お神酒が足りなかったので武四屋、ナサー屋を回り、2軒分を足して久高ヌンドゥチに行き、外間ヌンドゥチ同様7杯量る。アカチュー屋、浜前

崎2軒を回り、スウイケーをしてお神酒は午後量ることにして9時30分に終わり、帰宅して桶を洗う。11時10分、正装してボーンキヤーへ。先任宅へ同行してボーンキヤーでウタキ（御嶽）からノロ、巫女が来たので、出迎えて巫女らが踊る。外間殿でも踊り、それからウスデークをすることになるが、12時になったので帰宅し、昼のウチャトー（御茶湯）を捧げる。午後1時、ンナグラ来宅。早速桶を担がせ、先任宅へ同行してアカチューヤー、浜前敷を量らせてサブシへ。そこから石グルミ、カマレー屋、イケ屋を量り、竹次屋、ツンナーヤはスウイケーだけしてお神酒は明日量ることにし、御殿庭の桶に移させて終わる。午後4時よりタマティー、八月グルイ（ウシデーク）の後、カチャーシで終わる。なお、アカツヤー、浜前崎、サブシの3軒分は外間殿の桶に移させる。

【「テラーガーミー」[te:ra:ga:mi:]＜健康祈願。お祓い。「太陽拝み」の義＞9月18日。旧暦8月12日】午前中、15歳から50歳までの男の人達がアンティキヤー（追い込み漁に出漁して獲った魚をスォールイが3アムトゥ（外間殿、両ノロ家）にウタカムンを届ける。残りは、夕方の浜での酒宴の刺身にする。夕方、51歳から70歳までの男がハンチャタイ（神畑）に集合し、根人を先頭にテラーガーミーのティルルを歌い、ユランマの浜に下り、そこから御殿庭まで行く。太陽神に島人の健康と島の守護を祈願する儀式である。午前6時正装してウチャトー（お茶湯）を捧げ、6時35分棹を担ぎ先任宅へ同行してユナンマへ。お神酒置き場のカジマヤーの所に先任上、新任下に棹を置き帰宅。7時、ンナグラ来宅。桶を担がせ、竹次ヤー、ツンナーヤーを量らせ、町屋福治、メーシムまで回って4軒分を下の桶に移させる。前ウイチマ、タンナハ、三男ツンナーヤー、グイクの4軒分を上上の桶に移させる。ニブ門、西西銘、諸見里、台湾ヤー、4軒分を中の桶（スォールイ桶）に移させて帰宅。10時半ごろ先任来宅。出漁船帰港したとのことでウタカムン取りに行く。エー3尾ずつ3組作り帰宅して正装し、ウタカムン捧げに行く。久高ヌンドウチにウタカムンを届けて帰宅。3時45分、ティーラーガーミー準備して先任宅へ、ハンチャタイの行事に参加する。

【八月十五日（十五夜）。9月21日。旧暦8月15日】外間殿のデイゴの木と外間家の石垣に竹棹を渡して、アカミョーブとその横に提灯3個が下げられる。月の出る時刻に十五夜の拝みが始まる。それが済むと場所を拝殿前に移し、2箇所で行う。また、外間殿と外間ヌンドウチ（外間ノロ家）の香炉を外間殿の登り段の下に置き、ウコー（御香）を割って香炉一杯に立て、島中の人々の健康を祈願する。祈願後、正人（15歳から70歳までの男子）1人に3個ずつの餅が各家庭の人数分配られる。その際には、スォールイはスェムトゥ庭で参加する。

【「ハンザナシー」[handzanafi:]（お祓い）10月23日。旧暦9月18日】午前5時、朝のお茶湯と共に香12本を焚き、ハンザナシーを報告。6時10分、先任宅へ同行して外間殿へ。早かったので外間梅子宅で休む。ノロ、巫女ら来場したので大西銘前で北側よりハナマン、カニー神、先任、新任の順で座る。6時55分終了して帰宅。

【ムリバー[muriba:]10月24日。旧暦9月19日】2時、妻がウブンを取ってきたので、12本を

焚き、礼拝す。午後4時15分、12本を焚き、礼拝し、先任宅へ同行して外間殿スアムトゥ庭にて新任東より先任、ハナマン、村頭の順で座す。終わってウシジリを拝食した後、外間殿、イチャリ小、両ヌンルチ（両ノロ家）を拝礼して5時20分、帰宅。

【マーミキグワーワンネー（ご案内）。11月14日。旧暦10月10日】午前7時30分、先任妻来宅。両妻、両ヌンドウチ（両ノロ家）にマーミキ小のワンネーに行く。

【スアールヌ「クチアキー」[ra:ranu「kuʃiʔaki:」]（俵の口開け）。11月19日。旧暦10月15日】午後1時半、両ノロ家へ9合花を捧げる。朝の内に捧げるべきを、その日は赤口にて午後に捧げる。午後3時40分、先任妻がウブンを持ってくる。正装して12本を焚き、奉拝す。

【ニーン「スウキヌウグワン」[ni:n「θu kinuʔugwaŋ」]11月19日。旧暦10月15日】8月のウプフマーミキ（大マーミキ）の時のニーンスウキヌウグワンと同じ順序で行われる。

【「マーミキグワー」[ma:mikigwa:]（マーミキ小祭）11月20日。旧暦10月16日】大マーミキ祭と同様、妻らは早朝お神酒を持って3アムトゥを初め、神職者宅へお神酒を捧げる。7時半、先任宅へ同行して外間殿へ所定の場所に座る。「ニブスウイ」[nibu θu i]（ニブトリ）と村頭参加しないので、ウンサクがお神酒注ぎをする。いつもの祭り同様お神酒捧げが行われ、外間殿を終え、御殿庭でも外間殿同様にして終わる。外間殿へ戻り、「スアムトゥ庭にて東より新任、先任、ハナマン、アカツミーの順で座し、拝礼する。そこから両名、イチャリ小、両ノロ家を拝礼し、帰宅する。11時15分、先任来宅。祭ダカテ徴収に出かける。一戸当たり100円で、外間スォールイ5,300円、久高スォールイ4,300円、計9,600円、必要経費5,550円、差し引き4,050円を二等分にして2,025円ずつを各自保管する。

【スォールイ交代。西銘喜盛氏（久高スォールイ）。11月6日。旧暦10月14日】午後5時、新スォールイ宅よりユナイ神準備しているとの電話あり。正装して待つ。5時30分、新スォールイユナイ神来宅。お茶スーキを出す。前任スォールイ、及びユナイ神、新スォールイユナイ神と相對して座す。お茶スーキを拝食した後、前任香1束を焚き、香炉に立て（倒れないよう深く埋める）、別の盆にのせ、外で待つ新任のユナイ神に渡し、網を持ち、外に出てウドウン（御殿）より棹を担ぎ、新任ユナイ神、前任とそのユナイ神の順で新スォールイ宅へ、新スォールイ香炉を受け取り、自分の香炉に移し、灰も3回取って入れる。外へ出て棹を取り、アダン内側枝へ立てかけてから取って担ぎ、先任の後ろに立ち、拝礼して棹を、前任は外枝へ、新任は内枝に立てて、前任前になって家に入り、前任上座、新任下座に座す。お茶スーキが出され、お茶スーキを拝食する。新任と妻、香12本ずつをミティムン、トゥパシリ、トゥク（床神）へ焚き、新任も12本を焚く。ウユー9碗が出される。掟神が不在でウブン捧者がノロ、根神、アシンチャ（アシクム）に載せて捧げる。掟神のは捧者が取って置く。両スォールイは各自で受け取り、拝食する。ウユーが余ったのでユナイ神にも捧げられる。ウユーの拝食が終わったらハチマキ（はくく帛、はちまき）を新任へ渡す。新任ハチマキ（はくく帛、はちまき）を被り、先になって外へ出て互いに棹を取り、前任前に、前任後に立ち、両人の棹を重ねて担ぎ、その間外間ノロの、スォールイ交代の祈りが済んだら、新任外側、前任内側に棹を立てて、前任前にして家に入り、

新任上座、前任下座に入れ替わる。(その際、スーキーを入れ替えさせる)。新任及び妻、香12本ずつ焚き、ウブンの配膳が始まる。その後の儀式は昭和57年、新任拝命時のスォールイのナイハワイのを援用する。退任スォールイのところでも退任満期の祝いが遅くまで催される。

【スォールイ網仕立て。11月30日。旧暦10月26日】 8時30分、新任正装で来宅。共に外間殿へ同行。庭先で拝礼してから庭で蓆を敷き、前任左、新任右にて東方に向いて拝礼した後、網15プシ(節、網の目、1目の意)、3回りずつ作り、新任をおいて前任後大里に行き、拝祈して来てから外間ノロ家より左回りさせる。

【12月3日。旧暦10月29日】 午後、スォールイ網取りに台湾屋へ。長正氏網を持参。神棚にて保管。

【12月10日。旧暦11月7日】 9時、正装で網浮き、あしを持ち新任宅へ。新任神棚を拝し、お茶を飲みながら共にうき、あしを付けて仕立て、家に持ち帰って網の取替えをする。前任から引き継いだ網は、翌日前任の西銘順昌氏に返済する。スォールイ網は、外間スォールイが新任のとき仕立てるのである。

スォールイは、村頭を経て就任する掟だが、福治友行氏が最後の村頭であった。後に続くものがいなくなり、いてもなりたがらず、従って最後のスォールイ加那志も旧暦10月中旬のマーミキ小の日に終わることになる。500年前の尚真王時代に聞得大君を頂点とする神女組織が出来たが、それは中央集権の祭政一致によるもので、スォールイの制度もその頃からあったと思われる。そうであれば、500年の間スォールイ神は島人の中で敬神されていたのが消滅するのである。イザイホー然り。昭和52年戊午の最後のイザイホーを願って参加したナンチュも今は60歳を越えてスァムトゥである。この少人数が後4、5年で70際になると祭りも自然消滅を迎えるであろう。時代のしからしむるところとは言え、島で生まれ育った者にとっては、島の祭祀共同体の今後を思うと、寂寥の感を禁じえない(平成14年7月25日。福治友邦)。